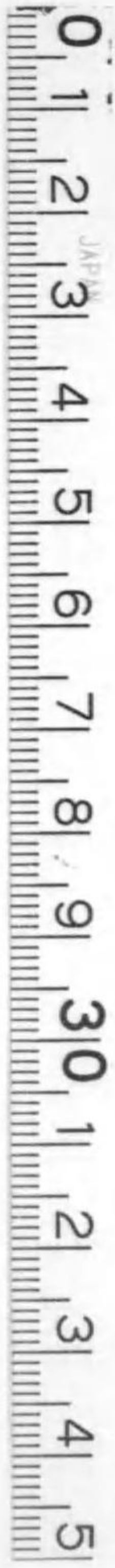


322

463



始



28. 9. 17

森山右一著

文檢  
受驗用

史記選釋

大正

15. 5. 14

內交

內務省  
15.5.10  
正本

東京

大同館藏版

322-463

### 小序

支那の文苑は廣く、史林は深し。而して史記は支那第一の達文也。史記は支那第一の正史也。支那にして史記を有するは東洋の誇也。之を讀むにあらざれば共に支那の文學を語るべからざる也。之を讀むにあらざれば、共に東洋の歴史を論ずべからざる也。

然れども史記總べて百三十卷。尋常の勉強にては其の通讀だも容易の業にはあらざる也。況や其の要點を捉へ、妙味を窺はんとするをや。茲に於てか、選擇の要はあり。吾人、我が國未だ曾て此の大冊史記にして、選擇無きを嘆ずること久し。乃ち聊か感ずる所ありて、未だ堂に上らず、室に入らずと雖も、その佳章名篇を嚴選し、以て梓に上せんとす。夫れ希くば漢文及東洋史研究の初學者の爲め、史記の特徵と、史記の要點とを暗示するに近からんか。

本書を纏むるに當り、直接參考に供せし主なるものは、史記列傳講義(興文舎本)を始め、史記評林、漢文大系史記列傳、高等漢文史記、史記助字法等なり。特に附記して、

小序

謝意を表すると共に、その據る所を明かにすと云ふ。

大正十四年霜月上浣

於鴻城下 撰者 識

例言

- 一、本書の抜粹は列傳六十七篇最も多く、世家三篇、本紀五篇共に少し。これ最も文學的價値に富めるは列傳にして、世家、本紀は項羽本紀を除くの外、概して名文に乏しければ也。
- 二、選釋の標準は専ら(1)最も文學的價値の豊なること。(2)最も語學的價値(語法及篇法上)に富めること。(3)最も史實上興味ある場面乃至事件たること。の三條件に據れり。
- 三、本書選釋の程度は大體(1)漢文及東洋史等、文檢受験の準備。或は(2)中學校高等諸學校の漢文教科書參考及び(3)補充的自習讀本の心算に置きたるなり。
- 四、各篇の「標題」は相當の苦心を傾け、一篇の眼目を採らんことに力め、大意はそれを助け、以て一篇の意の把握に便ならしめたり。
- 五、原文中、長きものは、第一小段、第二小段等を設けて、一篇の結構、議論、敘述の進展を、一目瞭然ならしめんことに注意せり。

六、語釋は史記の特徴たる故事熟語の多くを中心とせり。通釋と共になるべく詳密を期せんとして、興文舎本の所説に據れる所多し。文體文語を用ひしは語氣語調と簡潔とを重じたるが爲なり。

七、卷末に附せる故事熟語選は、史記全班に亘りて最も著明なるもの百二十五を抜きて整理したるものなり。

八、本書に選載せる文章にして、真に我がものとならば、史記は先づいづれの場所と雖も、推讀さるべきに近からん。

# 史記選釋 目次

## 第一、史記解題

- 史記の作者……………一
- 史記の名義……………二
- 史記の體裁……………三
- 史記の文學的價值……………六
- 史記の史學的價值……………七
- 史記の來歴……………八
- 史記の註釋書……………九

## 第二、項羽本紀

- 項羽戰於鉅鹿……………一〇
- 鴻門會(上)……………一二

目次

- 鴻門會(下)……………一六
- 項王軍壁垓下……………二二
- 項王乃欲東渡烏江……………三三

## 第三、蕭相國世家

- 諸君知獵狗乎……………三六

## 第四、曹相國世家

- 曹參代之守而勿失……………三六

## 第五、留侯世家

- 夜彊忍下圯取履……………三三

## 第六、伯夷列傳

- 伯夷、叔齊義不食周粟……………三三

第七、管晏列傳

○管鮑貧時之交……………三七

○晏子及越石父……………三九

第八、司馬穰苴列傳

○景公與穰苴語兵事……………四二

第九、孫子吳起列傳

○孫子試兵法于婦人……………四六

○孫子教重射及擣虛術……………五二

○吳起自吮卒之疽……………五五

○吳起與田文論功……………六〇

第十、伍子胥列傳

○伍奢有二子皆賢……………六四

○日暮塗遠……………六八

○樹吾墓上以梓……………七一

第十一、商君列傳

○衛鞅說公以竊道……………七四

○衛鞅定變法之令……………七八

第十二、蘇秦列傳

○豈能佩六國相印乎……………八三

第十三、張儀列傳

○張儀說連衡……………八五

第十四、孟嘗君列傳

○受命於天乎將受於戶乎……………八九

○鷄鳴狗盜……………九四

○長劍歸來乎……………九九

○不見夫朝趨市者乎……………一〇五

第十五、范雎蔡澤列傳

○范雎上書……………一〇八

○亢龍有悔……………一二三

第十六、樂毅列傳

○燕惠王讓樂毅……………一二六

○樂毅上書之一節……………一二八

第十七、廉破藺相如列傳

○相如奉璧入秦……………一三三

○滏池會……………一三七

○兩虎共鬪其勢不俱生……………一三〇

○兵死地也……………一三四

第十八、田單列傳

○田單火牛……………一三七

第十九、魯仲連鄒陽列傳

○明月之珠、夜光之璧……………一三九

第二十、屈原賈生列傳

○懷沙之賦……………一四三

第二十一、刺客列傳

○風蕭々兮易水寒……………一四八

第二十二、蒙恬列傳

○用道治者不殺無罪……………一五二

○必參而伍之……………一五五

第二十三、張耳陳餘列傳

○鉅鹿城中食盡兵少……………一五八

第二十四、淮陰侯列傳

○韓信始為布衣時……………一六〇

○背水陣……………一六三

○猛虎猶豫……………一六九

○上與信言諸將能不……………一七三

○跖之犬吠堯……………一七四

第二十五、酈生陸賈列傳

○沛公麾下騎士……………二六

○陸生時々前說稱詩書……………二八

第二十六、袁盎黽錯列傳

○袁盎病免居家……………二八

○黽錯已死……………二八

第二十七、張釋之、馮唐列傳

○釋之從行登虎圈……………二八

○以北山石爲榔……………二九

○法天下公共也……………二九

○釋之跪而結轡……………二九

○吾每飯意在鉅鹿……………二九

第二十八、李將軍列傳

○李廣程不識皆爲名將……………二九

○廣佯死以脫……………二七

○見草中石以爲虎……………二九

○得賞賜輒分……………二九

○廣與望氣王朔燕語……………二九

第二十九、匈奴列傳

○冒頓乃作爲鳴鏑……………二六

○歲正月諸長小會單于庭……………二六

第三十、衛將軍驃騎列傳

○元狩四年春上令青病……………二五

第三十一、汲鄭列傳

○暗時與湯論議……………二八

○陛下用群臣如積薪……………二九

○譬若奉驕子……………二九

○黯不受太守印願中郎……………二七

○鄭莊以任俠自喜……………二四〇

○轅固生與黃生爭論景帝前……………二四四

第三十二、儒林列傳

○齊魯好禮樂之國……………二四七

第三十三、酷吏列傳

○孔子曰導之以政……………二四九

第三十四、貨殖列傳

○太公望封於營丘……………二五三

○陶朱公……………二五六

第三十五、太史公自序

○嘗竊觀陰陽之術……………二五八

○附錄、史記「故事熟語」選……………二六三



文檢  
受驗用  
史記選釋

森山右一撰著

一 史記解題

一 史記の作者



史記は司馬遷父子二代の著作也。遷の父談、夙に古今を通じて一貫せる歴史の備はらざるを嘆じ、これが編纂をなさんの大志を抱く。然るに疾病卒に復び起ち難きを知るや、其の子遷に遺命し以て其の志を紹介がしむ。談卒して後三歳、遷太史令の職を襲ぐ。乃ち宮廷の府庫、既に父談の剪裁せんとせし幾多の史料ありしを利用し、箕裘の業に向ひて懸命せり。かくて漢武の太初元年を以て、これが編纂に着手してより二十餘年。司馬遷六十餘歳を以て遂に筆を終へぬ。其の間に友人李陵の禍に逢ひ、遂に牢窓に月を見たりと雖も、彼の剛心屈するなく、悲憤進りて百勇を生み、この事却つて一百三十

卷、五十萬言の大著の功を早からしめぬ。

司馬遷、字は子長、龍門（陝西省漢中道韓城縣）の人。孝景帝の中元五年（BC・一四五）頃生る。傳へ言ふ。年十歳にして能く古文を誦し、二十にして四方に歴遊し、或は偉人傑士に逢見し、或は名山大川に登臨し、以て河岳英靈の光景を綜覽し、或は地方の風俗を概察し、以て大いに識力文氣を養へりと。實にや、史記の奇幻なる篇法、跌宕なる字法、透徹の史論、或は皆この四方周遊中に感得せしものならんか。寔に史記は正史の祖、紀傳體の權輿、二十四史の冠冕にして、文學上より見るも、史學上より見るもその價值赫々たるものあり。噫。司馬遷は實に一代の文豪にして千古の良史なる哉。司馬遷の卒去は其の年代を詳にせず。

尙史記實際の筆寫は遷一人なりと雖も、内十篇は未完成のものを後に褚少將補へり。褚少將は潁川の人。漢の元帝成帝間の博士、儒學を以て知らる。

## 二 史記の名義

「史記」とは元、史官の記録の義なり。即ち歴史といふに同じき也。されば普通名詞なる筈なるを、固有名詞、司馬遷の著書「史記」とは呼ばるゝに至れり。これ三國以後の事也。漢代にはこの史記を

呼びて太史公書、若しくは太史公記と稱せり。史記中「史記」なる文字見ゆれども、こはいづれも先秦の歴史の義也。

「三國志」王肅傳に「司馬遷著史記」の文字あり。又「後漢書」にも班彪傳に「司馬遷作史記」の文字見ゆ。これ恐らく司馬遷の著を史記といひし初めならんか。爾來一般に「史記」とは呼ぶに至れる也。

## 三 史記の體裁

太史公自序にも述べたるが如く、「史記」の内容は上黃帝より、下前漢の武帝時代迄凡そ二千數百年の通史なり。分ちて、十二本紀、十表、八書、三十世家、七十列傳の五部、通計一百三十卷より成る。今其の體裁の大略を述べんか。

第一、十二本紀（帝王の功業を述ぶ。卷一—卷十二）。

（1）五帝（2）夏本紀（3）殷本紀（4）周本紀（5）秦本紀（6）始皇本紀（7）項羽本紀（8）漢高祖本紀（9）呂太后本紀（10）孝文本紀（11）孝景本紀（12）孝武本紀

第二、十表（世系、歲月を詳かにす。卷十三—卷二十二）。

（1）三代世表（2）十二諸侯年表（3）六國年表（4）秦楚之際月表（5）漢興以來諸侯年表（6）高祖功臣侯者年表（7）惠

景問侯者年表 (8) 建元以來侯者年表 (9) 建元以來王子侯年表 (10) 漢興以來將相名臣年表

第三、八書 (制度文物を明にす。卷二十三—卷三十。)

(1) 禮書 (2) 樂書 (3) 律書 (4) 曆書 (5) 天官書 (6) 封禪書 (7) 河渠書 (8) 平準書

第四、三十世家 (諸侯の沿革。卷三十一—卷六十。)

秦の主要なる諸侯と、漢代の諸王及び主なる諸侯三十の沿革を載せたり。右の中、孔子と陳涉につきては、世家に列したることにつきて異論あり。又十二本紀中、項羽の本紀に列したるも同じ。即ち孔子陳涉は諸侯にあらず。項羽は帝王にあらずといふが其の本旨也。

- (1) 吳太伯世家第一
- (2) 齊太公世家第二
- (3) 魯周公世家第三
- (4) 燕召公世家第四
- (5) 管蔡世家第五(曹叔世家附)
- (6) 陳杞世家第六
- (7) 衛康叔世家第七
- (8) 宋微子世家第八
- (9) 晉世家第九
- (10) 楚世家第十
- (11) 越世家第十一
- (12) 鄭世家第十二
- (13) 趙世家第十三
- (14) 魏世家第十四
- (15) 韓世家第十五
- (16) 田敬仲完世家第十六
- (17) 孔子世家第十七
- (18) 陳涉世家第十八
- (19) 外戚世家第十九
- (20) 楚元王世家第二十
- (21) 荆燕王世家第二十一
- (22) 齊悼惠王世家第二十二
- (23) 蕭相國世家第二十三
- (24) 曹相國世家第二十四
- (25) 留侯世家第二十五
- (26) 陳丞相世家第二十六
- (27) 韓侯周勃世家第二十七
- (28) 梁孝王世家第二十八
- (29) 五宗世家第二十九
- (30) 三王世家第三十

第五、七十列傳 (著明なる個人の事蹟。卷六十一—卷百三十。)

列傳中には政治家あり。軍人あり。學者あり。富豪あり。游侠あり。一代の名ある者は苟くも採りて以て紹介せる也。而して其の文學的價值に至りてはこの傳中にあるのみ。

- (1) 伯夷列傳第一
- (2) 管晏列傳第二
- (3) 老莊申韓列傳第三
- (4) 司馬穰苴列傳第四
- (5) 孫子吳起列傳第五
- (6) 伍子胥列傳第六
- (7) 仲尼弟子列傳第七
- (8) 商君列傳第八
- (9) 蘇秦列傳第九
- (10) 張儀列傳第十
- (11) 樛里子甘茂列傳第十一
- (12) 穰公列傳第十二
- (13) 白起王翦列傳第十三
- (14) 孟子荀卿列傳第十四
- (15) 孟嘗君列傳第十五
- (16) 平原君虞卿列傳第十六
- (17) 信陵君列傳第十七
- (18) 春申君列傳第十七
- (19) 范雎蔡澤列傳第十九
- (20) 樂毅列傳第二十
- (21) 廉破蘭相如列傳第二十一
- (22) 田單列傳第二十二
- (23) 魯仲連鄒陽列傳第二十三
- (24) 屈原賈生列傳第二十四
- (25) 呂不韋列傳第二十五
- (26) 刺客列傳第二十六
- (27) 李斯列傳第二十七
- (28) 蒙恬列傳第二十八
- (29) 張耳陳餘列傳第二十九
- (30) 魏豹彭越列傳第三十
- (31) 陳布列傳第三十一
- (32) 淮陰侯列傳第三十三
- (33) 韓王信盧縮列傳第三十三
- (34) 田儂列傳第三十四
- (35) 樊鄴滕灌列傳第三十五
- (36) 張丞相列傳第三十六
- (37) 鄧生陸賈列傳第三十七
- (38) 傅靳成列傳第三十八
- (39) 劉敬叔孫通列傳第三十九
- (40) 季布欒布列傳第四十
- (41) 袁盎鼂錯列傳第四十一
- (42) 張敖之馮唐列傳第四十二
- (43) 萬石張敖列傳第四十三
- (44) 田叔列傳第四十四
- (45) 扁鵲倉公列傳第四十五

- (46) 吳王濞列傳第四十六
- (47) 魏其武安侯列傳第四十七
- (48) 韓長孺列傳第四十六
- (49) 李將軍列傳第四十九
- (50) 匈奴列傳第五十
- (51) 衛將軍驃騎列傳第五十一
- (52) 平津侯主父列傳第五十二
- (53) 南越尉佗列傳第五十三
- (54) 東越列傳第五十四
- (55) 朝鮮列傳第五十五
- (56) 西南夷列傳第五十六
- (57) 司馬相如列傳第五十七
- (58) 淮南衛山列傳第五十八
- (59) 循吏列傳第五十九
- (60) 汲鄭列傳第六十
- (61) 儒林列傳第六十一
- (62) 酷吏列傳第六十二
- (63) 大宛列傳第六十三
- (64) 游侠列傳第六十四
- (65) 佞幸列傳第六十五
- (66) 滑稽列傳第六十六
- (67) 日者列傳第六十七
- (68) 龜策列傳第六十八
- (69) 貨殖列傳第六十九
- (70) 大史公自序第七十

#### 四 史記の文學的價值

史記の文章は其の量に於て支那隨一の大文章たるのみにあらずして、實に其の質に於ても文の聖にして雄、神仙にして任俠なるもの也。茅仲嘗て評して曰く、「屈宋以來渾々噩々、長川大谷の如く、之を探りて窮らず。之を攬て竭きず。百家を蘊藉し、萬代を苞抱するものは司馬子長の文なり」と。實にや其の文章の妙は千古の妙技にして、天馬空を行き、魚龍淵に踊るが如く然り。若しこれ筆力の遒勁なると摹寫の神に入れるとに至りては正に天下の至文にして神采、紙表に奕々たるもの存す。然も

或は典雅に、或は疎蕩に、或は雄大に、或は奇勁に、悲壯淋漓、神韻瀟散千篇千律にして、上下三千載嘗て他人の追蹤を許さざるの概あり。見よ。伯夷、屈原、管仲列傳の叙事議論錯綜混成の妙味を。見よ。項羽本紀、伍奢、范雎、樂毅、田單、廉破、相如列傳の筆勢老将百戰の野に三軍を叱驅せるの霸氣を。あゝ後世、唐の韓愈、柳宗元、宋の歐陽修、蘇軾、蘇轍、呂祖謙、明の王世貞、茅仲等推して以て文章の典型となし、我が國の賴山陽、山本北山、齊藤拙堂等亦範を茲に採る宜なりと謂ふべし。

#### 五 史記の史學的價值

史に分類あり。而して正史、編年、紀事本末、雜史の四は其の主要なるもの也。正史とは稗史野刺に對する名、編年は年月によりて編次するもの、雜史は一事の見聞、一家の私史等にして、未だ一代の大勢に論及せずと雖も、史家の參考資料たり得べきもの也。而して支那の法、正史といふは元、編年體なりしを、司馬遷、紀傳體なる史記を始めしより、この紀傳體、正史となりし也。實に史記はこの點に於て既に史學上の權威たるに恥ぢざる也。

而も加之に、十表、八書の創作ありて、支那の古記録を傳へたるが如き、且は毎篇結ぶに「大史公曰」の史論を以てするあり、孔孟先賢の語を巧みに導入、具象化せるあり、何れも史的眼光の非凡な

るを表はし、多々益、史學上の光芒を發揮せるものと云ふべき也。  
 顧ふに彼以前に太史なきに非ず。而して司馬遷の如くに良史の才あるものなし。彼以後に史家なきに非ず。しかも亦司馬遷の如くに能文の手腕あるもの尠し。故に史記以前に、左傳、國語、國策、楚漢、春秋ありと雖も、皆史記の文字の一々生動し、史記の史論の光焰萬丈なるに如かざる也。誰か史記は空前の文、絶後の史と評せざるものあらんや。

### 六 史記の來歴

後漢時代 ○班固等は「史記」の價値を認めずして、反つてこれを貶せり。  
 東晉時代 ○徐廣は「音義」を作れり。  
 劉宋時代 ○裴駰は「集解」を作れり。  
 唐時代 ○司馬貞は「索隱」を作り、三皇本記を補へり。張守節は「正義」を作れり。而して韓愈、柳宋元は大いに之を贊頌せり。  
 北宋時代 ○この時代には「集解」「索隱」「正義」の三註を併合輯録せり。太宗の淳化五年始めて「史記」を刊行せり。

明時代 ○凌稚隆は「史記評林」李光縉は「増補」を作り、從來の諸説を集成せり。  
 渡來の時 ○下道眞備が大學に於て講じたる由なれば甚だ古き様なれども詳ならず。  
 足利時代 ○五山の僧徒間に甚だ喜ばれたる也。  
 徳川時代 ○漢學者一様に之を喜ぶ。中にも頼山陽は外史に其の筆法を摸倣し、皆川淇園、岡白駒等亦好みて讀めり。又文評又註解等を作りし者も多し。  
 傳本の類 ○近世の傳本に三種あり。(1)宋槧本(2)朝鮮版(これは嵯峨版の原本なりと)(3)評林本(これ八尾版、紅屋版の原本なりと)

### 七 史記の註釋書

一、史記集解(百三十卷、劉宗の斐駰撰) 二、史記索隱(卅卷、唐の司馬貞撰) 三、史記正義(百三十卷、唐の張守節撰) 四、史記評林(百三十卷、明の凌稚隆撰、李光縉増補) 五、史記補注正(一卷、清の方苞撰) 六、史記釋義(十卷、日本の岡白駒撰) 七、史記助字法(二卷、皆川淇園撰) 八、史記影題(二十三卷、中井履軒撰) 九、漢文大系(史記列傳) 一〇、史記列傳講義(興文舎本、四卷) 一一、史記列傳講義(城井壽章、三冊) 一二、和譯史記列傳(田岡佐代治、一冊)

## 二 項羽本紀

### ◎項羽戰於鉅鹿

(大意) ……鉅鹿の戦は項羽得意の場面の一なり。戰陣の様子又描き得たる妙筆なり。楚兵呼聲動天」といひ、諸侯の軍「莫敢仰視」といひ、更に進みて「爲上將軍」のあたり真に、天馬空を行くの概ありとよくし。

項羽已殺卿子冠軍威震楚國名聞諸侯乃遺當陽君蒲將軍將卒二萬渡河救鉅鹿戰少利陳餘復請兵項羽乃悉引兵渡河皆沈船破釜燒廬舍持三日糧以示士卒必死無一還心於是至則圍王離與秦軍遇九戰絕其甬道太破之殺蘇角虜王離涉間不降楚自燒殺當是時楚兵冠諸侯諸侯軍救鉅鹿下者十餘壁莫敢縱兵及楚擊秦諸將皆從壁上觀楚戰士無不一以當十楚兵呼聲動天諸侯軍無不人人惶恐於是已破秦軍項羽召見

諸侯將入轅門無不膝行而前莫敢仰視項羽由是始爲諸侯上將軍諸侯皆屬焉。

(摘釋) ……「轅門」…軍門。軍中にては、車をもつて陣營とし、其の轅(ながえ)を向ひ合はせて門となす。「膝行」…膝頭にて行く。「卿子冠軍」…卿子は公子。冠軍は上將軍。

(通釋) ……項羽既に、卿子冠軍を殺したるを以て、其の威楚國にふるひ、其の名諸侯に聞えぬ。こゝに於て當陽君の黥布及蒲將軍を兵卒二萬の將として遣はし、河水を渡らせ、鉅鹿を救はしめたるころ、其の戦に少しばかりの勝利ありけり。陳餘は、重ねて救の兵を請ひたるころ、項羽は、總兵を率ゐて河水を渡り、すべての船を沈め、釜(かま)飯(こしき)を破り、廬舍(こや)も燒きすて、僅に三日分の兵糧のみを携帯して、士卒に必死の覺悟を示したれば、從ふ兵卒一人として立ち戻るべき心なきに至りぬ。是に於て、鉅鹿に至りしに、王離を圍み、秦の軍と出逢ひて、九たび戦ひ、遂に其の兵糧の運送道を絶ち切りて、大いに之を破り、秦將、蘇角を殺し、王離を生け捕りとしぬ。かくて涉間は、楚に降らずして、自ら火中に投じて死せり。是の時に當りて、楚兵實に、諸侯の兵の首位を占めぬ。諸侯の軍等しく鉅鹿の城下を救ふ者、秦の強きを畏れて、十餘箇所に壘壁を構へ、敢て兵を縦ちて出でて戦はしむる者なかりしが、楚の秦を撃つに及びて、諸將は皆壘壁の上より見物したるに、

楚の戰士の働き振りは、一人にて十人に當らざるものとはなく、楚の兵の呼びさけぶ聲、實に天をも動かしたれば、諸侯の軍兵、惴々として恐怖せざるはなかりき。さて、已に秦の軍を破りし、項羽は、諸侯の將を召し出して面會したるに、皆々轅門より入り、居ざりのやうに膝頭にて歩き、恐る恐る前み出で、一人として項羽をまともに仰ぎ見る者とはなかりき。項羽、是に於て、始めて諸侯の上將軍となり、諸侯皆之に附屬しぬ。

〔批評〕……一、劉辰翁の曰く、鉅鹿の戰を叙せること、踴躍振動して、羽の平生を極めたりと。

二、茅坤の曰く、項羽の最も得意の戰、太史公の最も得意の文なりと。

三、吳澄の曰く、三つの無の字（無不、無不、無不）以當一十。無不三人憐恐。無不三膝行而前。を下して、精神を喚起せりと。

四、撰者曰く、本條に二つの「莫敢」の字見えたり。即ち「莫敢縱兵」「莫敢仰視」がこれ也。勢愈々張りて、人愈々懼る。羽の勇猛、宛然たるを想ひみるべきであると共に、語法としての工夫を吟味し置くべし。△莫敢仰視（おしきつて仰ぎ視るといふことを——すればよいのだが——ようしない。）△莫敢仰視（仰ぎ視るといふことを——すれば出来るのだが——無理にしない。）

鴻門會（上）

〔大意〕……本條は項羽本紀中最大の事件鴻門の會の光景也。項王、沛公以下座に着く。風雲將に起らんとす。項莊拔劍して宴中に舞ひ沛公を刺さんとす。項伯起ちて亦舞ひ常に沛公を蔽ふ。その中に張良樊噲をよび來る。樊噲は鴻門會の大立物也。努髮、目眦以て項羽、項莊を睨めつく。

一座俄然として懼れ静まり、沛公床口の難をのがれ得たり。

沛公旦日從百餘騎來見項王。至鴻門謝曰。臣與將軍戮力而攻秦。將軍戰河北。臣戰河南。然不自意能先入關破秦。得見將軍於此。今者有小人之言。令將軍與臣有郤。項王曰。沛公左司馬曹無傷言之。不然籍何以至此。項王即日因留沛公與飲。〔第一小段〕項王項伯東嚮坐。亞父南嚮坐。亞父者范增也。沛公北嚮坐。張良西嚮侍。范增數目項王。舉所佩玉玦以示之者三。項王默然不應。范增起出。召項莊謂曰。君王為人不忍。若入前爲壽。壽畢請以劍舞。因擊沛公於座。殺之不者。若屬皆且爲所虜。莊則入爲壽。壽畢曰。君王與沛公飲。軍中無以爲樂。請以劍舞。項王曰。諾。項莊拔劍起舞。項伯亦拔劍起舞。常以身翼蔽沛公。莊不得擊。〔第二小段〕於是張良至軍門。見樊噲。樊噲曰。今日之事何如。良曰。甚急。今者項莊拔劍舞。其意常在沛公也。噲曰。此迫矣。臣請入與之同命。噲即帶劍擁盾入軍門。交戰之衛士欲止不內。樊噲側其

盾以撞衛士仆地。噲遂入披帷西嚮立。瞋目視項王。頭髮上指。目眦盡張。項王按劍而跪曰。客何爲者。張良曰。沛公之參乘樊噲者也。項王曰。壯士。賜之卮酒。則與。斗卮酒。噲拜謝起。立而飲之。項王曰。賜之彘肩。則與。一生彘肩。噲覆其盾於地。加彘肩上。拔劍切而啗之。(第三小段)項王曰。壯士能復飲乎。樊噲曰。臣死且不避。卮酒安足辭。夫秦王之有虎狼之心。殺人如恐。舉刑人如恐不勝。天下皆叛之。懷王與諸將約曰。先破秦入咸陽者。先破秦入咸陽。毫毛不敢有所近。封閉宮室。還軍霸上。以待將軍。今沛公先破秦入咸陽。毫毛不敢有所近。封閉宮室。還軍霸上。以待將軍。勞苦功高。未有封爵之賞。而聽細說。欲誅有功之人。此亡秦之續耳。竊爲大王不取也。項王未有以應。曰。坐。樊噲從良坐。(第四小段)

(摘釋) …… [有] 節 …… 仲惡しきこと。 [惡] 父 …… 項羽、范增を亞父と號す。亞は、次ぐ。之を尊び親むこと、己の父に次ぐの意。 [舉] 所佩玉玦以示之者三 …… 玦は、環の如くにして、缺けたる處あるもの。之を舉げ示すは、意を決して沛公をことを動かむるなり。 [不] 忍 …… 人に無事仕向け兼ねるなり。孟子四端の中、人皆有之不忍人之心の不忍なり。 [覆] 其盾於地 …… 覆は、倒す。 [細] 人 …… 小人。

(通釋) …… 沛公は、明日僅に百餘騎を従へ來りて、項王に面會し、鴻門に至りて、詫びたまひて曰く、[臣と將軍は力を合せて秦を攻め、將軍は河北に戦ひ、臣は河南に戦へり。然るに、圖らざりき。先づ能く函谷關に入りて秦を破り、かかねて將軍に此の處にて面會することを得むとは。小人の言葉ありて、將軍をして臣との仲惡しからしめたるは、心外の事なり]と。項王の曰く、「此の事は、沛公の左司馬の曹無傷が言ひたるなり。さなくば籍は何をもてかゝる次第に至らむや」と。項王、即日、其のまゝ沛公を引き止めて、一所に酒を飲めり。其の座席はといふに、項王と項伯とは東向に坐し、亞父は南向に坐せり。亞父とは、范增のことなり。沛公は北向に坐し、張良は西向に侍坐せり。范増度々項王に目くばせし、腰に帯びたる玉玦を差し揚げて示し、沛公を撃つべき決心を促すこと三度までに及びたれど、項王は、默然として應ぜざりき。范増乃ち、其の座を起ちて、出で、項羽の從弟の項莊を召して曰く、「君王の人柄は、人に惡事を仕向け兼ねる性なれば、汝、彼の席へ入り、前み出で、祝杯を差すべし。さて祝杯を畢りたらば、劍をもて舞はむと請ひて、其の儘、沛公を坐上に撃ち殺



せ。然らずんば汝が類は皆程なく沛公の生け捕りとならむ」と。項莊は、入りて祝杯を差せり。さて祝杯をさし畢りて曰く、「君王と沛公と酒を飲まるゝこの大會に、軍中の事とて、何等、音樂の用意もなし。我劍をもつて舞ひ、聊か座興を添へん。」と。項王の曰く、「よからん」と。こゝに於て項莊、劍を抜き、起ちて舞ひたるに、項伯も亦劍を抜き、起ちて舞ひながら、常に己の身をもて沛公をかばひければ、項莊それが邪魔になりて撃つことを得ざりし(第二小段)

是に於て、張良は、席を外して、軍門に至り、樊噲を見たるに、樊噲の曰く「今日の事は如何様なるぞ」と。張良の曰く、今項莊は劍を抜きて舞へり。其の意は常に沛公を殺すに在るやうなり」と。樊噲の曰く、「此は、一大事。臣請ふ。入りて項莊と生死を共にせむ」と。樊噲、即座に劍を帯び、楯を抱へて、軍門に入りたるに、戟を雙方より突つ張り、門番、之を止めて入れず。樊噲、勇猛となし、衛士を撞きて、地上に仆して、遂に入りけり。直様帷帳を披きて、西向きに立ち、目を張り、項王を睨めつけたりしが、怒れる頭髮、逆立して冠を指し、眦(まなじり)、残らず裂けたるやうなき。項王之を見て、帶劍の柄に手を掛け、膝を屈め、之を承けながら曰く、其の客人何する者ぞ」と。張良の曰く、「沛公が馬車の添乗り、樊噲といふ者なり」と。項王の曰く、「如何にも立派なる壯士かな。之に酒杯を與へよ」と。給事の者早速、之に一斗入の杯に酒を盛りて與へたるに、樊噲「辱けな

し」と起ち上り、立ちながらに之を飲乾せり。項王の曰く、「之に豕の子の肩の肉を與へよ」と。給事の者早速又、豕の子の肩の生肉を與へたるに、樊噲、其の楯を地上に倒し、豕の子の肩の肉を其の上に乗せ、劍を抜きて、切りて之を嚼ひ終へぬ。項王の曰く、「壯士よ。汝能く重ねて飲まむか」と。樊噲の曰く、「臣死するをすら尙且避けず、杯酒何ぞ、辭退するに足らむや。全體、秦王に、虎狼の如き貪慾無慈悲の心あり。而して人を殺すこと、重き物を擧ぐることはざるが如く、力を極めて殺戮し、人を刑すること、刑し切れざらむことを恐るゝが如く、飽くまで之を刑戮したれば、天下中の者皆之に叛けり。楚の懷王、諸將と約束して曰く、「先づ秦を破りて咸陽へ入りたる者は、之を王とせむ」と。今沛公先づ秦を破りて咸陽に入り、毛程も身に近づくるものあらず。秦の宮室に封印を付け、之を締め切り、立ち戻りて、霸上に陣取り、大王の來るを待ち受けぬ。されば將を遣はして關所を守らしめたるは、他意なし。他の盜賊の出入と非常の場合とに備へたるだけなり。勞苦して手柄の高きこと此の如くなるに、未だ諸侯に封ぜらるゝ恩賞もなし。而して、大王は取るにも足らぬ小人の説を聽き納れて、手柄ある人を誅戮せむと思はるゝは、此れ滅亡したる秦の跡繼ぎとならむのみ。臣は内々大王の爲めに善き事なりとして取り上げぬなり」と。項王、未だ何とも應答せずして曰く、「坐せよ」と。樊噲、乃ち張良に依り添ひて坐しぬ。(第二小段)

◎鴻門會(下)

(大意)……鴻門會の續きなり。沛公風雲あしとみてとり、廁に行くに事よせて出で、樊噲の謀によりてひそかに軍中に歸りぬ。而して本會の後幕を張良が、白璧一雙と五斗一雙とによりて圓了してしまふてふ一條なり。項王最後の言「唉豎子不足與謀。奪項王天下者必沛公也」は忿恨の氣没々たるをみるが如し。

坐須叟沛公起如廁因招樊噲出沛公已出項王使都尉陳平召沛公沛公曰今者出未辭也爲之奈何樊噲曰大行不顧細謹大禮不辭小讓如今人方爲刀俎我爲魚肉何辭爲於是遂去乃令張良留謝良問曰大王來何操曰我持白璧一雙欲獻項王玉斗一雙欲與亞父會其怒不敢獻公爲我獻之張良曰謹諾(第一小段)當是時項王軍在鴻門下沛公軍在霸上相去四十里沛公則置車騎脫身獨騎與樊噲夏侯嬰靳彊紀信等四人持劍盾步走從酈山下道芷陽間行沛公謂張良曰從此道至吾軍不過二十里耳度

我至軍中公乃入沛公已去閒至軍中(第二小段)張良入謝曰沛公不勝枵拘不能辭謹使臣良奉白璧一雙再拜獻大王足下玉斗一雙再拜奉大將軍足下項王曰沛公安在良曰聞大王有意督過之脫身獨去已至軍矣項王則受璧置之座上亞父受玉斗置之地拔劍撞而破之曰唉豎子不足與謀奪項王天下者必沛公也吾屬今爲之虜矣(第三小段)

(摘釋)……「如今」……當今といふに同じ。「一雙」……一對。「玉斗」……斗は、酒を酌む器。「間行」……抜け道をして行く。「不勝枵拘」……酩酊して、酒の相手に耐へかねること。「督過」……視察して責め咎む。「唉」歎き恨む聲。「豎子」……小僧といはむが如し、項羽を指す。

(通釋)……樊噲の坐したる後、暫くして、沛公ツト起ちて便所へ往かれながら、樊噲を招きて、外へ出でられけり。沛公の、已に出でられければ、項王、都尉の陳平をして、沛公を召ばしめぬ。沛公の曰く、「只今出づる際、未だ項王に暇乞ひせざりしが、如何様にせば宜しからむ」と。樊噲の曰く、「大なる行ひを爲す者は、細かき謹みを顧みず、大なる禮儀を行ふ者は、小さき辭讓をせぬものなり。今相手の人は庖丁となり俎(まないた)となりて、魚を切りさいなまむとし、我は魚肉となりて、其の人に切られんとする場合なれば、何とて暇乞などするに及ばむ」と。是に於て、遂に出で去りて、張良をし

て、跡に残りて、謝禮を申しのべさせられたり。其の時、張良は、沛公に伺ひて曰く、「大王の來りたまひしとき、何物をか持參したまひしか」と。沛公の曰く、「我は、白き璧玉一對を所持しぬ、こは項王に献上せむと思ふ也。玉の酒を酌む器一對を所持しぬ。こは亞父の茫増に與へむと思ひしが、項王の怒りに逢ひたれば、強ひて献上せざる也。貴公我が爲に之を献上せよ」と。そこで張良の曰く、「謹みて承知せり」と。(第一小段)是の時に當りて、項王の軍は、鴻門の下に在り。沛公の軍は、霸上に在り。かくて相去ること四十里。沛公は、馬車騎馬を留め置き、其の身を脱して、獨り馬に乗りたまひ、樊噲、夏侯嬰、斬彊、紀信の四人と共に、劍と楯とを持ちて、歩いて走り、鄆山の下より、芷陽に道を取りて、抜け道をして行かれけり。其の出で行かるゝとき、沛公は、張良に物語したまひて曰く、「此の道より吾が軍に至るには、僅かに二十里に過ぎざれば、我が軍中へ到着したる頃を計りて、貴公は入りて項王に挨拶せよ」と。沛公は、已に出で去りて、忍びやかに軍中へ到着したまへり。(第二小段)張良、其の頃合を見計らひ、入りて謝禮を述べて曰く、「沛公は、酩酊して、御酒の相手に耐へかね、遂に御暇乞ひすること能はざれば、謹みて臣良をして、白き璧玉一對を捧げ、再拜して大王の足下に献上せしめ、玉の酒を酌む器一對を再拜して大將軍の足下に捧げしむるなり」と。項王のこれを聞きて曰く、「沛公は何方に居らるゝぞや」と。張良の曰く、「大王の何事をか視察して責め咎めらるる意ありと聞き、

身を脱して獨り去れり。今頃は已に霸上の軍へや歸りつきぬらむ」と。項王、璧玉を受け取りて、之を坐上に置きたるに亞父は玉の酒を酌む器を受け取りて、之を地上に置き、劍を抜き、撞き破りて曰く、「あゝ、さても残念なることよ。小僧は共に相談するに足らぬなり。項王の天下を奪はむ者は、屹度沛公ならむ。吾が一族は、今彼が生け捕りとならむ」と。小僧とは、暗に項羽を指せるなり。(第三小段)

(批評)……一、撰者曰く、漢楚鴻門の會は實に太史公一代の名筆なり。歴々として目堵するが如く、其の景と、其の人物と、其の空氣との描出、毫末の滲漉なし。  
王維楨のかつて、「暗の入りて沛公を徯る狀を叙せる事見るか如し。一字も少くすべからず」と評せしこと、亦本文のテーマに對する適評たるを失はず。

168 ◎項王軍壁垓下

(大意)……この條はいはゆる「四面楚歌」するにあどろきたる項王が最後の宴を張り、張中に悲歌慷慨する條で古來有名なり。「力拔山」や「虞兮虞兮奈若何」の詩韻、汲めどもつきざる趣ありと云べし。

項王軍壁垓下。兵少、食盡、漢軍及諸侯兵圍之、數重。夜聞漢軍四面皆楚歌。

項王乃大驚曰。漢皆已得楚乎。是何楚人之多也。項王則夜起飲帳中。有美人名虞。常幸從。駿馬名騅。常騎之。於是項王乃悲歌慷慨。自爲詩曰。力拔山兮氣蓋世。時不利兮騅不逝。騅不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈若何。歌數闋。美人和之。項王泣數行下。左右皆泣。莫能仰視。

〔楚歌〕…楚人の歌。尙ほ吳謳越吟といふかごとし。〔騅〕…蒼白の雜毛を騅といふ。其の色をもて名づけたるか。〔憤慨〕…感激して不平なる意。〔數闋〕…歌の一曲の終るを闋といふ。〔美人和之〕…和は、調子を合はせて歌ふこと。楚漢春秋に「歌曰、漢兵已略地四方楚歌聲、大王意氣盡賤妾何聊生」とあり。

〔通釋〕…項王の軍は、垓下に壘壁を構へて、兵卒は少なく、糧食は盡きたるに、漢の軍及び諸侯の兵は、之を十重廿重に圍みたり。かくて夜中に、漢の軍の四面に皆楚人の歌を歌ふを聞き、項王、大いに驚きて曰く、「漢は皆已に楚を手に入れたるか。何と楚人の多數なることよ」と。項王、夜中に起ちて、帷帳の中にて酒を飲めり。美人あり。名を虞といふ。常に項王に寵愛せられて、附き從へり。駿馬あり。名を騅といふ。項王常に之に乗れり。是に於て、項王は悲しみ歌ひ、感激の極、其の意頗る平かならず。自ら一首の詩を作りて曰く、「吾が力量は、大山を突き抜くべく、吾が氣象は、一世を蓋ひかくすべき程なるに、「時機」が吾に利益あらずして、吾が乗りつけの駿馬の騅も逝かぬなり。駿

馬の騅の逝かざるを、如何様にすべき。吾が愛したる虞美人よ。虞美人よ。今となりては、汝が身の上を如何様にすべき」と。斯く繰返し〜歌ひたれば、美人は、之に調子を合はせて亦、己が心の悲みを歌ひ合せき。かくてさしにも猛き項王も、幾條となき涙をとめどもなく流したれば、左右の者も、皆泣きて、能く仰ぎ視る者とはなかりけり。

〔批評〕…撰者の曰く、始め羽拔山蓋世の氣あり。以後日に衰弱に至る。史家模寫して眞に過ること、畫けるが如し。千古の英雄此に至りて、殊に人をして悽惻せしむるものあり。

171 ◎項王乃欲東渡烏江

〔大意〕…項羽天の利あらずして、敗戦し、東の方烏江を渡らんとせるとき、烏江の亭長、項王をかくまはんといふ。時に項羽「さきには吾、江東の子弟八千人と江を渡りて西に出發せしに、今は皆を戦死せしめて吾に續くものなし、吾何の面目ありて江東の父兄に見えん」と。遂に馬を亭長に與へ、呂馬童の爲に自刎して死す。一世の英傑、何ぞその最期の悲壯なるや。

於是項王乃欲東渡烏江。烏江亭長檣舟待謂項王曰。江東雖小地方千里。衆十萬人亦足王也。願大王急渡。今獨臣有船。漢軍至無以渡。項王笑曰。天

之亡我。我何渡爲。且籍與江東子弟八千人渡江而西。今無一人還。縱江東父兄憐而王我。我何面目見之。縱彼不言。籍獨不愧於心乎。（第一小段） 乃謂亭長曰。吾知公長者。吾騎此馬五歲。所當無敵。嘗一日行千里。不忍殺之。以賜公。乃令騎皆下馬步行。持短兵接戰。獨籍所殺漢軍數百人。項王身亦被十餘創。顧見漢騎司馬呂馬童曰。若非吾故人乎。馬童面之。指王翳曰。此項王也。項王乃曰。吾聞漢購我頭千金。邑萬戶。吾爲若德。乃自刎而死。（第二小段）

（摘釋）……〔烏江亭〕……亭は、立て場。〔船〕……船を載へて岸へ向ふ。〔短兵〕……刀劍の類。〔故人〕……昔馴染み。〔面之〕……背を向くるなりとも、横向きになるなりとも、眞向きになるなりともいふ。今第一の説よろしきか。

（通釋）……是に於て、（敗軍して）項王は、東の方へ向ひて、烏江を渡らむと思ひしに、烏江亭の長、船を整へて、岸に向ひて待ち受け、項王に物語して曰く、「江東の地は小さけれども、土地の廣さは、千里四方あり。人數は數十萬人あれば、此の土地も亦王となるに足らむ。願はくは大王の急ぎて渡りたまはむことを。今獨り臣のみ船あれば、漢の軍至るとも、渡すことなからむ」と。項王之を聞きて、笑ひて曰く、「天の我を亡ぼすなり。かくなるからは萬事休す。我れ何ぞ渡ることをせむや。しかのみ

ならず、籍（名）は、はじめ、江東の子弟八千人と共に、江水を渡りて、西へ向ひしに、今までの戦に皆死したれば今一人の立ち戻る者もなし。たとひ江東の父兄は、憐みて我を王とすとも、我男子として、何の面目ありて、之に會はず顔あらんや。たとひ彼等は、何事を言はずとも、籍は、獨り心の中に愧ぢざらむや」と。そこで又亭の長に物語りして曰く、「吾は、貴公の寛大の長者なることをよく知り。吾此の馬に乗ること五年にして、吾が當り向ふ所には敵なかりき。さきにはよく一日に千里も行きしことある馬也。之を見棄て、殺し兼ねれば、今之を貴公に與ふるなり」と。（項羽の烏江を渡らむとして、思ひ止りたるは、前に田父に欺かれたるに懲りて、重ねて亭長に欺かれむことを氣遣ひて、斷念したるならむともいふ）。そこで騎士をして皆馬を下りて、歩行せしめ、刀劍の類をもて、追ひ來る者と接戦せしめしが、獨り項籍の殺したる漢の軍のみにも數百人なりき。項王の身も亦十餘箇所の手創を負ひたれば、顧みて漢の騎司馬の呂馬童を見て曰く、「汝は吾が昔馴染みの者にはあらずや」と。呂馬童は、氣の毒に思ひて、項王に背を向けて、王翳に指さして曰く、「此れ項王なり」と。項王重ねて呂馬童に向ひて曰く、「吾、漢に於て我が首を金ならば千金、邑ならば萬戶にも替へて、買ひ取らむとする由なるを聞けり。吾此の首を汝に取らせて、汝が爲めに恩徳を施さむ」と。そこで自ら首を掻き落として死にたりき。

### 三 蕭相國世家

#### ◎ 諸君知獵狗乎

〔大意〕…本條は蕭何の功を第一位におかれし爲、功を争ふ戦功者等、高祖に不平を陳じたるを、高祖、「獵狗の譬」もて退くるの條也。

漢五年、既殺項羽、定天下、論功、行封、羣臣争功、歲餘、功不決、高祖以蕭何功最盛、封爲鄼侯、所食邑多、功臣皆曰、臣等身被堅、執銃、多者百餘戰、少者數十合、攻城畧地、大小各有差、今蕭何未嘗有汗馬之勞、徒持文墨、議論、不戰、顧反居臣等上、何也、高帝曰、諸君知獵狗乎、曰、知之、知獵狗乎、曰、知之、高帝曰、夫獵、追殺獸、兔者、狗也、而發蹤、指示獸處者、人也、今諸君徒能得走獸耳、功狗也、至如蕭何、發蹤指示功人也、且諸君獨以身隨我、多者兩三人、今蕭何舉宗數十人、皆隨我、功不可忘也、群臣皆莫敢言。

〔摘釋〕…「環」今の南陽環縣也。(汗馬之勞)…武功をいふ。「發蹤」…發蹤に作るがよろしきか。獵犬の繩をときはたちて、兎などに追ひかけること。

〔通釋〕…漢の五年。既に項羽を殺し、天下を定め、「論功行賞」の御沙汰あり。こゝに於てか群臣しきりに功名を争へり。而して一年ばかりもその功位が定まらねたりき。されどその末遂に天下群臣の諸功中、蕭何の功を以て高祖は第一位に置かれき。かくて蕭何は穰侯に封ぜられぬ。こゝは録最も多く八千戸もありき。こゝに於て諸功臣、皆曰へり。「臣等は其の身甲冑を着、劍戟をとり、多きものは百餘戦もなせり。少きものも數十回の戦を爲せり。而して城を攻め地を略取すること、各々その差を持てるなり。さるを今蕭何は一度も戦功なくして、たゞ文墨を持して、内に議論しゐるのみにて一度も戦へることなし。而るを功は臣等の上にあるとは一向に合點のゆかぬ事哉」と。高帝のこれに對する答が面白し。「諸君はかの獵を知れりや」と。諸臣曰く「知れり」と。「然らば諸君はかの獵狗を知れりや」と。「知れり」と。高帝辭を改めて曰く、「夫れ獵して兎などをあつかけるものは犬の役目也。而してつなぎ繩を解きて犬をけしかけるものは人也。今諸君の功といふは、その犬の功をしたるに過ぎず。蕭何の爲せる功はその人の功をしたるもの也。且つ諸君の我に従ふや獨り一身を以て従ふのみ。多きものと雖も二三人をつれて従つただけ也。今蕭何は一家宗族をあげて數十人を以て我に従つてゐる也。この功

を度して功を云ふことは不穩當也。」と。これをきいて群臣皆押しきりていふものはなかりきとぞ。

### 四 曹相國世家

#### ◎曹參守而勿失

(大意)曹參は飲酒し太平を樂しむのみにて、政事に關せざる様子なりしかば、惠帝は曹參の子をして、ひそかに讓めしむ。曹參はこれに對し、そもく高帝及蕭何の兩人は、惠帝及び己に勝れたりや否やを問ひ、結ぶに「保守主義」の應分なるを以てす。

惠帝恠相國不治事。以爲豈少朕與。乃謂窋曰。若歸試私從容問而父曰。高帝新弄群臣。帝富於春秋。君爲相。日飲無所請事。何以憂天下乎。然無言吾告若也。(第一小段) 窋既洗沐歸。問侍自從其所。諫參怒。答窋二百。曰。輒入侍天下事。非若所當言也。至朝時。惠帝讓參曰。與窋胡治乎。乃者我使諫君也。參免冠謝曰。陛下自察。聖武孰與高帝。上曰。朕乃安敢望先帝乎。曰。陛下

觀臣能孰與蕭何賢。上曰。君似不及也。參曰。陛下言之是也。且高帝與蕭何定天下。法令既明。今陛下垂拱。參等守職。遵而勿先。不亦可乎。惠帝曰。善。君休矣。(第二小段) 參爲漢相國。出入三年卒。謚懿侯。子窟代侯。百姓歌之曰。蕭何爲法。顯若畫一。曹參代之。守而勿失。載其清淨。民以寧一。(第三小段)

(摘釋)……(少)年少の意。不足の意ともいふ。「與窋胡治乎」……窋につきて何事を處分せしぞ。胡は何ぞの意也。「顯」……明かなり。「畫一」……其の法整齊なるをいふ。

(通釋)……惠帝は宰相曹參が日毎に(酒をのみ居るのみにて)政事を忘つてゐるとみて、怪しみ、心中に思はれるやう「なんと、これは吾が年少なるをあなどりてのことならんか」と。そこで曹參の子なる窟に謂はれるやうには「汝歸りしならば、試みにソツと靜かに機をみて汝の父に云ふべし。」高帝は新たに世を去られたり。帝はまだ年若におはします。それに父君は相の位置につきてゐられ乍ら、毎日酒を飲み、政事の事につきて一の相談もせられしことなし。かゝる様子では何を以て天下に赤誠をいたすとはいはれんや。」と。然しこのことを吾が口から出たといふことなかれ」と。(第一小段)

窟は既に休暇をもらひて、自宅に歸り、父の閑なる時を待ち居りぬ。遂に閑を得て右の言葉述べしところ、父怒りて、窟を笞つこと約二百。而る後曰く、「早速入りて惠帝のお側に侍せよ。天下の大

事は汝輩の與り知るところにはあらざる也」と。やがて曹參の參朝した時分に、專帝はこれをとらへ、讓められて曰く、「宦につきて何を處分せしか。さきに宦に諫めしめしは吾が言はせしことなるぞ」と。こゝに於て曹參、冠をぬぎ謝して曰く、「陛下恐れながら、その聖武にまします點は彼の高帝といづれに思召され給ふぞや」と。惠帝の曰く、「朕はとても高帝を望むことあたはず。」と。「然らば小生の才能かの前宰相蕭何といづれに御思召され給ふか。」と。「それも汝の方が劣りてみゆる」と。曹參こゝに於て言上して曰く、「陛下の御言葉は共に正し。考へてみるに高帝は蕭何と共に天下を定め給ひ、只今は法令既に明らかなり。そのお蔭を以て今陛下は日毎に懷手してゐられ、小生等亦現職維持のまゝ、保守的に先を守りて遵ひ居るといふことは何で不可ならんや。それにてよろしきことなきか。」と。惠帝曰く「善し。汝しばらく控へて休息せよ」とのたまひけり。(第二小段)

參は漢の宰相を足掛け三年つとめて、卒去しぬ。懿侯とオクリナせられたりき。而して子の宦やがて侯に代りて居直りたりき。百姓(時の人民)皆、之を歌ひて曰へり。「蕭何さきに法を作れり。非常に明らかに民理解し得て、畫一によく整ひけり。やがて曹參これに代り、そのまゝを受継ぎて失するることなし。その清淨なるまゝを傳へて、民は一樣に安らかに治まれり。」と。(第三小段)

### 五 留侯世家

#### ◎ 良彊忍下 圯取履

(大意) …張良、橋上に一老人に會ふ。老人「落せし靴を拾來れ」といふに對し、彊忍拾ひて捧げ、その事より、五日目の後を約すること兩三度。遂に老人より太公の兵書を得るに至れりといふ奇事を敘す。

良嘗間從容步游下邳圯上。有一老父。衣褐。至良所。直墜其履圯下。顧謂良曰。孺子下取履。良愕然欲歐之。爲其老彊忍下取履。父曰。履我。良業爲取履。因長跪履之。父以足受。笑而去。良殊大驚。隨目之。父去里所。復還曰。孺子可教矣。後五日。平明。與我會此。良因怪之。跪曰。諾。(第一小段) 五日。平明。良往。父已先在。怒曰。與老人期。後何也。去。曰。後五日。早會。五日。鷄鳴。良往。父又先在。復怒曰。後何也。去。曰。後五日。復早來。五日。良夜未半。往。有頃。父亦來。喜曰。當如是。出一編書。曰。讀此。則爲王者師矣。後十年。與十三年。孺子見我。濟北穀



城山下黄石即我矣。遂去無他言。不復見。旦日見其書。乃太公兵法也。」(第二小段)

(摘釋)……「圯」……橋也。「問」……問也。「從容」問暇也。「下邳」……東海にあり。「業」……猶、本先といふが如し。「十年」……後十年果して沛公に會へり。「穀城」……穀城田は一名黃山といふ。濟洲、東阿縣の東にあり。「太公兵法」……太公の兵法は一族三卷、太公は姜子牙、周の文王の師、齊公に封ぜられし人也。

(通釋)……張良はさきに秦の皇帝を博浪沙に撃ちて、副車に中て、秦の皇帝の怒にあひ大いに天下の探し者となれり。その時のこと、良、姓名を變じて下邳にかくれたりき。或る日、靜かにゆつくりと歩いて、下邳の橋の上まで來かゝれり。然る所、一老人の賤者の着る褐衣をきたるに會へり。かくてこの老人、良とすれ／＼のところに至るや、直(ことさらに)橋下に其の履を落せり。履はクツ也。老人ツト張良を顧みて、曰く、「小僧、履を拾ひ來れ」と。張良この言葉にムツとして、これを毆らんかとも思ひしが、老人のことなればと思ひ直して、強ひて忍び、橋下に到りて、履を拾ひ來れり。然る所又、横柄にも老人の曰く「我にはかせよ」と。張良益々、横着だとは思ひしが、「一度拾ひ來りたるものなれば」と思ひ直して、ひざまづきて、其の足にはかせてやりき。老人はこれを足にて受け、ニッコと笑ひて去りぬ。張良大いに驚きて、目送しむたりしに、老人又、一里(六町)ばかり行きてひさ

かへし來りて、曰く、「汝は教ふるに足る。明日より五日目の早朝此處にまた來れ。われも來りて會はん」と。張良これを怪しみが、跪きたるまゝ、「委細承知せり」と答へき。(第一小段)

五日目の早朝となり、良行きたるに、先日の老人既に來り居り、甚だ怒りて、「汝、長者と約して後るゝは禮に非ず。今日は歸れ。五日たちて又來れ」と。言ひ棄て、去りぬ。五日目朝又、鶏の鳴く頃起出で、至りしに、老人又來り居て、「後る、とは何ぞや。」と叱りて去りつゝ、曰く「更に五日の後復早く來れ」と。五日經て、良、今度は夜半より起出で、至りしに、しばらくして、老人も亦來りぬ。喜びて曰く、「若者の長者と約するに當りては、かくの如くに氣をつけて早く來るが當然の禮也」と。懷より一編の書を出し、更に語りて曰く、「汝朝夕これを讀まば乃ち王者の師となるを得べし。後十年經ば必ずや身を起すに足るべき事にあはん。十三年目には復我と會することあるべし。濟北の穀城山下の黄石は即ち我也。」と。遂に去りぬ。唯其の一言のみにして、他の言葉とはなかりし故に、張良これを不思議に思ひ、夜明けて其の書を視たるに、世にも得難き太公望の兵法の書物なりき。(第二小段)

## 六 伯夷列傳

◎伯夷・叔齊義不食周粟

〔大意〕…この條は伯夷・叔齊が首陽山にかくれて薇を食ひ、敢て新世周の粟を食はざりし氣節をのべ、更に兩人の短命なりしに材をとりて、天道の是非に論及せる名條なり。

武王已平殷亂。天下宗周。而伯夷、叔齊恥之。義不食周粟。隱於首陽山。採薇而食之。及飢且死。作歌。其辭曰。登彼西山兮。采其薇矣。以暴易暴兮。不知其非矣。神農虞夏忽焉沒兮。我安適歸矣。干嗟徂兮。命之衰矣。遂餓死於首陽山。由此觀之。怨邪非邪。〔第一小段〕或曰。天道無親。常與善人。若伯夷、叔齊。可謂善人者。非邪。積仁潔行如此。而餓死。且七十子之徒。仲尼獨薦顏淵爲好學。然回也。屢空糟糠。不厭。而卒蚤夭。天之報施善人。其何如哉。〔第二小段〕盜跖日殺不辜。肝人之肉。暴戾恣睢。聚黨數千人。橫行天下。竟以壽終。是遵何德哉。此其尤大彰明較著者也。〔第三小段〕若至近世。操行不軌。專犯忌諱。而終身逸樂富厚。累世不絕。或擇地而蹈之。時然後出言。行不由徑。非公正不發憤。而遇禍災者。不可勝數也。余甚惑焉。儻所謂天道是邪。非邪。〔第四小段〕

〔摘釋〕…〔粟〕…穀米。〔薇〕…ぜんまい。〔西山〕…首陽山。〔兮〕…歌のゆとりをとるための虚字。〔以暴易暴〕…武王の臣として君を扶する暴虐をもつて、紂王の上として、下を苦しめた暴虐に取りかへたこと。〔不知其非〕…武王、自分で自分の非道に心づかぬこと。〔適歸〕…身をよせること。〔徂〕…往く、往くに同じ。死するをいふ。〔天道〕…天の仕方。〔薦〕…善の褒公の間に答へたるが故にいふ。〔積仁〕…酒の粕、米の糠。〔不厭〕…飽きたらぬ。〔蚤夭〕…早死すること。〔盜跖〕…孔子時代の大盗人。〔不辜〕…罪なき良民。〔肝〕…軒に通ず。生肉を細切したるを食ふ。〔恣睢〕…己の思ふままにして四方を睨みつけること。〔專犯忌諱〕…専ら人の忌み嫌ふことを無遠慮に行ふ。〔擇地而蹈之〕…場所を選んで身を處す。〔行不由徑〕…大道を往來して小路を通らぬ。〔儻〕…若しの字より意少し重し。

〔通釋〕…武王既に殷の亂を平げ終へて天子となる。時に天下皆周を敬せり。然るに伯夷叔齊周の支配を受くるを恥とし、殷に對する義理立し、周の天下の米穀を食はずして、首陽山に隠れ、ぜんまいを食ひぬたりしが、遂に飢ゑて死せんとするに臨みて、一首の詩を作り、歌ひて曰く「彼の西山に登りぜんまいをとりて食ひ乍ら世の成行をみるに、臣として君を弑する武王の暴虐を以て、上として下を苦しむる紂王の暴虐にとりかへて、武王は自らその非道なるに氣づかぬなり。神讓をもつて位を授けたりし炎帝神農氏、帝舜有虞氏、夏の禹王の如き美風はいつか搔消すやうになくなれり。我今より何地へ身をよすべきぞ。あゝさても面白からぬ事かな。早く彼の世に旅立たん。我が運命は衰へたるかな」と。遂に首陽の山中に餓ゑて死せり。これによりて伯夷の情を察するに、彼はとも世を怨みしものによ、將た世を怨まざりしものによ。怨めるにも似たり。これ余の首肯し難き事なり。〔第一小段〕

〔大意〕…この條は伯夷・叔齊が首陽山にかくれて薇を食ひ、敢て新世周の粟を食はざりし氣節をのべ、更に兩人の短命なりしに材をとりて、天道の是非に論及せる名條なり。

武王已平殷亂天下宗周而伯夷叔齊恥之義不食周粟隱於首陽山採薇而食之及飢且死作歌其辭曰登彼西山兮采其薇矣以暴易暴兮不知其非矣神農虞夏忽焉沒兮我安適歸矣干嗟徂兮命之衰矣遂餓死於首陽山由此觀之怨邪非邪第一小段 或曰天道無親常與善人若伯夷叔齊可謂善人者非邪積仁潔行如此而餓死且七十子之徒仲尼獨薦顏淵爲好學然回也屢空糟糠不厭而卒蚤天天之報施善人其何如哉第二小段 盜跖日殺不辜肝人之肉暴戾恣睢聚黨數千人橫行天下竟以壽終是遵何德哉此其尤大彰明較著者也第三小段 若至近世操行不軌專犯忌諱而終身逸樂富厚累世不絕或擇地而蹈之時然後出言行不由徑非公正不發憤而遇禍災者不可勝數也余甚惑焉儼所謂天道是邪非邪第四小段

〔摘釋〕…〔粟〕…穀米〔薇〕…ぜんまい。〔西山〕…首陽山。〔兮〕…歌のゆとりをとるための語字。〔以暴易暴〕…武

王の臣として君を扶する暴虐をもつて、紂王の上として、下を苦しめた暴虐に取りかへたこと。〔不知其非〕…武王、自分で自分の非道に心づかぬこと。〔適歸〕…身をよせること。〔徂〕…往く、往くに同じ。死するをいふ。〔天道〕…天の仕方。〔應〕…善の哀公の問に答へたるが故にいふ。〔糟糠〕…酒の粕、米の糠。〔不厭〕…飽きたらぬ。〔蚤天〕…早死すること。〔盜跖〕…孔子時代の大盗人。〔不辜〕…罪なき良民。〔肝〕…肝に通ず。生肉を細切したるを食ふ。〔恣睢〕…己の思ふままにして四方を睨みつけること。〔專犯忌諱〕…専ら人の忌み嫌ふことを無遠慮に行ふ。〔擇地而蹈之〕…場所を擇んで身を處す。〔行不由徑〕…大道を往來して小路を通らぬ。〔儼〕…若しの字より意少し重し。

〔通釋〕…武王既に殷の亂を平げ終へて天子となる。時に天下皆周を敬せり。然るに伯夷叔齊周の支配を受くるを恥とし、殷に對する義理立し、周の天下の米穀を食はずして、首陽山に隱れ、ぜんまいを食ひるたりしが、遂に飢ゑて死せんとするに臨みて、一首の詩を作り、歌ひて曰く「彼の西山に登りぜんまいをとりて食ひ乍ら世の成行をみるに、臣として君を弑する武王の暴虐を以て、上として、君を苦しむる紂王の暴虐にとりかへて、武王は自らその非道なるに氣づかぬなり。神蹟をもつて位を授け受したりし炎帝神農氏、帝舜有虞氏、夏の禹王の如き美風はいつか搔消すやうになくなれり。我今より何地へ身をよすべきぞ。あゝさても面白からぬ事かな。早く彼の世に旅立たん。我が運命は衰へたるかな」と。遂に首陽の山中に餓えて死せり。これによりて伯夷の情を察するは、彼はそも世を怨みしものによ、將た世を怨まざりしものによ。怨めるにも似たり。これ余の首肯し難き所なり。（第一小段）

ある人の曰ふに「天の仕方は公平無私特別に人を親愛するなく、常に善人の仲間となり、其の人に幸福を授くなり」と。伯夷叔齊の如きは善人といはるべきか。仁愛の仕方を積み重ね、身の行を潔白にせること、此の如くなれば、いふまでもなく善人なるべきに、運拙くして飢死せり。加之、孔門の三千人中優等なる七十人の弟子達の中にて、仲尼獨り魯の哀公及魯の家老季康子の間に答へて曰く、顔淵存生中學問を好みしことを取出し譽められたりとのこと、論語雍也篇及先進篇にみえたるを思へば、顔回も無論善人なり、されども顔回の世にあるや毎度囊中乏しくして、酒の粕、米の糠にきたらずして空腹なる思をし、二十九才を一期とし遂に早死せり。伯夷叔齊といひ、顔回といひ、みなこの様に薄命なれば、天の善人に幸福を施すてふことは如何なるものにか、はなはだ覺束なき次第なり。(第二小段)

この反對に有名な盗人たる跖といふ者に至りては、日毎に何の罪なき人間を細かに切りて食物として玩賞し、暴虐にして、道理にそむき、己の思ふがまゝにして、四方を睨みつけ、數千人の手下を集めて、天下に大手を振り歩きたれども、遂に天壽を全うして長生をなせり。是何たる道徳に従ひてこの様なる幸福を受けしならん。實に不可思議なることといはざるを得ず。伯夷や叔齊や顔回の如き有道の人には薄命を興へ、盜跖の如き無道の者には幸運を興ふとは、如何なる天則の頼み甲斐なき明白なる證據ぞや。(第三小段)

晉に古代の事のみならず。近世に於けるも、身持の無法にして、専ら人の忌みさらふことを遠慮なく行ふとも、生涯安逸快樂にして、其の身代の富み榮えて手厚きこと、己一代ばかりにあらず。子々孫々の世をつらぬるまで連綿として絶えざるものあり。これに反し或は嚼君に仕へず。盜泉を飲まざる如く、場所をえらみて其の身を處し、常に言葉をつゝしみて言ふべき時をみだして上にて發言し、道をゆくにも大道を往來して、小さき近道を通抜けせず、公明正大なることならでは、憤りを發し力を出して議論することなけれども、不慮の災難禍害にあひて、身を破り家を失ふものに至りては、勘定のしきれざるほど多きなり。斯くの如く、善惡の應報の顛倒せるをみては、吾は甚だ疑ひ迷はざるを得ざる也。萬が一にも世によくいふが如く、天の仕方は是にして正しき者なりや、非にして邪なるものなりや、かへすがへすも心許なきことどもなり。(第四小段)

### 七 管晏列傳

#### ◎管鮑貧時之交

〔大意〕…本條は世に所謂「管鮑貧時之交」と稱するところにして、朋友の情蜜の如きものある

點を味ふべきなり。文章法上よりすれば、鮑叔の賢をあらはさんとして「客を以て主を形はせる」の筆致見みのがすべからず。

管仲曰。吾始困時。嘗與鮑叔賈分財利。多自與。鮑叔不以我爲貪。知我貧也。吾嘗爲鮑叔謀事。而更窮困。鮑叔不以我爲愚。知時有利不利也。吾嘗三仕三見逐於君。鮑叔不以我爲不肖。知我不遇時也。吾嘗三戰三走。鮑叔不以我爲怯。知我有老母也。公子糾敗。召忽死之。吾幽囚受辱。鮑叔不以我爲無恥。知我不羞小節。而恥功名不顯于天下也。生我者父母。知我者鮑子也。

〔摘釋〕……〔賈〕……行きて賣るを商といひ、見世商を賈といふ。〔謀事〕……事を相談する。〔窮困〕……行き詰る。〔不肖〕……肖は似る。不肖は似ざることなり。〔幽囚〕……暗き所に押込めらるること。〔不羞小節〕……小さな節義を缺くこと位は平氣なるにいふ。ふ。畢竟、愚なこと也。〔幽囚〕……暗き所に押込めらるること。〔不羞小節〕……小さな節義を缺くこと位は平氣なるにいふ。

〔通釋〕……抑々管仲の出世は鮑叔、桓公に取持ちたるによる。されば管仲は鮑叔の恩義を忝く思ひ人に語りて曰く、吾初め貧困なりし時鮑叔と共に見世商したりしが、儲の利を折半すべしはづなるを、事に托して吾に多くを取らせけり。而して鮑叔は吾を以て決して愆深き者とはせざりき。これ我が貧乏にして、多くとらざれば生活の不可能なるを知りたればなり。又吾は前に鮑叔の爲に物事を相談し

て失敗し、今更の様に行詰りたれども、鮑叔は吾を以て目先のみえぬ愚人なりとはせざりき。これ其の見込の巧拙に拘はらず時節によつて都合よく運ぶこと、都合よく運ばぬことあることを彼はよく知つてゐたればなり。又吾三度まで嘗て主君に放逐されたることありしに、鮑叔はやはり吾を以て愚知とはせざりき。是は吾は好運遭遇せざる爲なるを知りたればなり。又前に吾、三度戦ひて三度敗走せしことありしかど、鮑叔決して、吾を以て卑怯者とはせざりき。これ吾に老いたる母ありて養はざるべからざるをよく知りたればなり。又、公子糾軍に敗れ、魯人は殺されし時、同役の召忽、其の難は死したるは、吾暗所に押込められて繩目の辱をうけたりしかども、鮑叔吾を以て身の恥を知らぬ者とは思はざりき。これ吾は些細の節義を缺くと位面目なき事に思はずして、功業名譽の天下にあらはれ聞えずといふことを恥づことを知りたればなり。されば吾身を養ひ育てたる者は父母にして、吾が心を知り事をなさしめし者は鮑叔なり。鮑叔は世にも有難き人也といひけり。

◎晏子及越石父

〔大意〕……「晏平仲友と交る久しうして之を敬す」と論語にいはれたる晏平仲が、越石父を糶泄の中に助け、つれ歸りて我家に置く。越石父俄に絶を乞ふ。故をとへば「知己、無禮」を以て反

す。晏氏乃ち上客となすといふ如何にも面白き條也。

晏平仲嬰者、萊之夷維人也。事齊靈公、莊公、景公。以節儉力行，重於齊。既相，齊食不重，肉妾不衣帛。其在朝，君語及之，即危言，語不及之，即危行。國有道，即順命，無道，即衡命。以此三世顯名於諸侯。越石父賢在縲紲中。晏子出，遭之塗，解左驂贖之，載歸。弗謝入閨。久之，越石父請絕。晏子懼然，攝衣冠，謝曰：「嬰雖不仁，免子於厄。何子求絕之速也？」石父曰：「不然。吾聞君子詘於不知己，而信於知己者，方吾在縲紲中，彼不知我也。夫子既以感寤而贖我，是知己。知己而無禮，固不如在縲紲之中。晏子於是延入爲上客。」

〔摘釋〕……〔晏平仲嬰〕……晏は姓 平は諡（おくりな）。仲は字。嬰は名。〔不衣帛〕……絹物を著さる也。朝……齊の朝廷。〔危言〕……言葉を正しくす。〔衡命〕……衡は斟酌。君命を斟酌して行ふ。〔三世〕……靈公、莊公、景公。縲紲……縲は縲繩。縲はつなぐ。昔、囚徒をこれにてつなきたる也。〔塗〕……途に同じ。〔解左驂贖之〕……四頭立の馬の中の兩馬を服馬といひ、外の兩馬を驂といふ。即ちそへ馬也。贖は金にて罪を買ひとること。左方の添馬を賣り拂ひてその金にて越石父の罪を買ひとれり。〔弗謝入閨〕……越石父に會釋しないで己の居間へ入りたり。〔懼然〕……驚きあはつる様。〔攝衣冠〕……衣冠の端を

かいつまみて風儀を整ふ。〔子〕……御身。〔感寤〕……賢なるに心付く。

〔通釋〕……晏平仲嬰は齊國の萊といふ地の夷維す小邑の人なり。齊の靈公、莊公、晏公に奉公せしが、いつも其の身を節儉にし、奢侈を戒め、善きことあれば、何れもあれ力めて實行する氣象なるをきいて、齊國人に貴ばれたる。此れ身は齊國の宰相とまでなりたれど、食事の膳部は肉一品に限り、二品以上を加へしことなく、召使ふ妾も絹物を着ることなかりき。

晏氏の齊の朝にあるや、君よりの言葉あれば、己れ言葉を正して真直に答へ、毫も阿らず。君よりの言葉なき時は、無用の言を慎みて、身の行を正してゐたりき。國に道ありて正しき時は何事も君命通りに事を行ひ、國に道なくして正しからざる時は君命を斟酌して行へべきは行ふと雖も、行ふべからざるは行はざりき。此の如く自宅にあると朝廷にあるとを問はず、慎重方正なりければ、靈、莊、景三公の間にも、其の名をうんと諸侯の間に顯はして、管仲以後の賢大夫と稱めたりへられたり。（第一小段）

其の頃越石父といふ賢者ありて、何の罪かは知らねども、墨繩に繋がれたる囚徒の中に交はりゐたるを、晏氏ある時、他出の際途中にみれば、氣の毒なる思なし、四頭立の馬の左のそへ馬を取りのけて賣りはらひ、其の代金もて石父の罪を買ひとりて、直ちにこれをその馬車にのせて宅につれかへ

れり。然るに彼は石父に對しそのまゝにて一言の挨拶もなくツイと己の居間に通じけり。暫くして越石父晏子に向ひ、交際を絶ち其の家を退出せんと請ひたり。晏子懼然として驚き慌て、衣冠の端をかいのまま、威儀を正して、居間を出で、會釋し、次の如く曰へり。「吾は仁者に非れば御身に尊敬せらるべしとは思はねど、只今御身を細目の辱より解きあたへしは聊か徳とするに足るべきかと存ず。何として御身は絶交せむことなど乞ひ求むるの急なるか」と。

石父答へて曰へり。「吾が交際を絶たんと請ひし理由は、左様なわけにあらず。吾兼て聞及びたるに、君子とて徳ある人は、己の心を知らぬ者には恥をしのびて屈すれども、己の心を知らぬものには我が志をのべて思ふ所を達せんとするなりとぞ。吾が墨繩にて繋かれたる囚徒の中に在る最中は彼の苦役する者は我の心を知らざれば、其の虐待に甘んじて恥を忍びて屈したり。然るに只今夫子には既に吾の賢なることに心付かれて、金を納めて我身の罪を買取られたることなれば、己の心を知られたる也。己の心を知られ乍ら、一言の會釋もなく、禮儀を失はれしをみれば、無論この身は墨繩に繋がれて、囚徒の中にあるにも劣れること也。これ吾が絶交を願ひし譯なりと。晏子こゝに於て、其の失禮を打詫び、之を堂上に引入れて、上等の客分として扱ひき。(第二小段)

### 八 司馬穰苴列傳

#### ◎景公與穰苴語兵事

〔大意〕…本條は穰苴列傳中最も有名なる條なり。即ち穰苴、莊賈と約して軍門に會せんとす。莊賈後る。穰苴「將に命を受くるの日には其家を忘る」以下の理を以て責め、終に斬罪に當て以て三軍を戒むるところなり。穰苴の人格思ふべし。

景公召穰苴與語兵事大說之。以爲將軍將兵扞燕晉之師。穰苴曰。臣素卑賤。君擢之閭伍之中。加之大夫之上。士卒未附。百姓不信。人微權輕。願得君之寵臣國之所尊。以監軍。乃可。於是景公許之。使莊賈往。穰苴既辭。與莊賈約曰。旦日日中會於軍門。穰苴先馳至軍。立表下漏待賈。〔第一小段〕賈素驕貴。以爲將己之軍而已。爲監不甚急。親戚左右送之。留飲。日中而賈不至。穰苴則仆表決漏。入行軍。勒兵。申明約束。約束既定。〔第二小段〕夕時莊賈乃至。

穰苴曰、何後期爲、賈謝曰、不佞、大夫親戚送之、故留、穰苴曰、將受命之日、則忘其家、臨軍約束、則忘其親、援枹鼓之急、則忘其身、今敵國深侵、邦內騷動、士卒暴露於境、君寢安席、食不甘味、百姓之命皆懸於君、何謂相送乎、(第三小段) 召軍正問曰、軍法期而後至者、云何、對曰、當斬、莊賈懼、使人馳報景公、請救、既往未及、反於是遂斬莊賈、以徇三軍、三軍之士皆振慄、(第四小段)

(摘釋) …… (問伍) …… 問は、村里の總門。伍は、五人組。平民のこと。 (百姓) …… 人民。人民は皆姓があるので百姓といふ。百は大數のこと。 (辭) …… 暇乞ひ。 (且日) …… 明日。 (立表) …… 眞直なる木を立てて日當てとして、日影の廻り移るを見て、刻限を知る。即ち日時計を設くること。 (漏) …… 水を器に盛り、下に小さき穴を穿ちて、水を漏らして、其の分量の減るを見て、刻限を知る。即ち水時計を設くること。 (之) …… 往く。 (仆表) …… 日時計の木を推し倒す。 (決瀾) …… 水時計の水を殘らず落とす。 (行軍) …… 陣中を見廻はる。 (勅兵) …… 勢揃へをする。 (申明約束) …… 軍中の約束の簡條をしかと言ひ渡す。 申は、繰り返す意。 (不佞) …… 不才。 (援枹鼓) …… 陣太鼓の撥を手に把る。 (暴露) …… 野陳を張る。 (懸於君) …… 莊賈の一身に懸かる。 (軍正) …… 軍中の裁判役。 (當斬) …… 斬罪に相當する。 (徇) …… 觸れ示す。 (三軍) …… 昔の兵制は、(一)天子は六軍、(二)諸侯は、大國は三軍、次國は二軍、小國は一軍の定めであつた。一軍は一萬二千五百人。多くの軍勢をいふ。 (振慄) …… 身慄ひをして縮み上がる。

(通釋) …… 景公はこれを聞いて、穰苴をよばれ、戰略上の問答をして、大いにこれに満足して、將軍

職を授け、兵に將として燕と晉との軍勢を防がしめむとせられたりき。

穰苴は、將軍の命を拜して、さて曰ふには「臣は素より卑賤の者であるのに、君には之れを村里の總門の内に住める五人組の平民の中より抜き出だしたまひて、之れを大夫の上座に加へ置かれた。しかし只今俄に將軍職となつたからとて、士卒は臣を侮りて、未だ手に付かず百姓は臣を疑ひて、未だ信仰せず、臣の身柄は微にして顯はれず、臣の權威は軽くして重からずといふわけで、この様では士卒の上に立ちて進退することもむづかしいと思はれるので、願はくば君の寵愛したまへる臣下にして、國人の尊敬せる者一人を申し受けて軍事を監督せしめん。かくのごとくんば、諸軍の折れ合ひも宜しからん」と。是に於て、景公穰苴の請ひを許可して、氣に入りの家來にて、國中の者を能く知りたる、莊賈といふ者を監督として、穰苴と共に往かしめられたり。

穰苴は、既に景公に暇乞ひをして、引き下がりにて、莊賈と約束して曰ふには、「明日の日中に軍門に會合せん」と。翌日、穰苴は、莊賈に先立つて、馬を馳せて、軍中に到着して、日時計の木を立て、水時計の水を漏らし下して、時刻を測りて、莊賈の來るを待ち受けぬ。(第一小段)

然るに莊賈は、素より君の寵愛を恃んで、驕り高ぶり、且つは身分も高貴であつたので、心の中に思ふやうには、將軍は最早軍中へ往きて、出陣の手配りをせり。而して、己はたゞに監督のことなれ



ば、甚だ急ぐにも及ぶまじと、斯くてゆるく支度をして居たところが親戚の者及び左右の召し使ひの者など來りて、其の出陳を見送れり。ところが、莊賈は家に留まりて、別れの酒を飲みて、大いに時を費やしぬ。穰直は兼ねて約束した通り日中まで待ち受けたけれども莊賈一向到着せざりしかば、見張つて居し所の日時計の木を推し倒し、水時計の水を残らず落して、最早時計に用のないことを示し、さて、陣屋に入りて、身支度をなし、軍中を見廻り、兵隊を纏めて勢揃へし、軍中の約束の箇條をしかと言ひ渡して、其の約束の廉々も既に極めてしまひけり。(第二小段)

そして其の夕方になりて莊賈は始めて到着したるところ、穰直のいはく、「何故に約束の期限に後れたりや」と。莊賈は遅參を詫ひて曰へり。「身不肖ながら、諸大夫及び親戚共に見送られたれば、それ〴〵に挨拶せんとして、暫時私宅に留まりたるため遅刻したり」と。

穰直の曰ふに「將軍たる者は、出陣の命を主君より受けたる日には、其の家を忘れて、速に出陣せねばならぬもの也。軍中に臨みて、士卒と約束するときは、其の親の事を忘れて、合戦の手配りせねばならぬもの也。兩軍既に戦端を開きて、陣太鼓の撥を手に把り、進軍の號令を發することの火急なるときは、其の身の事を忘れて、軍勢の掛き引きをせねばならぬもの也。貴君は將軍にはあらざれども、國君より監督として特に任命せられたる者なれば、其の重きこと將軍にも勝されりと見受け

らる。然るに、只今燕、晉の敵國の軍勢、我が領分へ深く侵入して、國內上を下へと騒動し、味方の士卒は、國境に野陣を張り、國君は寢ても席に安んぜず、物を食ひても其の味ひを甘しと思はずして、日夜心配せられるほどときく。又一國の百姓人民の生命は、正に皆貴君の一身に懸かゝり居れり。其の責任の重大なること此の通りなるを、何とて送別などの事を云々せらるべきぞ、怠慢至極ならずや」と。(第三小段)

穰直はやがて軍中の裁判役を呼び出して曰へり。「會合の期限を約束しながら遅參せし者は、軍法にては、如何なる罰に相當するか」と。裁判役は對へて曰へり。「斬罪に相當す」と。莊賈これを聞きて、驚き懼れ、我が手の者をして、早馬にて景公に報知せしめて、救助の沙汰を請はしめたるに、其の者既に往きて、未だ立ち戻らざる中に穰直は遂に莊賈を切り棄て、三軍の士卒に觸れ示しければ、三軍の士卒は、皆身振ひをなし縮み上つて其の號令に服しけり。(第三小段)

(批評)……撰者曰く、此の段は全くかの孫子が寵姫を斬りし意と同じなりと思はる。而して莊賈の誅の基づくところに「人殺權(殺權)」の四字に存す。

九 孫子吳起列傳

◎孫氏試兵法婦人

(大意)……孫子闔廬の意によりて、宮中の美女百八十人を以て軍隊になぞらへ、軍規軍律を教へて訓練をなし、笑ひし二姫を斬りて法、令、の權威を示し氣焰萬丈、終に孫子の偉大に感ぜしむる名條なり。

孫子武者齊人也。以兵法見於吳王闔廬。闔廬曰：子之十三篇，吾盡觀之矣。可以小試勒兵乎？對曰：可。闔廬曰：可試以婦人乎？曰：可。於是許之，出宮中美女得百八十人。孫子分爲二隊，以王之寵姬二人各爲隊長，皆令持戟。(第一

小段)

令之曰：汝知而心與左右手背乎？婦人曰：知之。孫子曰：前則視心，左視左手，右視右手。後即視背。婦人曰：諾。約束既布，乃設鈇鉞，即三令五申之。於是鼓

之。右婦人大笑。孫子曰：約束不明，申令不熟，將之罪也。復三令五申而鼓之。左婦人復大笑。孫子曰：約束不明，申令不熟，將之罪也。既已明而不如法者，吏士之罪也。乃欲斬左右隊長。吳王從臺上觀，見且斬愛姬，大駭，趣使使下令曰：寡人已知將軍能用兵矣。寡人非此二姬，食不甘味，願勿斬也。孫子曰：臣既已受命爲將，將在軍，君命有所不受。遂斬隊長二人，以徇。用其次爲隊長。於是復鼓之。婦人左右前後跪起，皆中規矩繩墨，無敢出聲。(第二小段)於是孫子使使報王曰：兵既整齊，王可試下觀之。唯王所欲用之，雖赴水火猶可也。吳王曰：將軍罷休就舍，寡人不願下觀。孫子曰：王徒好其言，不能用其實。於是闔廬知孫子能用兵，卒以爲將。西破彊楚，入郢。北威齊晉，顯名諸侯。孫子與有力焉。(第三小段)

【捕縛】勒兵……勢揃へする。訓練。【戟】……槍の如し。兩鋒なるを戟といひ、片鋒なるを戈といふ。【面】……汝。【心】……胸。【鈇鉞】……鉄は斧に同じ。鈇はまさかり。小さきを鈇といひ大なるを鉞といふ。共に刑罰の道具たり。【三令五申】……三度も五度も繰返して命令する也。【趣】……速に。【徇】……觸れ示す。【跪】……兩膝を地に附すること。【中規矩繩墨】……規はブ

ンマハシ。矩は曲尺。繩墨は墨繩と墨。皆大工の道具。中(あたる)は訓練の法則に叶ふこと。

(通釋)……孫氏武は齊國の人、其の學びたる兵法をもつて、吳王闔廬にまみえしに、闔廬曰く、「御身の兼ねて著はしたる十三篇の兵書は、吾殘らず目を通して承知せり。御身拙者の爲、少しばかり只今兵隊訓練の實際をみせては呉れずやと。孫子「宜し」と。闔廬、「さらば試みに婦人を兵隊の代りに用ゐらるべし」と。孫子曰く「よろし」と。是に於て吳王、婦人を用ふることを許し、宮中の美女百八十人を出し、孫子に授けたり。然る所孫子はこれを二隊に分ち、吳王の最寵愛の美姫二人をして、各々一隊の長として人毎に皆戟を持たしめたり。(第一小段)

支度の後孫子命じて曰く、「汝等は各々自身の胸と手を背とを知れるか」と。婦人共「知れり」と。孫子「然らば太鼓を打ちて「前」といはゞ銘々胸に目を付けよ。「左」といはゞ銘々の左の手に目を付けよ。「右」といはゞ右の手に目を付けよ。「後」といはゞ銘々の背に目を付けよ。」と。そこで婦人共曰く「承知せり」と。孫子既にこの通り約束をしたる後にて鉄鉞の刑罰道具を用意し、若し約に違はゞ容赦せざるの意を示し、卽座に、三度も五度も繰返し前の如く命令せり。是に於て太鼓を打ちて高聲に「右」と呼びたるに婦人共戯れなりと思ひたりけん大いに笑へり。孫子曰く「約束の明かならず。命令習熟せざるは大將たる者の行届かぬによる」と。重ねて三度も五度も繰返し前の如く命令し、更に太鼓を

うちて、此度は高聲に「左」と呼びたるに、婦人共は又戯れなりと思ひたりけん、大いに笑へり。孫子曰く「約束の明かならず。命令の習熟せざるは大將たるもの、行届かざる爲なれど、約束既に成り、軍法守られざるは軍吏司官の行届かざる罪なれば軍律を以て所分せむ」と。是に於て左右の隊長を切棄てんとす。吳王、高臺よりこの様子をみて愕然として驚き、速に命令を下さしめて曰へり。「拙者己に孫將軍の上手に兵を用ふるを知りたれば、それで最早十分也。拙者はこの二人の姫妾の給事なからん日には、三度の食事も味を覺えぬ也。願はくば二人を切棄つる勿れ」と。孫子これを聞きて對へて曰く「臣は本日君命によりてこの軍の訓練を仰付かれり。將軍となりて軍中にある時は國民の命も尙且受けざることあり。その儀平に御免蒙りたし。」と遂に二人の隊長を切りぬ。是くて重ねて、前の如く太鼓を打ちて號令せしに、婦人共恐怖して意張り、左に向ひ右に向ひ、前へ進み、後へ退き、或は兩膝を地につけ、或は起上り、自由自在に皆訓練の法則に叶ひ、今度は聲を出すは勿論咳拂ひ一つするものもなかりき。(第二小段)

さて吳王に使者を出して孫子報告せしめけり。「兵士は整頓して一様になれり。大王試みに下りて一瞥さるべし。この上は只に大王の用ひんと思召さるゝ通りになりて、水火の中と雖も猶君命に従ふべし」と。吳王寵姫の切捨てられたるを不快に思ひて曰く、「孫將軍は官舎につきて休息されよ。拙者も

はや下りて見物するを望まず。と。孫子これを聞きて曰く、「大王には徒らに軍談兵法を聞くことを好まれて、之を實地に用ゐたまふこと能はず。これにては何の役にも立たざる也。」と。是に於て吳王は孫子の用兵巧なるを知りぬき、用ひて將軍とし、西の方は強大なる楚を破り、都なる郢まで攻入り、北の方は齊晉の兩國を威し、吳王の強き評判を列國の諸侯の間に顯はしき。是れ孫子が其の軍略に骨を折りし結果也。(第三小段)

(批評) …撰者曰く、史記百三十卷中、正に奇抜なるもの、白眉なり、所は宮庭。後宮の美女をかへりて、これが練兵をなす。噫、何たる情景ぞや。臺上に物見せる、吳王闔廬のハラ／＼せる心理描寫亦巧みなる表現たり。剛優、明暗、筆端の自由自由なる、茲に太史公の麗筆を見るなり。

◎孫子教重射及擣虛術

(大意) …本條は二つよりなる。一は「以爲師」迄にして他は終迄なり。前者は孫子、田忌に馳逐重射必勝の法を授くるなり。後者は孫子、輜重車中においての計謀なり。この言まことに價値あり。

忌數與齊諸公子馳逐重射。孫子見其馬足不甚相遠。馬有上中下輩。於是

孫子謂田忌曰。君第重射。臣能令君勝。田忌信然。之與王及諸公子逐射千金。及臨質。孫子曰。今以君之下駟與彼上駟。取君上駟與彼中駟。取君中駟與彼下駟。既馳三輩畢。而田忌一不勝。而再勝。卒得王千金。於是忌進孫子於威王。威王問兵法。遂以爲師。(第一小段) 其後魏伐趙。趙急請救於齊。齊威王欲將孫臏。臏辭謝曰。刑餘之人不可。於是乃以田忌爲將。而孫子爲師。居輜車中。坐爲計謀。田忌欲引兵之趙。孫子曰。夫解雜亂紛糾者。不控捲。救鬪者。不搏擣。批亢擣虛。形格勢禁。則自爲解耳。今梁趙相攻。輕兵銳卒必竭於外。老弱罷於內。君不若引兵疾走大梁。據其街路。衝其方虛。彼必釋趙而自救。是我一舉解弊之圍。而收弊於魏也。田忌從之。魏果去邯鄲。與齊戰於桂陵。大破梁軍。(第二小段)

(摘釋) …「馳逐重射」…馬車に乘りて馳せながら弓を射て大金の掛け事をするなり。重は其の掛け金を手重くするをいふ。  
〔馬足不甚相遠〕…馬の足の弱くして孰れも左程に遠くま。馳すること能はざること。〔上中下輩〕…上中下の三組。〔信然〕…信用して尤なりとなす。〔臨質〕…質は對といはむが如し。相對して弓を射むとす。〔駟〕…四頭立ての馬。〔三驥〕…  
孫子吳起列傳

上中下の三組。「謝」…辭退す。「輜車」…甲冑衣服などを載せる荷車。「解」…紛亂紛糾者不<sub>二</sub>釋<sub>一</sub>…難亂紛糾は絲のもつれ。控は引つ張る。捲は捲き縮む。絲のもつれを解くには無理に引つ張り捲き縮めずして能く絲筋を尋ねて解き分く。「搏擲」搏は手にて撃つ。擲は撃と通ず。「批<sub>レ</sub>充」…批は撃つ。充は吭に同じ。喉元なり。「擗<sub>レ</sub>虛」…空虛を衝く。「形格勢禁」…相手の形勢阻格禁止して手も足も出ぬやうになること。「輕兵銳卒」…手輕に身支度したる銳なる兵。「揚<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>外」…國外に出拂ふ。「罷<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>内」…國內に疲勞す。「釋」…棄て置く。「收<sub>レ</sub>弊<sub>レ</sub>於<sub>レ</sub>魏」…事の弊害を魏へ引き寄す。

(通釋)…田忌は其の頃度々齊の公子達と馬車に乗りて、馳せながら弓を射、大金の掛事をしぬ。孫子或る時其の人々の馬を見るに、足弱くして孰れも左程に遠くまで馳すること能はざる如しと雖も、其の中に又、上中下の三組あることを見留めぬ。是に於て孫子、田忌に物語して曰く「貴君は何事にも頓著なく、但々大金の掛け弓をせられよ。臣は首尾よく貴君を勝たしめむ」と。田忌之を信用して「尤なり」となし、齊王及び公子達と千金の巨額を掛けて、馬を遂ひ弓を射ることを始めぬ。斯くて人々相對し、弓を射むとする場合に至り、孫子田忌に教へて曰く「只今貴君の下等の四頭立ての馬をもて相手の上等の四頭立ての馬に組み合はせ、貴君の上等の四等立ての馬をもて相手の中等の四等立ての馬に組み合はせ、貴君の中等の四頭立ての馬をもて、相手の下等の四頭立ての馬に組み合はせられよ」と。既に其の馬を馳すること上中下の三組みまで済みたるに、田忌は最初の一歩は負けたれど、後の二番は勝ちたれば、遂に齊王の掛けたる千金を手に入れぬ。こは此方の下等の馬は相手の上等の

馬に及ばざれば、一度は負けたれど、相手の中等の馬は、此方の上等の馬に及ばざるをもつて、二度は勝ちたるなり。是に於て、田忌は孫子の智慧に感服し、之を威王に進めぬ。威王親しく兵法の意見を尋ね、其の器量を見抜きたる上にて、遂に用ゐて軍師と爲せり。(第一小段)

其の後魏國、趙の國を攻めたれば趙は危急に迫り、救を齊に請ひぬ。齊の威王之を承諾し、孫臏を將軍として差向けむと思ひしに、孫臏之を辭退して曰く「臣は魏國にて刑罰を受け生き残りたる不具の者なれば、將軍の役には宜しからず」と。是に於て田忌をもて將軍となし、孫子を軍師となし、甲冑衣服などを載せたる荷車の中に居らせ、安坐して専ら軍の掛け引きをなさしめたりき。田忌は兵を引きて直ちに趙へ往かむと思ひしに、孫子の曰く「全體絲のもつれを解くに、無理に引張り、捲き縮むれば、(急々)もつれて解けぬものなり。されば之を解く者は、左様にせずして、能く絲筋を尋ねて解き分くるがよろし。又甲乙の鬪争を救ひ、其の騷動を取り静めんは、我も手をもて亂暴に撃たんか、火の手益々強くなるものなれば、之を救ふ者は左様にせずして、相手の急所と透き間とを見定めて、其の喉元を撃ち、空虛を衝くなり。かやうにすれば相手の形勢阻格禁止して、手も足も出ぬやうになり、其の鬪争は自然に解くるなり。只今、梁即ち魏と趙と攻め合ひて、梁は攻勢を取り、趙は守勢を取りたれば、梁の手輕に身仕度したる精銳なる兵卒は、屹度國外に出拂ひ、老年幼弱の者は、兵糧の

運送などに追ひ使はれて、國內に疲勞せるならむ。貴君は趙へ往かれむよりは、兵隊を引き連れて急速に、魏の都なる大梁へ走せ入り、其の市街道路を足留となし、其の差し當たり空虚なる處を、衝かるゝ方が増しならむ。さらば彼の魏の軍勢は、屹度趙を棄て置きて、自國の難儀を救ふならむ。是れ我は一たび事を擧げ行ひて、一方には趙の圍みを解き、以て其の危急を救ひ、一方には事の弊害を魏へ引き寄せて、之を困却せしむるを得ん」と。田忌は孫子の計略に従ひ、兵を引き連れ、直ちに魏の方へ向ひしに、魏の軍勢は果して孫子の見込の如く、趙の都の邯鄲を引き揚げて、本國へ歸りて齊の人数と桂陵の地に合戦せしが、此の時齊は大いに梁の軍勢を破りけり。(第二小段)

◎吳起自吮卒之疽

(大意)……吳起は兵卒を可愛がりし名將なり。即ち兵卒の疽を吮ふ。兵卒この將の爲何ぞ奮起命を致さざるを得んや。これ吳起の強き所以なり。「魏文公」以下自ら他事也。魏の武侯地勢も國の強弱をいふ。吳起答へて曰く「國實在德不在險」と。名言なるかな。

起之爲將與士卒最下者同衣食臥不設席行不騎乘親裹贏糧與士卒分

勞苦卒有病疽者起爲吮之卒母聞而哭之人曰子卒也而將軍自吮其疽何哭爲母曰非然也往年吳公吮其父其父戰不旋踵遂死於敵吳公今又吮其子妾不知其死所矣是以哭之武侯以吳起善用兵廉平盡能得士心乃以爲西河守以拒秦韓(第一小段) 魏武侯既卒起事其子武侯武侯浮西河而下中流顧而謂吳起曰美哉乎山河之固此魏國之寶也起對曰在德不在險昔三苗氏左洞庭右彭蠡德義不修禹滅之夏桀之居左河濟右泰華伊闕在其南羊腸在其北修政不仁湯放之殷紂之國左孟門右太行常山在其北太河經其南修政不德武王殺之由此觀之在德不在險若君不修德舟中之人盡爲敵國也武侯曰善即封吳起爲西河守甚有聲名(第二小段)

【摘釋】(騎乘)……騎は馬に乗る。乘は車に乗る。「親裹贏糧」……自身に士卒の食ひ擔ふ兵糧を包む。「疽」……惡しき腫物。  
【吮】……膿汁を吸ひ取る。「不旋踵」……くびすを返して敵にうしろを見せぬこと。「中流」……川上と川下との中程。「泰華」……五嶽の一なる西嶽の華山なり。

(通釋)……吳起の兵に將たる方法をみるに、士卒の最も下位なる者と、衣服飲食を同じくし、臥せ眠る

ときは敷物を設けず。外出するときは、馬にも乗らず車にも乗らず、自身に士卒の負ひ擔ふ兵糧を包みなどして何事も士卒と勞苦を分擔せり。吳起の士卒を愛することは前に擧げたる箇條のみならず、猶一條の物語あり。或る時兵卒の中に疽といふ惡しき腫物を病める者ありしに、吳起は其の者の爲めに深切に其の濃汁を吸ひ取りて遣りけり。然るに其の兵卒の母之を聞きて聲を放ちて泣きければ、或人之を訝りて曰く、「汝が伴は兵卒なるを、將軍の身として自ら其の惡しき腫物の濃汁を吸ひ取られたるは、冥加至極のことならずや。さるを汝は有り難しとも思はずして何故に聲を放ちて泣けるぞ」と。母の曰く「左様の譯けにて歎くにはあらず。先年伴の父も吳公の配下の兵卒となりて、伴と同じく惡しき腫物を病みたるに、吳公は自ら其の膿汁を吸ひ取られたれば、父は恩に感じて戰場へ出で、くびすを返して敵にうしろを見せずして、遂に敵中に戦死せり。吳公は今又其の子の膿汁を吸ひ取られたれば、私は伴も亦吳公の爲めに如何なる場所にて討ち死にせむか。其の死に場所を知り兼ねたり。此の譯をもつて、聲を放ちて泣けるなり」と。吳起の士卒氣を取ることの巧みなること、これにても知るべし。文侯は吳起の上手に兵を運用し、其の配下に對しては慾深き性質にも似ず、廉潔公平にして、己の才能を盡くし士卒の心を手に入れたるをもて、遂に吳起をもて西河の太守となし、秦韓二國の強兵を拒がしめぬ。(第一小段)

魏の文侯先に卒去せしかば、吳起は引續きて其の子の武侯に奉公せり。武侯或る時、船を西河にうかべて段々に漕ぎ下り、川上と川下との中程にて兩岸の景色を眺め、吳起を顧みて物語して曰く「さても立派なることよ。此の山と河との固めは。山は高くして越ゆべからず。河は深くして渡り難し。是れ魏の國の寶なり」と。吳起對へて曰く「國の寶は人君の德行仁政に在りて、險阻要害にあらず。其の證據には、昔諸侯に三苗氏といふ者あり。其の國は洞庭湖を左にし、彭蠡澤を右にし、甚だ堅固なりしかども、徳義を修め整へざりければ、夏の禹王之を滅ぼされき。又夏の桀王之居らるゝ都は河水と濟水とを左にし、西嶽の華山を右にし、伊闕山は其の南に在り。羊腸阪は其の北に在り。甚だ堅固なりしかども、政事を修め整ふること不仁なりければ、殷の湯王之を攻め伐ちて、鳴條の地へ放逐せられき。又殷の紂王之國は孟門山を左にし太行山を右にし常山は其の北にあり。太河は其の南を経過して甚だ堅固なりしかど、政事を修め整ふること不徳なりければ、周の武王之を殺されき。此の數々の證據に由りて觀察すれば、國の寶は人君の德行仁政に在りて、險阻要害にあらず。若し君公にも德行仁政を修め整へたまはざらむには、此の舟の中の人々は残らず敵國とならむ。さらば山河の固めありとも、何の役にも立たざるべし」と。武侯之を聞きて曰く、「至極尤なり」と。卽座に起に知行を與へ西河の太守とせしに、其の地に於て好評判なりき。(第二小段)

◎吳起與田文論功

〔大意〕…吳起、田文と功を論じ、はじめ三ヶ條の勝をしめしも、終りに田文「主幼國疑」の時に際し、これを誰にか屬せんとの議論を持出して勝利せり。次は公叔の談。公叔、吳起を害せんとして陰謀をなすの條。あまり、内容おもしろからねど文意把捉練習によろしき箇所なればとれり。

魏置相。相田文。吳起不悅。謂田文曰。請與子論功。可乎。田文曰。起曰。將三軍。使士卒樂死。敵國不敢謀。子孰與起。文曰。不如子。起曰。治百官。親萬民。實府庫。子孰與起。文曰。不如子。起曰。守西河。而秦兵不敢東。韓趙賓從。子孰與起。文曰。不如子。起曰。此子三者皆出吾下。而位加吾上。何也。文曰。主小國。疑大臣。未附百姓。不信方是之時。屬之於子乎。屬之於我乎。起默然良久曰。屬之子矣。文曰。此乃吾所以居子之上也。吳起乃自知弗如田文。〔第一小段〕田文既死。公叔爲相。尙魏公主。而害吳起。公叔之僕曰。起易去也。公叔曰。奈

何。其僕曰。吳起爲人。節廉而自喜。名也。君因先與武侯言曰。夫吳起賢人也。而侯之國小。又與彊秦壤界。臣竊恐起之無畱心也。武侯卽曰。奈何。君因謂武侯曰。試延以公主。起有畱心。則必受之。無畱心。則必辭矣。以此卜之。君因召吳起而與歸。卽令公主怒而輕君。吳起見公主之賤君也。則必辭。於是吳起見公主之賤魏相。果辭魏武侯。武侯疑之而弗信也。吳起懼得罪。遂去。卽之楚。〔第二小段〕

〔摘釋〕…〔府庫〕…金銀を入れて置く藏。庫は諸道具を入れ置く藏。〔鄉〕…郷に同じ。向ふ也。〔賓從〕…賓服する也。德に懷きて歸服す。〔此子三者皆出吾下〕…一本には子の字皆の字の下にあり。その方よろしきか。〔良〕…稍々の字よりは意少し重し。〔尙〕…主君の娘をめとる。身分ちがひなるより尊尙するの意なり。〔公主〕…國君の娘にいふ。〔武侯〕…從僕の言葉の中に武侯といへるは不都合ならん。多分誤字なるべし。假りに君公と譯す。〔壤界〕…國境の地を接すること。〔延〕…引き留むる也。〔捐〕…棄つ。〔馳說〕…游說。〔從橫〕…從は縱。南北を縱とし、東西を横とす。北の方燕の國より南の方楚の國へ、縱に貫きて韓魏趙楚燕齊の六箇國を組み合はせて秦に敵對するを從といひ、西の方秦の國から東の方齊の國へ横に貫きて、此の六箇國を秦の手に附くるを横といふ。戰國時代の通り言葉なり。

〔通釋〕…その頃魏にては始めて宰相の役目を置きて、田文といふ者をその役に取り立てぬ。然るに吳起は心の中に此の國にては我れに肩を並ぶべき者なしと思ひたることなれば、今田文の己の上に立



ちたるを見て不満に思ひ、田文に物語して曰く、「御身と手柄の優劣を議論せむことを請ふ。この儀は宜しからむや」と。田文の曰く「宜し」と。吳起の曰く「三軍の大勢を統べ括りて、將軍となり、配下の士卒をして、戰場において討ち死せむことを樂しましめ、敵國をして押し切りて我が國に抵抗せむことを謀らざらしむことは、御身と己といづれが長じたりや」と。田文の曰く「それは御身に及ばぬなり」と。吳起の曰く「然らば百官の役々の取り締をなし、それらの役目に叶はしめ、萬民を親愛し、我が子弟の如くならしめ、府庫には金銀諸道具を充實せしめて、財用の不足なからむことは、御身と己と孰れか長じたる」と。田文の曰く「それは御身には及ばぬなり」と。吳起の曰く「然らば西河の地を守り、秦の兵をして押し切りて東へ向ひて我が國を攻めざらしめ、韓と趙との二國をして我が徳に懷きて歸服せしめむことは、御身と己と孰れか長じたる」と。田文の曰く「それは御身には及ばぬなり」と。吳起の曰く「然らば此の三箇條は、御身は吾が下手に出で、我れに及ばざるに反して、身分は吾が上に居り、宰相の位に居らるゝは何故ぞ」と。田文の曰く「如何にも前の三箇條は御身に及ばざれども、別に一つの問題あり。主君は幼にして、國民は安危を疑惑し、重役の人々はまだ君に親しみ附かず、百姓共は上を信仰せず、此のむづかしき時に方りて宰相となり、國家を安んぜむことは之を御身の手に依頼すべきか、之を我が手に依頼すべきか。此の一條を聞きなし」と。吳起之を聞きて默然として

一言をも發せず。良々久しく考へ込みてさて曰く、「その一條は御身の手に依頼せむ」と。田文の曰く「此れ我が御身の上に居りて、遠慮せぬ譯なり」と。此の問答にて吳起は自ら田文に及ばぬことに心付きぬ。(第一小段)

田文既に死去して、公叔といふ者その跡役の宰相となり、魏の君の娘を娶りて妻とせり。而して吳起を邪魔物なりとせしに、公叔の從僕の曰く「吳起は此の國より除き去り易き者なり」と。公叔のいはく「如何様にせば宜しからむ」と。其の從僕の曰く「吳起の人柄は節義、廉恥を重んじ、自ら名譽を好む者なれば、尊君には其の氣質に付け込みて、一つの手段を施したまへ。先づ君公と御物語ありて、「全體吳起は賢人なり。然るに君公の御國は小さくして、又強き秦と國界の地を接したれば、臣は内々吳起の此の國に長く留まる心なからむことを氣遣ふなり」と申されよ。さらば必定、君公には即座に「如何様にせば宜しからむ」と仰せらるるならむ。尊公之につけてみて、君公に御物語ありて「君公には試みに吳起を引き留めたまはむとて、吾が姫を汝が妻に遣はすべし」と仰せられよ。吳起此の國に長く留まる心あらば、屹度之を拜受せむ。長く留まる心なくば、屹度之を辭退せむ。此の二つにて彼の去就を卜ひたまへ」と申されよ。さて其の上にて尊君には吳起を朝廷へ召されて、君公より御縁談の事を仰せ出だされたる後に、御同伴にて歸りたまひて、即座に當家の奥方になられたる姫君をし

て、わざと怒りて尊君を輕蔑せしめたまへ。吳起は姬君の尊君を見下げられたる様子を見れば、節義廉恥を重んじて自ら名譽を好む者なれば、己も姬君を頂戴せば此のやうなる侮辱を受くるたらむと思ひて、屹度之を辭退するならむ。さらば君公には吳起を疑ふ心を生じたまひて、之を疎んじたまふに至るべし。吳起は疎んぜらるゝことを知らば、必ず他國へ立ち退くならむ。手段とはかくの通りなり」と。公叔は從僕の言葉を聞きて、その通りに計らひしに、吳起は國君の娘の魏の宰相を見下げたる様子を見て、果して從僕の見込みの通り己の縁談を魏の武侯に辭退せしかば、武侯は之を疑ひて信用せざる様になりぬ。吳起は武侯の意に背きたる廉にて、罪を得むことを恐れ、終に魏を去りて、直ちに楚の國に行けり。(第二小段)

一〇 伍子胥列傳

◎ 伍奢有二子皆賢

(大意)：平王伍奢の二子を計謀もて誘ひ寄せ、とらへて殺さんとす。これもと無忌の陰謀たり。正に事こゝに出づ。二子賢にして共に來ることをなさず。時に臨みて伍尚の言や實に千金の意を寓す。味はふべき哉。本條試験問題等にとりわけよろし。

詢一誤  
詢一正

無忌言於平王曰。伍奢有二子皆賢。不誅且爲楚憂。可以其父質而召之。不然且爲楚患。王使使謂伍奢曰。能致汝二子則生。不能則死。伍奢曰。尚爲人仁。呼必來。員爲人剛。戾忍。詢能成大事。彼見來之并禽。其勢必不來。(第一小段) 王不聽。使人召二子曰。來吾生汝。父不來。今殺奢也。伍尚欲往。員曰。楚之召我兄弟。非欲以生我父也。恐有脫者。後生患。故以父爲質。詐召二子。二子到則父子俱死。何益。父之死。往而令讎不得報耳。不如奔他國。借力以雪父之恥。俱滅無爲也。伍尚曰。我知往終不能全。父命然。恨父召我。以求生。而不往。後不能雪恥。終爲天下笑耳。謂員可去矣。汝能報殺父之讎。我將歸死。尚既就執。使者捕伍胥。伍胥貫弓執矢。嚮使者。使者不敢進。伍胥遂亡。聞太子建之在宋。往從之。(第二小段)

【摘釋】……[質]……人質。[剛戾]……意地強くして人に反對す。[詢]……耻辱。「はぢ」也。[雪]……洗ひ清むること。[就執]……細目に掛かる。[貫弓]……弓を張り詰むること。

(通釋)……費無忌は己の邪魔になる伍奢の一類を除き去らむと考へて、平王に言上して曰く「伍奢に

は二人の男子ありて、皆賢才なる者なれば、此の兩人を生かし置かば、遠からず楚の國の難儀を引き起さむ。只今入牢せしめられたる其の父を人質として之を餌として、兩人を釣り寄せたまへ。さなくば、程なく楚の國の難儀を引き起さむ」と。平王は又、費無忌の口上を信用して、使者を牢屋へ差し向けて伍奢に物語らせて曰く、「汝能く汝が二子の伍尙、伍員を呼び寄せたらば、汝が命は助からむ。若し其の事を能くせずば、汝が命は助かるまじ。孰れなりとも分別せよ」と。伍奢之を聞きて對へて曰く、「長男の伍尙の人柄は仁愛深き者なれば、已れより呼び寄せたらば屹度來るべし。次男の伍員の人柄は意地強くして人に反對し、恥辱を忍びて堪へ難き事をも辛抱する者なれば、能く大事を成就すべし。彼親の招きに應じて來らば、一所に生け捕られむことを見留めなば、其の勢ひ屹度來ることあるまじ」と。(第一小段)

平王の使者立ちもどりて、伍奢の答を言上せしに、平王之を聽き納れずして、別に使者を差し立て、二人の男子を召さしめて曰く、「汝等二人召しに應じて都へ來らば、吾汝等の父を生かすべし。來らずば今之を殺さむ。孰れなりとも決心せよ」と。兄の伍尙は之を聞きて都へ往かむと思ひしに、弟の伍員は不承知にて曰く、「楚王の我が兄弟を召さるゝは、我が父上を生かさむと思はれてのことにはあらず。一人なりとも脱走する者ありて、後日の難儀を生ぜむことを氣遣はれてなり。それ故に我が父

上を人質として引き留め置き、詐りて吾等二人を召さるゝなり。此計略に載せられて二人共うかと都へ到着しなば、親子一所に殺されむ。何とて父上の死を救ふことに利益あるべき。わざと往きて殺されては父上の讎を報ゆることを得ざらむのみ。さる愚なることをせむよりは、今より他國へ出奔して、其の國の力を借りて、父上の恥辱を洗ひ清めむには如かじ。父上と一所に滅亡せむことはすべきことにはあらぬなり」と。伍尙の曰く、「我れとても、都へ往きて終に父上の命を全くすること能はざらむことを知れり。さりながら父上は我れを召し寄せて、生きむことを求めらるゝに、往きもせず、又後日になりて、父上の恥辱を洗ひ清むることも出來ずして、終に天下の人々の物笑ひとならむことを残念に思ふのみ」と。更に言葉を改めて伍員に告げて曰く、「汝は早く此の國を立ち退くべし。汝は能く父の讎を報いよ。我は今より父上の側に往きて、一所に死なむと覺悟せり」と。(第二小段)

伍尙は既におとなしく繩目に掛かりたれば、使者は伍尙をも捕へむとせしに、伍尙は弓を張り詰め矢を執り持ちて、使者に立ち向ひたれば、使者は其勢に吞まれて敢て進み近づかさざりければ、伍尙は其の間に遂に逃じせしが、太子の建が宋の國にゐますことを聞き込みて直ちに宋へ往きて、之に附き従ひたりき。(第三小段)

◎日暮塗遠

〔大意〕…伍員「我必ず楚を覆さん」といへば、包胥「我必ず之を存せん」といふ。伍員終に平王の墓を掘り、「吾日暮塗遠」と傲言す。後條、申包胥は七日七夜哭して秦に師を乞ふ。いづれもそのコントラスト面白き名條也。

始伍員與申包胥爲交。員之亡也。謂包胥曰。我必覆楚。包胥曰。我必存之。及吳兵入郢。伍子胥求昭王。既不得。乃掘楚平王墓。出其尸。鞭之三百。然後止。申包胥亡於山中。使人謂子胥曰。子之報讎。其以甚乎。吾聞之人衆者勝。天定亦能破人。今子故平王之臣。親北面而事之。今至於僂死人。此豈其無天道之極乎。伍子胥曰。爲我謝申包胥曰。吾日暮塗遠。吾故倒行而逆施之。  
〔第一小段〕於是申包胥走秦告急。求救於秦。秦不許。包胥立於秦廷。晝夜哭七日七夜。不絕其聲。秦哀公憐之。曰。楚雖無道。有臣若是。可無存乎。乃遣車五百乘。救楚擊吳。六月敗吳兵於稷。會吳王久留楚。求昭王。而闔廬弟夫概乃

亡歸。自立爲王。闔廬聞之。乃釋楚而歸。擊其弟夫概。夫概敗走。遂奔楚。楚昭王見吳有內亂。乃復入郢。封夫概於堂谿。爲堂谿氏。楚復與吳戰。敗吳。吳王乃歸。後二歲。闔廬使太子夫差將兵伐楚。敗番。楚懼。吳復大來。乃去郢徙於郢。〔第二小段〕

〔摘釋〕…〔以甚〕…極めて甚しきなり。〔北面〕…君臣の相對するとき、君は北に在りて南へ向ひ、臣は南に居りて北へ向ふ。故に君は南面といひ、臣は北面といふ。〔僂〕…辱むるなり。〔無天道之極〕…天道の行き止まりにて一變すべき時節にはあらぬかといふこと。ともいひ、無は無視の意にして、天道を無視することの行き止まりなるかといふことともいふ。〔車五百乘〕…兵軍五百輛也。

〔通釋〕 最初に伍員は生國の楚に在りし時、申包胥といふ者と日頃親しく交はりしが、伍員の逃亡せむとする時に當り、申包胥に物語して曰く、「我は後日に屹度楚の國を轉發して、父兄の讎を報いむ」と。申包胥之を聞きて曰く「さる場合には、われは臣子の分を盡くして、屹度此の國を保存せむ」と。二人はかやうに誓ひて別かれしが、此の度愈々吳の兵の郢に討ち入りたるに及びて、伍子胥は、頻に照王の所在を探したれども、之を見出だし得ざりしかば、先君(平王)の墓を掘り返して其の死骸を引き出だして、「汝は何とて罪もなき吾が父兄を殺したるぞ。我今讎を報ゆるなり」と。罵りて罪人

を罰するやうに、これを鞭うつこと三百遍に及びぬ。この時申包胥は、國亂を避けて或る山中へ逃亡せしが、伍子胥の仕方の餘りに手荒さを聞及びて、人を頼みて伍子胥に言ひ込ませて曰く、「御身の讎を報ゆる仕方は極めて悪しからずや。吾の兼ねく聞き及びたるには、「人衆くして勢の強きときは不義非道なる事を行ひても天の威光に打ち勝つことあれど、天の威光の定まるときは天も亦能く人を破りて、其の惡業を罰するなり」と。今御身は以前の平王の臣下にして、親しく北面の座に就きて此の君に奉公しつる者なるに、今は反りて死人となられたる主君を辱む。これいかに天道の行き止まりて一變すべき時節にはあらぬか。即ち天の威光の定まりて惡人を罰せむ時の來りたるにはあらぬか。能く考へて見られよ」と。伍子胥之を聞きて返答して曰く、「汝我が爲めに申包胥に斷りて曰へ。吾の宿意をはたさむことは、譬へば旅人の日は暮れかゝり道は遠くして、急がねば思ふ處へ行き著かれぬが如く、一刻も猶豫せられぬ場合なれば物の道理を考ふる暇なし。唯々一概に父兄の讎を報ゆるに急なれば、善からぬことゝは知りながら、之を倒行逆施して無理なることを行ひ、敢へて自ら悔いぬなり」と。(第一小段)

さて申包胥は秦の國へ走りて楚國の危急を告げて救ひを秦に求めたれど、秦は之を許容せざりしかば、申包胥は秦の朝廷に立ちて、晝夜聲を放ちて泣くこと七日七夜に及びべり。秦の哀公之を聞きて、慈心を動かして曰く、「楚王は甚だ無道なりといへども、忠臣あることかくの如くなれば、その國存立することなかるべきかは」と。遂に申包胥の願を叶へて兵車五百輛を遣はし、楚を救ひ吳を撃たしめたりき。此の年の六月、秦兵は吳の兵を稷の地に敗りぬ。折りから吳王の闔廬は久しく楚の國に滯留して昭王の所在を求めたるに、闔廬の弟、夫概國へ逃げ歸りて自ら立ちて王となりければ闔廬はこれ聞き及びて、楚を棄て置き歸國して其の弟の夫概を撃ちたるに、夫概忽ち敗走して、遂に楚の國へ出奔せり。楚の昭王は吳に此の内亂あるを見て、始めて心を安んじ重ねて郢の都へ入り、夫概を味方に引き付けて堂谿の地に封じ、堂谿氏とせり。それより楚は重ねて吳と戦ひ吳を敗りたれば、吳王は國へ歸りぬ。其の後二年目に闔廬は太子の夫差といふ者をして、兵に將として楚を伐たしめしに、夫差は番といふ地を取れり。楚は吳の兵の重ねて大に押し寄せ來らむことを懼れて、郢の都を立ち去りて郢の地へ移りたり。(第二小段)

### ◎樹<sup>ウツ</sup>吾<sup>ニ</sup>墓<sup>カ</sup>上<sup>ニ</sup>以<sup>テ</sup>梓<sup>ソウ</sup>

(大意)……吳王、誤信よりして、伍子胥を疑ひ、つひに劍を賜ひて死を命ずるの條。功臣の末路悲惨といふべし。最後の言々皆血涙の文字也。讀者一擲の泪なかるべからざる所也。

吳王曰。微子之言。吾亦疑之。乃使使賜伍子胥屬鏤之劍。曰。子以此死。伍子胥仰天歎曰。嗟乎。讒臣嚮爲亂矣。王乃反誅我。我令若父霸。自若未立時。諸公子爭立。我以死爭之於先王。幾不得立。若既得立。欲分吳國予我。我顧不敢望也。然今若聽諛臣言。以殺長者。乃告其舍人曰。必樹吾墓上。以梓。令可以爲器。而抉吾眼。縣吳東門之上。以觀越寇之入滅吳也。乃自剄死。吳王聞之大怒。乃取子胥尸。盛以鴟夷革。浮之江中。吳人憐之。爲立祠於江上。因命曰。胥山。

【屬鏤】…無し。【屬鏤】…劍の名。【若】…汝。夫差をいふ。【顧】…反りて。【樹】…植う。【梓】…あづきの木。【器】…吳玉の棺。【抉】…穿ち取る。【縣】…懸く。【鴟夷革】…馬車にて酒樽のやうに作りたる囊。不用の時は疊み置くといふ。

(通釋)…吳王、伯嚭の辨口を開きて曰く「御身の助言なしといへども、吾も疾くより彼(伍子胥)が了簡を疑へり」と。是に於て使者を遣はして、屬鏤と銘せる劍を下されて曰く「御身此の劍をもつて自殺せよ」と。伍胥は自殺を命ぜられて、天を仰ぎて歎息して曰く「あゝさても残念なることよ。」

罪なき者を讒言する奸臣の伯嚭こそ必定亂を起さすべき者なれ。さるを吳王は之を知らずして反りて我れを誅戮せむとす。我は汝(吳王)が父の闔廬を輔佐して天下の諸侯の旗頭とならしめき。又汝が未だ跡目に立たざる時より公子達は跡目に立たむと争ひたるを、我れは必死の力をつくして之を先王闔廬に争ひて、幾ど立つことを得ざる運命にありしを立たしめき。汝は既に立つことを得て、我が骨折を有難く思ひて、吳の國の土地を分かちて我れに與へむとまで言ひたれど、我は反りて左様のことを望まざりき。此の通り我は汝が父にも汝にも無二の忠義を盡くしたり。さるを只今、汝は詰らぬ奸臣の言葉を聽き納れて、此の大思ある温厚の長者を殺さむとするは何事ぞや」と。伍子胥はかやうに言ひ放ちたる後に、其の舍人に告げて曰く「我の死にたる後には、屹度我が墓の上に梓の木を殖ゑ置けよ。此の木の成長したる頃には、きつと吳王は敵に殺さるべければ、其の棺桶とならるゝやうにして遣らむ。又吾が兩眼を穿ち取りて、吳の都の東の門の上に愈けて置け。吾はそれにて越の寇の攻め入りて、吳の國を打ち滅さむ有様を見物せむ」と。斯く言ひ置きて自ら首を刎切りて死せり。吳王の夫差は其の死に際の言葉を聞き及びて、大いに怒り彼れの眼にて世の中を見られぬ様にして遣らむとて、伍子胥の死骸を取り寄せ馬の革にて酒樽やうな囊を作りてそれに盛り、之を江水の真中に浮かべぬ。吳の人其の罪なくして殺されたるを氣の毒に思ひて、伍子胥の爲めに一字の祠を江水の河端の山の上に健

立し、其の字に因みて、胥山と名づけ、伍子胥の名を留めぬ。

### 一一 商君列傳

#### ◎ 衛鞅說公以霸道

(大意)：衛鞅景監の紹介にて孝公に見えて、「王者の道」を語る。數回王に満足を與へず。度毎に景監詰る。最後に衛鞅「霸道」を以て王に説く。王未だ君子といふべからずして、それならば甚だ本氣になりて聞けりと。王の不尙をかりて鞅の賢良を述べたり。

公孫鞅聞秦孝公下令國中求賢者將修繆公之業東復侵地迺遂西入秦因孝公寵臣景監以求見孝公孝公既見衛鞅語事良久孝公時時睡弗聽罷而孝公怒景監曰子之客妄人耳安足用邪景監以讓衛鞅(第一小段)衛鞅曰吾說公以帝道其志不開悟矣後五日復求見鞅鞅復見孝公益愈然而未中旨罷而孝公復讓景監景監亦讓鞅鞅曰吾說公以王道而未入也請復見鞅鞅復見孝公孝公善之而未用也罷而去孝公謂景監曰汝客善

# 欠

# 欠

敢徙復曰能徙者予五十金有一人徙之輒予五十金以明不欺卒下令令  
行於民暮年秦民之國都言初令之不便者以千數（第三小段）於是太子犯  
法衛鞅曰法之不行自上犯之將法太子太子君嗣也不可施刑刑其傅公  
子虔（第四小段）其師公孫賈明日秦人皆趨令（第四小段）行之十年秦民大說道不  
拾遺山無盜賊家給人足民勇於公戰怯於私鬪鄉邑大治秦民初言令不  
便者有來言令便者衛鞅曰此皆亂化之民也盡遷之於邊城其後民莫敢  
議令（第五小段）

〔左庶長〕…秦の爵の名。〔什伍〕…五家を伍といひ、二伍を什といふ。即ち十家なり。〔相收司〕…相收め相司  
ること。相收むといふは、組み合ひの中の悪人を相互に取り抑ふること。相司るは相互に氣を付けて之を官に告ぐるなり。〔連  
坐〕…捲き添へにする。〔腰斬〕…胴切りにする。〔分異〕…別家する。〔率〕…律に同じ。定めめの律令。〔大小〕…貧富。  
〔僇〕…戮と通ず。合はす。〔復〕…賦役を免除する。〔末利〕…工業、商業。〔收孥〕…妻子を上へ引き上げて男は奴とし、  
女は婢とする。〔宗室〕…國君の一門。〔不得爲屬籍〕…宗室の人別に入ることを得ぬこと。〔秩〕…格式。〔名田宅〕…  
…名田は古田。即ち己れの名義にて田宅を占有すること。其の占有せる田宅に各々制限を立て、其の制限に過ぐることを  
得ず。貧富皆均しくす。漢の時王侯公主は皆名田を得、吏民の名田は三十項に過ぐることをなきが如きこれなり。〔臣妾〕…僕



婢。〔芬華〕……花やかに飾る。〔輓〕……すらくとの意。〔恭年〕……滿一箇年。〔初令〕……新たに變はりたる法令。〔刑其傳公子處〕……此の刑は相當の刑罰を加へたるまでにて、殺したるにはあらず。〔趨令〕……趨は向ふ。法令を遵奉すること。〔亂化〕……政化を紊亂する。

(通釋)……是に於て、衛鞅をもて左庶長として遂に國法を變更する條令を取り極めたり。其の條々は人民をして、五家を伍とし、二伍を什とせしめ、此の五家十家をして組合中の惡人を相互に取り抑へしめ、又は相互に目を付けて之を官に告げしめ、一家に惡人あるときに九家之を見のがすときは、十家残らず捲き添へにして同罪たらしめ、其の惡人を告げざる者は胴切りの刑に處し、其の惡人を告げたる者は戰場にて敵の首を討ち取りたる者と恩賞を同じくし、其の惡人を己の家に匿したる者は戰場にて敵へ降参したる者と刑罰を同じくするなり。又人民に二人以上の男子ありて、別家せずして一家の中に暮らす者あれば、其の賦税を倍にして二軒分だけ取り立つ。又戰場にて功名手柄ある者は各々定め律令に照らされて、上等の爵を受く。又自分一己の鬪争をして上の手數を掛くる者は各々事の輕重に因りて相當の刑を受く。(第一小段)

總べて人民は身代の大小貧富に拘らず、一同に力を合はせて田畑を耕し、機を織ることを本業として、出精し、其の作りたる粃米絹物を上納することの多き者は、其の身の夫役を免除し、此の本業を差し置きて、工業商業の如き枝葉の利益を仕事とし、及び平生本業を怠りて貧乏する者は、其の一家

内の妻子を残らず上へ引き上げて、男は奴とし女は婢となし、官の仕事に遂ひ使ふなり。又國君の一門たりといへども、戰場にて功名手柄あるにあらざれば、評議の上にて其資格を除きて、一門の人別に入ることを得ざらしむ。總じて身分の尊卑、爵秩、等級を分明にするには、其の等差をもて次第し、名田宅臣妾及び衣服の制限は、其の家々の爵秩をもて次第す。總べて國家に功勞ある者は、其の身を顯達出身させ、國家に功勞なき者は身代は裕福にても、其生活を花やかに飾ることを許さぬことと定めぬ(第二小段)

法令の條々既に完備したれども、まだ布告せざる内に、衛鞅、人民の己を信用せざらむことを氣遣ひて、其の信用を取らむが爲めに、長さ三丈程もある大木を國都の市街の南門の往來繁き處に立て置きて、人民に募りて、能く此の大木を市街の北門の方へ移し置く者あらば、其の褒美として十金を與ふべし、と觸れ示したり。されど人民之を不思議に思ひて、押し切りて移す者なかりしかば、重ねて觸れ示して曰く、「能く移す者には、其の褒美として五十金を與ふべし」と。是に於て一人の男ありて、半信半疑ながら之を移したるに、直ちに其の者に五十金を與へて、人民を欺かざることを明白にせり。さて此のやうに信用を取りたる上にて、遂に法令を國中に觸れ流しぬ。其の法令の民間に行はるゝこと滿一箇年になりたる間に、秦の國の人民のわざ／＼國都へ往きて、新たに變りたる法令の人民に便

利ならぬことを申し立て、之を取り消されむことを願ふ者。千人をもて數ふる程に多くなりぬ。

(第三小段)

是に於て、秦の太子其の法令の箇條を犯し破りたれば、衛鞅の曰く、「法令の行はれざるは、上の人より之を犯し破ればなり」と。やがて太子を刑法に照らして、處分せむとせしが、太子は君の世嗣ぎなれば、刑罰を施し難しとて、其の代りに、太子の守り役の公子の虔といふ者に、相當の刑罰を加へ、其の師範役の公孫賈といふ者の顔に、入墨をせしかば、其の翌日より、秦の國の人民皆恐怖して、法令を遵奉し、其の條目に違ふ者はなくなりぬ。此の太子は後に惠王と稱したる人なり。(第四小段)

此の新規なる法を施すこと十箇年になりて、秦の國の人民皆大いに満足せり。其の法令の嚴なるが爲めに、道路に遺失せる物を私に拾ひ取る者なく、山林原野の淋しき處にも盜賊なく、家毎に十分の供給あり。人毎に生計満足し、人民皆國家の公事の戦争には勇武にして命を惜まず、一己の私事の闘争には臆病にして命を惜しみて、村里大いに治まりぬ。是に至りて秦の國の人民の、最初は法令の人民に便利ならぬことを申したてたる者共も來りて、法令の人民に便利なることを申したてたる者ありしかば、衛鞅の曰く「此のやうなる者は、皆政化を紊亂する邪魔者なれば、都近くに置くべからず」と。残らず之を邊境の城中へ移住せしめられたれば、其の後は人民沈黙して、決して法令の是非得失を論

難することなかりけり。(第五小段)

## 一二 蘇秦列傳

### ◎豈能佩六國相印乎

(大意) 蘇秦は有名なる合従の説(六國聯合して秦に對せんとする)をなせし仁也。今六國を説き得て、併せて相となりその昆弟妻嫂に會ふ。さきには大いに蔑視せしことありし嫂等恐れて敬ふ。寔に人情かくの如きが例也。こゝに蘇秦「六國の相印を帶ぶるに至りし所以のもの吾に二頃の田なかりし爲なり」といふ。名言といふべし。

蘇秦爲從約長。并相六國。北報趙王。乃行過雒陽。車騎輜重。諸侯各發使送之。甚衆。擬於王者。周顯王聞之。恐懼。除道。使人郊勞。蘇秦之昆弟妻嫂側目不敢仰視。俯伏侍取食。蘇秦笑謂其嫂曰。何前倨而後恭也。嫂委蛇蒲服。以面掩地而謝曰。見季子位高金多也。蘇秦喟然歎曰。此一人之身。富貴則親戚畏懼之。貧賤則輕易之。況衆人乎。且使我有雒陽負郭田二頃。吾豈能佩

六國相印乎。於是散千金以賜宗族朋友。

○【摘釋】…「使三人效勞」…朝廷の大臣をして城の郊外まで出迎へて慰勞せしめること。議禮に「賓、近郊に至れば君卿をして朝服して束帛をもて勞せしむ」とあり。「昆弟」…兄弟。「側目」…横目にて見る。「委蛇」…逶迤に同じ、迂曲するさま。眞直に進まぬなり。「蒲服」…匍匐に同じ。腹這ふ。「季子」…蘇秦を指す。末の弟分に當るが故に斯くいへるなり。御身といはむが如し。「負郭之田」…負は背く。郭は城の外曲輪。城の外輪をうしろにしたる田地なり。即ち場末の瘠せたる田地にてはなく、雒陽城の外曲輪に近き肥えたる田地をいふ。「頃」…百畝を頃といふ。

（通釋）…やがて、蘇秦合従の約束の長となりて、六箇國の宰相を兼帶して楚を立ちて北のかた趙の國へ歸り、其の趣を趙王に報告せんとして、自分の郷里の雒陽を通り過ぎたるが、其の行列の馬車、騎馬及び衣服、器械を載せたる荷車はもとより、列國の諸侯より銘々に見送として差し添へられたる使者の同勢も甚だ多數なりければ、其の盛んなること帝王の旅行にもくらぶべき程なりき。周の天子の顯王は最初に蘇秦を用ひられざるのみならず、秦の惠王に文王武王の祭祀に供へたる肉の餘りを送りて、其の功勞を譽められたることなれば、此の期に及びて蘇秦の威勢を聞き及ばれて、殊の外恐怖せられ、其の通行の道筋を掃除せしめられ、朝廷の大臣をして禮服を著用せしめ、手土産の反物を持參せしめて城の郊外まで出迎へしめて、蘇秦を慰勞せしめられたり。蘇秦、美々しき行列にて自分の家に立ち寄りしに、兄も弟も己の妻も兄嫁も、皆恐る／＼横目にて其の様子を窺ひ見るのみにして、押

して、頭を擡げて仰ぎ視る者はなく、始終首を垂れて下を見ながら、其の側に侍り事へて、食物をよく進めて給仕せしかば、蘇秦笑ひて其の兄嫁に物語して曰く、「何故に前には甚だ押柄であつたのに、今日はまた丁寧なるか」と。兄嫁愈々恐れ入りて、委蛇として眞直に進まずして、腹這ひながら顔をもちて地を掩ひて下向きになりて、挨拶して曰く、「今日このやうに尊敬するは、御身が位の高く金の多くなりたるを見ればなり」と。蘇秦喟然として歎息して曰く、「昔も今も唯一人の身なるに富貴なるときは、親戚の人々さへもこれを畏れ、貧賤なるときは、親戚の人々さへもこれを輕んずるなり。親戚身内の人々すら此の通りなれば、況して世間の衆人の現金なるは無理もなきことなり。且つ吾をして此の洛陽城の外、曲輪に近き肥えたる田地の二百畝もあらしめむたらんには、吾はいかで能く學に勉め、今日の如く六箇國の宰相の印章を腰に付くることを得んや。吾の今日此のやうになりたるは、全く貧賤艱苦の御蔭なり」と。是に於て持ち合はせたる千金を散財して、一家親族朋友知人に分ち與へて、其の身の出世を祝ひたり。

一三 張儀列傳

◎張儀說連衡

(大意) ……これ有名なる連衡の説者張儀が、蘇秦の合従の説を破るべく楚王に説く條也。「兵不  
如者勿ニ與挑ニ戰」粟不レ如者勿ニ與持ニ久」は其の中心思想なり。「連衡」とは秦の強國を中心に横  
に各國國際聯盟を結ばんとする説なり。

張儀既出未去聞蘇秦死乃説楚王曰秦地半天下兵敵四國被險帶河四  
塞以爲固虎賁之士百餘萬車千乘騎萬匹積粟如丘山法令既明士卒安  
難樂死主明以嚴將智以武雖無出甲席常山之險必折天下之脊天下  
有後服者先亡且夫爲從者無以異於驅羣羊而攻猛虎虎之與羊不格明  
矣今王不與猛虎而與羣羊臣竊以爲大王之計過也(第一小段) 凡天下疆  
國非秦而楚非楚而秦兩國交爭其勢不兩立大王不與秦秦下甲據宜陽  
韓之上地不通下河東取成臯韓必入臣梁則從風而動秦攻楚之西韓梁  
攻其北社稷安得母危(第二小段) 且夫從者聚羣弱而攻至彊不料敵而輕  
戰國貧而數舉兵危亡之術也臣聞之兵不如者勿與挑戰粟不如者勿與  
特久夫從人飾辯虛辭高主之節言其利不言其害卒有秦禍無及爲已是

故願大王之熟計之(第三小段)

(通釋) ……張儀既に牢屋より出で、まだ楚の國を立ち去らざるに、「蘇君の事を用ゐらるゝ間は己は何  
とて押し切りて之に反對することを發言すべき。」と言ひ遣りぬ。蘇秦の齊にて横死せし由を聞き及び  
たれば、是より遠慮なく我が説を行はむと思ひて、楚王に説きて曰く、「秦の地は天下中の半分程の廣さ  
あり。兵卒の數は四方の國の總體に匹敵し、險阻なる山々を著物のやうに打ち纏ひ、河水の流れを帶  
のやうに引き廻し、四方の要害もて國の固めとなし、虎の奔るが如き勇士は百萬ありて、兵車は千  
輛騎は一萬匹あり。兵糧の糲米を積み蓄へたること、丘山の如し。法律、號令既に明らかにして、士  
卒は戰爭の艱難に安んじ、一命を抛つことを面白く思ひ、君主は賢明にして嚴重なり。將師は智慧あ  
りて武勇なればたとへ甲兵を繰り出す事なしと雖も、常山の險阻を一枚の筵を片端より捲き取るやう  
に容易く取りて、きつと天下の北に在りて、人身の背中の如き此の常山を挫折するならむ。此のやう  
なる勢なれば天下の諸侯は先を争ひて歸服すべし。跡より歸服する者あらば、其の國は秦の兵を受け  
て、他の國よりも先づ早く滅亡せむ。しかのみならず。一體諸侯の合従して秦に抵抗せむとするは、  
多くの弱き羊を驅り立て、猛虎を攻むるに異なることなし。虎と羊と鬪ひて羊の勝たれぬは分り切りた  
ることなり。今大王は猛虎の如き秦と組み合ひたまはずして、多くの弱き羊の如き諸侯と組み合ひた

まへり。臣は内々大王の計策は間違なりと存ずるなり。(第一小段)

凡そ天下の強き國は秦にあらざれば楚なり。楚にあらざれば秦なり。秦楚の兩國互に争はゞ、其の勢兩つながら立たずして一方は屹度倒るゝならむ。大王秦に組み合ひたまはずば、秦は甲兵を押し下して宜陽を足溜りとせむ。宜陽を足溜りとせば、韓の上地の通路絶えむ。又河東より押し下りて成臯を取らば、韓は屹度秦へ入りて臣下とならむ。韓秦へ入りて臣下とならば、梁即ち魏は風向きに連れて動搖して、同じく秦に降參するならむ。是に至りて秦韓梁の三箇國合體して、秦は楚の西を攻め、韓と梁とは其の北を攻めば、大王の國家はいかで危きことなきことを得べき。屹度危くなるならむ。(第二小段)

しかのみならず全體六箇國の爲めに、合従の説を主張せる者は、多くの弱き諸侯を寄せ聚めて、至つて強き秦を攻め敵の力を考へずして、輕々しく戦ひ、己の國は貧乏なるに、度々兵を擧ぐるなり。是れ危殆滅亡を取る仕方なり。臣が兼ねゝ聞き及びたるには我れと彼れとを見比べて、我が兵卒の數の彼に及ばぬものは其の敵に戦争を仕掛くることなかれ。我と彼とを見比べて、我が兵糧の粗米の高の彼に及ばぬものは其の敵と長く對陣することなかれとなり。全體六箇國のために合従の説を主張せる者は、辯舌を飾り、虚言を吐きて、其の國の君主の秦に事へざる氣節を高しと譽め立て、合従

の利益を言ひて合従の損害を言はざる也。されば、俄に秦より攻め伐たるゝ禍あらば如何ともすべからざらむのみ。此の譯なれば、願はくは大王の能くゝ利害得失を計りたまひて、従人の手に乗りたまはざらむことをと。(第三小段)

### 一四 孟嘗君列傳

◎ 受命於天乎。將受於戶乎

(大意)……孟嘗君の生立を述べたる條にして奇なり。後半孟嘗君の客を遇する甚だ厚く、客爲に孟嘗君の門下に集るに至りし由因を記せる也。實に孟嘗君は一代の奇人なる哉。

初田嬰有子四十餘人。其賤妾有子。名文。文以五月五日生。嬰告其母曰。勿舉也。其母竊舉生之。及長。其母因兄弟而見其子。文於田嬰。田嬰怒其母曰。吾令若去此子。而敢生之何也。文頓首因曰。君所以不舉五月子者何故。嬰曰。五月子者。長與戶齊。將不利其父母。文曰。人生受命於天乎。將受命於戶乎。嬰默然。文曰。必受命於天。君何憂焉。必受命於戶。則高其戶耳。誰能至者。

嬰曰子休矣。久之文承聞其父嬰曰子之子爲何。曰爲孫。孫之孫爲何。曰爲玄孫。玄孫之孫爲何。曰不能知也。文曰君用事相齊。至今三王矣。齊不加廣。而君私家富累萬金。門下不見一賢者。文聞將門必有將。相門必有相。今君後宮蹈綺縠。而士不得短褐。僕妾餘梁肉。而士不厭糟糠。今君又尚厚積。餘藏。欲以遺所不知何人。而忘公家之事。日損文竊怪之。於是嬰乃禮文。使主家待賓客。賓客日進。名聲聞於諸侯。諸侯皆使人請薛公田嬰。以文爲太子。嬰許之。嬰卒。諡爲靖郭君。而文果代立於薛。是爲孟嘗君。(第一小段) 孟嘗君在薛。招致諸侯。賓客及亡人有罪者。皆歸孟嘗君。孟嘗君舍業厚遇之。以故傾天下之士。食客數千人。無貴賤。一與文等。孟嘗君待客坐語。而屏風後常有侍史。主記君所與客語。問親戚居處。客去。孟嘗君已使使存問。獻遺其親戚。孟嘗君曾待客夜食。有一人蔽火光。客怒。以飯不等。輟食辭去。孟嘗君起。自持其飯。比之。客慙。自剄。士以此多歸孟嘗君。孟嘗君客無所擇。皆善遇之。

之。人人各自以爲孟嘗君親己。(第二小段)

〔摘釋〕……〔舉〕……取り上ぐ。〔生〕……育つ。〔去〕……棄つ。殺すこと。〔長與戸齊〕……其の身の丈の家の出入口の鴨居に届く程になるなり。〔至〕……出入口の鴨居の高さに届く。〔承聞〕……手透きのをりを何ふ。〔蹈綺縠〕……紗綾縮緬の如き美服を足の下まで引き摺る也。〔短褐〕……寸尺の短き毛織の布子。賤しき者の著物。〔梁肉〕……米と肉。〔糟〕……醴酒。〔比〕人……逃亡人。〔舍業〕……身代を投げ棄つ。〔等〕……一様にする。〔侍史〕……右筆。〔存問〕……見舞ふ。〔蔽火光〕……燈火の蔭になる。〔慙〕……止むる。

〔通釋〕……さて田嬰の子たる田文の事を述べんに、最初に田嬰には四十餘人の子供ありけるが、其の下賤なる妾の腹に男子ありて名を文といひけり。此の田文は五日の五月に出生せり。其の時田嬰、其の母に告げて曰く、「汝が腹に出来たる子は取り上げぬやうにせよ」と。其の母之を悲しきことに思ひ、田嬰に包み匿して内々に取り上げ、之を育てぬ。さて田文の成長するに及びて、其の母四十餘年の兄弟の中を頼み、其の子の田文を田嬰に引き合はせて貰ひぬ。然るに田嬰、其の母の處置を怒りて曰く、「吾汝に此の子を棄てて仕舞へと言ひ付けたり。然るに強ひて之を育てたるは何事ぞ」と。田文父の言葉を聞きて、頭を地に付け、其の言葉に取り縋りて曰く、「父君の五月生れの子を取り上げたまはぬ譯は何故ぞ」と。田嬰の曰へ「五月生れの子は、成長すれば其の身の丈家の出入口の鴨居に届く一程になりて、男子なれば父を害し、女子なれば母を害し其の兩親の爲めにならずと言ひ傳へたればな

り」と。田文の曰く「さらば人間といふ者は天帝の命令を受けて生れ出でたるものなりや、又は家の出入口の命令を受けて生れ出でたるものなりや」と。田嬰斯くと聞きて言葉詰りて黙然たり。田文の曰く「人間といふ者は、屹度天帝の命令を受けて生まれ生ずるものならば、家の出入口には關係なければ、父君には何とて心配したまふべき。若し又屹度家の出入口の命令を受けて生れ出づるものならば其の出入口の鴨居を高く拵へむまでなり。さらば何人能く其の鴨居の高さに届く者あらむ」と。田嬰斯くと聞きて、愈々閉口して曰く「汝は其の話を止めよ」と。此の問答にて何事もなく事済みにけり。其の後程立ちて、田文其の父田嬰の手透きの折を伺ひて、尋ねて曰く「子の子は何と申すぞ」と。田嬰の曰く「孫といふなり」と。田文の曰く「孫の孫は何と申すぞ」と。田嬰の曰く「玄孫といふなり」と。田文の曰く「さらば玄孫の孫は何と申すぞ」と。田嬰の曰く「それまではわからぬなり」と。先づ此の如く問ひ詰めたる後に、田文の曰く「父君は政事を取り扱ひたまひて、此の齊國に宰相たること今日までに、威王、宣王及び現在の主君の三代に及びたり。此のやうに長き間の宰相なれども、齊の領地は以前よりも廣くもならずして、父君の私家の富みは萬金を積み累ねながら、其の門下には唯一人の賢才ある者を見受けざるなり。己が兼ねて聞き及びたるには、將軍の門下には屹度將軍たるべき人物の出づることあり。宰相の門下には屹度宰相たるべき人物の出づることあり」と。

然るに只今父君の奥向きの婦人達は、紗綾、縮緬の如き美服を足の下まで引き摺りたれど、門下の諸士は寸尺の短き毛織の布子をだにも、身に纏ふことを得ず。又父君の召し使はるゝ下男、下女は、米と肉とに充分に腹を肥やせども、門下の諸士は酒の粕米の糠にだにも飽き足らぬなり。此のやうに門下の諸士を疎略にしたまひながら、今父君には又尙ほ金銀、財寶を澤山に貯蓄して、孫子の末の名目も分かぬ者に殘し遣らむと思ひたまひ、齊の公家の事の日々に捐して國勢の衰へ行くを忘れたまへり。己は内々之を不思議に思ふなり」と。是に於て、田嬰始めて田文の賢きことを知り、之を禮遇して、家事向きを主らしめしに、田文門下の賓客を接待すること上手なりければ、賓客日々に進み來りて、田文の善き評判諸侯の間に聞えぬ。諸侯みな人をして薛公の田嬰に、田文をもて相續人の太子とせむことを請はしめれば、田嬰之を許諾せり。其の後田嬰卒去して靖郭君と諡せり。而して田文果して父の遺言によりて、四十餘人の兄弟の中より父に代りて、薛の領地に跡目を相續せり。これを孟嘗君とす。(第一小段)

孟嘗君薛に在りて、諸侯の國に漫遊せる賓客、及び逃亡人の罪ある者を招き寄せたれば、此の人々皆孟嘗君に身を寄せたるに、孟嘗君其の身代を投げ棄て、入費を構はず、手厚く之を待遇せり。此のわけを以て、天下中の諸士を傾け盡くして、己の門下に集むるやうになりて、食客として其の養ひ

を受くる者數千人の多きに達せしが、貴き者と賤しき者との差別なく、皆主人公の田文と衣食を一樣にせり。孟嘗君、此の賓客を接待して、對坐して物語りせり。而して屏風の蔭に、常に右筆ありて、孟嘗君の賓客と物語する事柄を筆記することを掌り、孟嘗君賓客の親戚の居處を尋ねれば、一々之を書き留めたり。さて賓客の立ち去りたる後に、孟嘗君使として其の親戚を見舞はせ、色々の進物を差し送りけり。孟嘗君、或る時賓客を接待して、夜の食事を共にせしに、一人の賓客燈火の蔭になりて、飯を食ひて其の飯の他の人々と一樣ならぬことを怒りて、食ふことを止め、暇を告げて立ち去らむとせしかば、孟嘗君座を起ちて、自ら己の飯を持ちて、其の飯と見比べて一樣なることを示したれば、其の賓客慙ぢ入りて自ら首を掻きちとして死にけり。天下の諸士此のやうに賓客を大切にせるを見て、多く孟嘗君に身を寄せけり。孟嘗君は賓客の善惡高下の差別なく、皆善く之を待遇せしを、人々は銘々に自ら孟嘗君は己一人を親愛せりと思ひて、殊の外満足せり。(第二小段)

【批評】…撰者曰く、本章、「五月の子」のこと、全く、「ヒノエウマ」の迷信に同じ。迷信の却くべきはこれに徴するも明げし。孟嘗君の、少時より客を好めると、散財惜しむなきとの端よくみえたり。其の性、其の筆奇なりといふべし。

◎雞鳴狗盜

(大意) ……これ有名なる孟嘗君の士を多く養ひ居し例證也。秦に難に逢ふ。狗盜をよくするもの部下にありし爲助かりぬ。秦を出で函谷關に至りし時門明かず。雞鳴をよくするもの部下にありし爲に逃るゝを得たりと。

秦昭王聞其賢、乃先使涇陽君爲質於齊。以求見孟嘗君。孟嘗君將入秦、賓客莫欲其行。諫不聽。蘇代謂曰、今日代從外來、見木偶人與土偶人相與語。木偶人曰、天雨子將敗矣。土偶人曰、我生於土、敗則歸土。今天雨流子而行、未知所止息也。今秦虎狼之國也。而君欲往、如有不得還、君得無爲土偶人所笑乎。孟嘗君乃止。(第一小段) 齊湣王二十五年、復卒使孟嘗君入秦。昭王即以孟嘗君爲秦相。人或說秦昭王曰、孟嘗君賢而反齊族也。今相秦必先齊而後秦、秦其危矣。於是秦昭王乃止。囚孟嘗君、謀欲殺之。孟嘗君使人抵昭王幸姬、求解。幸姬曰、妾願得君。狐白裘。(第二小段) 此時孟嘗君有一狐白裘、直千金。天下無雙。入秦獻之。昭王更無他裘。孟嘗君患之。徧問客、莫能對。最下座有能爲狗盜者曰、臣能得狐白裘。乃夜爲狗、以入秦宮藏中。取所獻



狐白裘。至以獻秦王。幸姬爲言。昭王。昭王釋孟嘗君。(第三小段)孟嘗君  
 得。出。即馳去。更封傳。變名姓。以出關。夜半至函谷關。秦王後悔。出孟嘗君。  
 求之。已去。即使人馳傳逐之。孟嘗君至關。關法雞鳴而出客。孟嘗君恐。追至  
 客之居。下座者有能爲雞鳴。而雞盡鳴。遂發傳出。出如食頃。秦追果至關。已  
 後孟嘗君出。乃還。(第四小段)始孟嘗君列此二人於賓客。賓客盡羞之。及孟  
 嘗君有秦難卒。此二人拔之。自是之後客皆服。(第五小段)

【摘釋】……今且……今朝。「木偶人」……木の人形。「土偶人」……土の人形。「抵」……至る。「狐白裘」……狐の脇の下の白き  
 毛の處を取りて仕立てたる皮の著物。美しくして得難きもの。「更封傳」……秦へ入りたる時の旅行券を書き直す。「發傳出」  
 宿驛の旅人を出す。「如食頃」……朝飯を食ふ時分。「拔」……救ひ取る。

（通釋）……秦の昭王孟嘗君の賢才あることを聞き及びて、先づ同腹の弟の涇陽君を齊の國へ人質とし  
 て差送り、孟嘗君に安心せしめて、之を招き寄せて面會せむことを願ひ求めたれば、孟嘗君其の意に  
 應じて秦へ入らむとせしに、門下の賓客之を危みて其の行かむことを願ふ者なく、皆宜しからずと諫  
 めたれど、孟嘗君聽き納れざりけり。其の時蘇代、孟嘗君に物語して曰く「今朝吾外より參り來りた  
 る其の途中に、木の人形と土の人形と話し合へるを見受けたり。其の時木の人形の曰く「天より雨降

り來れり。御身は土のことなれば、雨に濡れて敗れ崩るゝならむ」と。土の人形の曰く「我は土より  
 生れ出でたる者なれば、敗れ崩れたれば元の土に歸らむまでなり。今天より雨降り來れり。御身は木  
 のことなれば、之を水にて押し流し遣らむには如何なる處に止まるべきか。其の行く末は分り難から  
 む」と。今秦は虎狼の如き貪慾無慈悲の國なり。ざるを貴君は往かむと思ひたまへり。若し彼の國に  
 て恐ろしき目に逢ひて、立ち戻りたまふことを得ざることあらむには、貴君は土の人形に其の無分別  
 なることを笑はるゝやうなことなからむや」と。孟嘗君此の諷諫に感服して秦へ入ることを見合はせ  
 ぬ。(第一小段)

齊の潛王の二十五年に、齊は重ねて遂に孟嘗君をして秦へ入らしめたれば、昭王即座に孟嘗君を秦の  
 宰相たらしめむとせしに、或る人秦の昭王に説きて曰く、「孟嘗君は賢才ありて、又齊王の一族なれば、  
 今秦に宰相たれば、屹度齊の爲めになることを先立て、秦の爲めになることを跡廻しにするならむ。  
 然らば秦は危からむ」と。是に於て、秦の昭王孟嘗君を宰相にすることを見合はせ、之を生け捕りて、  
 手段を設け、之を殺さむかと思ひき。孟嘗君大いに驚きて人を昭王の氣に入りの美姬の許に至らせ、  
 之を救ひ解かむことを請ひ求めしめしに、氣に入りの美姬曰く「妾願はくば、孟嘗君の秘藏せらるゝ  
 狐の脇の下の白き毛の處を取りて仕立てたる皮の着物を貰ひ受けむことを。妾が望みを叶へたらんに

は妾も力を盡くすべし」と。(第二小段)

此の時孟嘗君の手に一つの狐の脇の下の白き毛の處を取りて仕立てたる皮の着物ありて、其の直段千金。世の中に二つとなき品なりしが、秦へ入りて之を昭王に献上したれば、別に同様の皮の着物はなかりけり。孟嘗君心配し、如何にせば美姫の望みに應ぜらるべきかと、隨行の一同に尋ねき。誰も能く其の手段を對ふる者なかりけり。折から最も下座に控へたる賓客に、狗の眞似をして物を盗むことの上手なる者ありて曰く、「臣能く昭王に献上せられし、狐裘を取りてこん」と。孟嘗君之を聞きて其の者に頼みしに、夜に入りて狗の眞似をして秦の宮中の寶藏へ忍び入り、其の献上せし狐裘を盗み取りて立ち戻りたれば、孟嘗君之を秦王の美姫に献上せしに、美姫大いに喜びて、孟嘗君の爲めに、昭王に程よく取り成したれば、昭王女子の口先に載せられて、孟嘗君を牢屋より出だしけり。(第三小段)

孟嘗君牢屋を出づることを得て、即座に馬車にて咸陽の都を馳せ去り、秦へ入りたる時の旅行券を書き直し、姓名を取り變へて、函谷關を出でむとて、夜半の頃に函谷關まで到着せり。秦の昭王、美姫の言葉を聽き納れて、孟嘗君を牢屋より出だしたることを後悔し、之を尋ね求めしに、孟嘗君已に立ち去りたれば、即座に人をして傳馬に乗り之を逐ひ掛けさせたり。さて孟嘗君函谷關まで到着せしに、此の關所にては曉に鶏の鳴くを相圖に旅人を出す定めなりしかば、孟嘗君其の刻限にならぬ中に

追ふ者の到着せむことを恐れぬ。折りから隨行の賓客の下座に居る者に、鶏の鳴き聲の眞似をすることの上手なる者ありて、其の眞似をせしに、近邊の鶏之に欺かれて、残らず鳴き出でたれば、關所の番人最早曉なりと思ひ、遂に門を開きて宿驛の旅人を出だしけり。孟嘗君の主從函谷關を出で去りて、朝飯を食ふころになり、秦の追ふ者果して關所に到着せしが、すでに孟嘗君の出で去りたる後なりしかば、之を引き留むること能はずして、空しく都へ引返せり。(第四小段)

最初に孟嘗君は、此の狗の眞似をして、盗むことの手になるものと、鶏の鳴き聲をすることの上手なる者との二人を、賓客の中に列ね置きたるに、賓客は残らず之を恥辱なりと思ひて、同席することを嫌ひしが、孟嘗君の秦の困難あるに及びて、遂に此の二人の働にて之を救ひ取りたれば、これより後、賓客は皆孟嘗君の目の利きたるに服したり」と。(第五小段)

### ◎長鋏歸來乎

(大意)……本條は馮驩の有名なる「長鋏歸らんか」の歌をなせし逸話也。孟嘗君傳舎より幸舎に、又代舎に移して、以て之を遇す。一年の後孟嘗君馮驩をして、薛に貸金を徵收せしむ。馮驩乃ちゆきて、大宴をひらきて、借金せしものを馳走し、「利息を支拂ひ得るものは拂へ。能はざるもの

は證書を出せ」と。かくいひて其の證書を皆焼棄てぬと。

初馮驩聞孟嘗君好客躡屣而見之。孟嘗君曰：先生遠辱，何以教文也？馮驩曰：聞君好士，以貧身歸於君。孟嘗君置傳舍十日。孟嘗君問傳舍長曰：客何所爲？答曰：馮先生甚貧，猶有一劍耳。又蒯綰彈其劍而謂曰：長鋏歸來乎？食無魚。孟嘗君遷之。幸舍食有魚矣。五日又問傳舍長，答曰：客復彈劍而謂曰：長鋏歸來乎？出無輿。孟嘗君遷之。代舍出入乘輿車矣。五日孟嘗君復問傳舍長，舍長答曰：先生又嘗彈劍而歌曰：長鋏歸來乎？無以爲家。孟嘗君不悅。居朞年，馮驩無所言。」（第一小段）  
孟嘗君時相齊，封萬戶於薛。其食客三千人，邑入不足以奉客。使人出錢於薛，歲餘不入。貸錢者多，不能與其息。客奉將不給，孟嘗君憂之。問左右何人可使收債於薛者？傳舍長曰：代舍客馮公，形容狀貌甚辯，長者無他技能，宜可令收債。孟嘗君乃進馮驩而請之曰：賓客不知文不肖，幸臨文者三千餘人，邑人不足以奉賓客，故出息錢於薛。薛歲

不入，民頗不與其息。今客食恐不給，願先生責之。馮驩曰：諾。」（第二小段）  
辭行至薛，召取孟嘗君錢者，皆得息錢十萬，乃多釀酒，買肥牛，召諸取錢者，能與息者皆來，不能與息者亦來，皆持取錢之券書，合之，齊爲會同，殺牛置酒，酒酣，乃持券如前合之，能與息者與爲期，貧不能與息者，取其券而燒之。曰：孟嘗君所以貸錢者，爲民之無者，以爲本業也，所以求息者，爲無以奉客也。今富給者以要期，貧窮者燔券書，以捐之，諸君彊飲食，有君如此，豈可負哉！坐者皆起再拜。」（第三小段）

【摘釋】……【驢】……草履を足突き掛く。【傳舍】……下等の長屋。傳は驛傳の義。【蒯綰】……蒯は茅の類にして繩にするもの。綰は劍の柄なり劍の柄を繩にて捲く。【謂】……歌に同じ。【長鋏】……長き劍の柄。【歸來】……來は添へ字なり。【幸舍】……中等の長屋。幸は客人を寵幸する義。【輿】……馬車の箱。即ち馬車のこと。【代舍】……上等の長屋。代は交代して給仕する義。【管】……常と通ず。【爲家】……一家の暮らしを立つ。【朞年】……滿一箇年。【奉】……仕送るなり。【與其息】……其の利息を拂ふ。【技能】……業前なり。【取孟嘗君錢】……孟嘗君の錢を借用す。【券書】……證書なり。【期】……返済の期限。【燔】……燒き棄つ。【捐】……帳消しにす。

（通釋）……最初に馮驩は孟嘗君の食客を世話することを好める由を聞き及び、其の恩願を受けたく思

ひて、極貧の身なれば草履を足に突き掛けたるままにて尋ね來りて、面會を請ひたるに、孟嘗君一見していはく、「先生の遠方より來臨を辱くせるは満足の至りなり。如何なる事をもて私に教へ下されん意なるか」と。馮驩のいはく「僕は決して左様な譯けにて參りたるにあらず。唯々貴君の士人を愛したまふ由を聞き及びたれば、貧困の身をもて貴君にたよりたるまでなり」と。孟嘗君之を聞きて傳舎といふ下等の長屋に入れ置く事十日目になりて、傳舎の長に問ひて曰く、「此度の客は何事をして日を暮し居るぞ」と。傳舎の長答へて曰はく、「馮先生甚だ貧乏にして唯々一振りの劍を所持せるのみ。其の上又劍の柄は繩にて捲きたるいたつて粗末なる品なり。そして毎日其の劍を弾じて調子を取りて歌ひていはく、『長き劍の柄よ。汝と共に故郷へ歸らむか。此の長屋にては食事の膳に一匹の魚もなし』と。馮先生はかやうに不足を申し居れり」と。孟嘗君これを聞きて馮驩を幸舎といふ中等の長屋に引き移らせたれば、其の日より食事の膳に魚はそはりたり。それより五日目になりて、孟嘗君又傳舎の長に馮驩の様子を尋ねしに、傳舎の長答へて曰く「彼の客人は重ねて例の劍を弾じて、調子を取りて歌ひて曰く『長き劍の柄よ。汝と共に故郷へ歸らむか。此の長屋にては外出するに馬車の用意なし。』と。馮先生はかやうに不足を申し居れり」と。孟嘗君之を聞きて馮驩を代舎といふ上等の長屋へ引き移らせたれば、其の日より出入りの時に馬車に乗ることを得たり。それより五日目になりて、孟嘗

君重ねて傳舎の長に馮驩の様子を尋ねしに、傳舎の長答へていはく、「彼の先生は又常に例の劍を弾じて、調子を取りて歌ひていはく、『長き劍の柄よ。汝と共に故郷へ歸らむか。此の長屋にては故郷の母を迎へ取り一家の暮らしを立て難し』と。馮先生はかやうに不足を申し居れり」と。孟嘗君これを聞きて餘りの事に面白く思はずして、其の儘に棄て置きしに、代舎に居ること滿一箇年程立ちて、馮驩重ねて何事をも言はざりけり。」第一小段

孟嘗君此の時齊宰相を勤めぬたり。家數萬軒もある薛の地に封ぜられたれども、其の食客は三千人もあることなれば、知行の年貢だけにては食客に仕送るに引き足らずして、人をして錢を薛の人民に貸し出させて、其の利息をもて食客の費用に充てむと思ひしに、一年餘りになりても其の元金の入らざるのみならず、錢を借用したる者は多く其の利息をだにも拂ふこと叶はざりしかば、食客の仕送り程なく供給せざらむ様子。孟嘗君これを心配し左右の近習に、「何人を差し向けて負債を薛より取り立てさすべきか」と尋ねしに、傳舎の長いはく、「代舎の客人の馮驩公よからん。其の様子柄といひ顔たちといひ甚だ辯才あり。寛大の長者なれども、外には何の業もなし。此の人ならば薛の負債を取り立てて來るには宜しからむ」と。孟嘗君傳舎の長の言葉を聞きて、馮驩を前に進めさせ之に頼みていはく「四方の賓客僕の不肖なることを知らずして幸に來臨せるもの三千人に及びたれば、知行の年貢

だけにては賓客を奉養するに足らず。故に利息の附きたる錢を薛の地へ貸し出したるに、薛の地よりは一年立ちても元金の入らざるのみならず、其の人民は頗る多く其の利息をだにも拂はざれば、今となりては賓客の食料の供給せざらむことを氣遣はるゝなり。願はくば、先生彼の地へ出張しこれを催促せられむことを」と。馮驩の曰く「委細承知せり」と。(第二小段)

馮驩やがて暇乞して出立し、薛の地に到着し孟嘗君の錢を借用したる者共を呼び寄せたれば、一同皆寄り會ひたり。其の時、馮驩利息の錢を十萬錢だけ先づ手に入れたれば、其の錢にて、澤山に濁り酒を醸造せしめ、肥え太りたる牛を買ひ入れ、錢を借用したる者共を呼び寄せて曰く「利息を拂ふことの出来ると思ふ者は皆來れ。利息を拂ふことの出来ぬと思ふ者も亦來れ。」と。さて追ひ／＼に來りたる者共の錢を借用したる證書を残らず手に取り、之れを一々元帳に引きあはせ、一同に齊しく寄り合ふべき日を取り極めて歸らしめぬ。其の日になりて彼の買入れたる牛を殺し、醸造したる酒を置きて、其の者共に馳走し、酒の程よく廻りたる頃に、馮驩再び證書を手に取り上げ又元帳に引き合はせて利息を拂ふことの出来る者には相對にて返済の期限を取り極め、貧乏にして利息を拂ふことの出来ぬ者には其の證書を取り上げて、之を焼き棄てぬ。さて一同に向ひて曰く「昨年より孟嘗君の錢を貸し出されたる譯は、人民の貧しく元手なき者の爲めに融通を付けて家業を營ましめむとてなり。利息を

求めたる譯は此の知行所の年貢だけにては、三千餘人の食客に仕送るべき餘裕なければなり。此の譯なれば今人民の富みて事足る者は期限通りに返済すべし。貧窮の者は證書を焼き棄て、帳消したれば返済するに及ばず。諸君は強ひて遠慮なく飲み且つ食へ。薛の邑には孟嘗君の如き仁者あれば、いかで恩義に負くことあるべき。一同に有難く心得て精々上を大切にせよ」と。此の一言を聞き坐したる者共皆立ちて、再拜して感謝せり。(第三小段)

### ◎不見夫朝趨市者乎

(大意)……孟嘗君、毀廢されて客皆去り、後召されて宰相となるや亦集る。孟嘗君これを嘆じぬ。馮驩、朝夕市にゆくものを以てたとへ、ねらひたる「物」のなくなれば客來らずして、去るに至るは自然の理也。君客をもとの如く遇したまへと教へぬ。孟嘗君この言をきけりと。この馮驩の言面白きなり。

自齊王毀廢孟嘗君諸客皆去。後召而復之。馮驩迎之。未到孟嘗君太息歎曰。文常好客。遇客無所敢失。食客三千有餘人。先生所知也。客見文一日廢。

皆背文而去。莫顧文者。今賴先生得復其位。客亦有何面目復見文乎。如復見文者。必唾其面而大辱之。馮驩結轡下拜。孟嘗君下車接之。曰。先生爲客謝乎。馮驩曰。非爲客謝也。爲君之言失。夫物有必至。事有固然。君知之乎。孟嘗君曰。愚不知所謂也。曰。生者必有死。物之必至也。富貴多士。貧賤寡友。事之固然也。君獨不見夫朝趨市者乎。明旦側肩爭門而入。日暮之後。過市朝者。掉臂而不顧。非好朝而惡暮。所期物忘其中。今君失位。賓客皆去。不足以怨士。而徒絕賓客之路。願君遇客如故。孟嘗君再拜曰。敬從命矣。聞先生之言。敢不奉教焉。

【摘釋】…〔失〕…禮を失ふ。〔結轡〕…馬車の手綱を結び止めて車を留ること。〔明且〕…夜の引明けなり。〔側肩〕…肩をつき出す。〔門〕…市場の門。〔市朝〕…朝の字は餘計のものならむとも門の字の誤ならむともいへり。後の考に従ふ。〔掉臂〕…大手を振るなり。〔忘〕…一本には亡に作れり。従ふべし。品物のなきをいふ。

（通釋）…齊王が讒言を信じて孟嘗君を廢してより、大勢の食客共皆其の家を立ち去りしが、其の後齊王孟嘗君を召し出して之を復職せしめられたれば、馮驩齊の都より薛へ出向きて孟嘗君を迎へて同車し

ぬ。地を立ちてまだ齊の都へ到着せぬ中に、孟嘗君車中にて溜め息をつきて歎息して曰く「僕は日頃食客の世話をするを好みて、食客を待遇するに決して禮を失ひたることなし。我が家に食客の三千余人もあることは先生の知らるゝ通りなり。然るに此の輩僕の一日廢せられたるを見、皆僕に離れ背きて立去り、一人として僕を顧みる者なし。今幸に先生の周旋に頼りて其の位に復することを得たり。如何に輕薄なる食客なりとも、何の顔ありて重ねてわれに逢はるべき。若し重ねて僕に逢はむ者あらば、必度面上に痰唾を吐き掛けて大いに之を辱めむ」と。馮驩これを聞きて馬車の手綱を結び止めて車を留めて車より下りて孟嘗君を拜したれば、孟嘗君も車より下りて之に接近して曰く「先生は食客共の爲めに詫べむとせらるゝか」と。馮驩曰く「食客其の爲めに詫びむとするにはあらぬ也。貴君の言葉の過失を知らせ申さむが爲めなり。其の譯は、全體物は是非とも其の處まで行き止まることあり。事は固より然るべきことあり。貴君よくこれを知りたまふか」と。孟嘗君の曰く「愚味なる拙者は其の謂れを知らぬなり」と。馮驩の曰く「知りたまはずば御話し申さむ。凡そ世に生きとし生けるは屹度死ぬることあるは物の理。是非とも其處まで行きとまる譯なり。又其の身の富貴なる時は、共に交る人の多く、其の身の貧賤なる時は、共に交はる友の少きは事の固より然る譯なり。貴君は獨り彼の朝な／＼市場へ出向く者を見られざるか。彼の市場に出向く者は、夜の引き明けに肩を突き出

して、市場の門を我後れじと争ひて進み入れども、日暮の後に市場の門前を通行する者は、大手を振りて悠然と歩むのみにて市場を顧みる者なし。このやうに朝と暮れとに人情の相違するは朝を好みて暮を惡むが爲めにはあらず。夕方になれば其の心中に期し望む品物のなくなればなり。今貴君は宰相の位を失はれたれば、賓客之れを見限りて皆立ち去れり。是當然のことなれば、士人の無輕情薄を怨むには足らぬ也。若し之を怨み給はば、益もなく賓客の慕ひ來るべき通路を絶ち切りて世の人望を失はるゝならむ。願はくば貴君の賓客を待遇し給ふこと以前の如くならむことを」と。孟嘗君之を聞きて感心して曰く「敬みて先生の命令に従はむ。先生の言葉を聞きて押して教を奉ぜざらむや」といへり。

### 一五 范雎蔡澤列傳

#### ◎范雎上書

(大意) ……范雎上書の文也。范雎秦王に取り入らんとす。曰く「明主は賞刑爵録當り、暗君は賞刑爵録常に當らず」と。而して明主よく國中に賢を求めて採用するをのべ、又玉細工人の例を引き、極力己を用ひて呉れよの意を述べ。句法、韓非子に似たるところあり。よく讀解すべし。

范雎乃上書曰。臣聞明主立政。有功者不得無賞。有能者不得無官。勞大者其祿厚。功多者其爵尊。能治衆者其官大。故無能者不敢當職焉。有能者亦不得蔽隱。使以臣之言爲可。願行而益利其道。以臣之言爲不可。久留臣無爲也。(第一小段) 語曰。庸主賞所愛而罰所惡。明主則不然。賞心加於有功。而刑必斷於有罪。今臣之胷。不足以當樞質。而要不足以待斧鉞。豈敢以疑事嘗試於王哉。雖以臣爲賤人而輕辱。獨不重任。臣者之無反復於王邪。(第二小段) 且臣聞周有砥礪。宋有結綠。梁有縣藜。楚有和朴。此四寶者。土之所生。良工之所失也。而爲天下名器。然則聖王之所弄者。獨不足以厚國家乎。(第三小段) 臣聞善厚家者。取之於國。善厚國者。取之於諸侯。天下有明主。則諸侯不得擅厚者。何也。爲其割榮也。良醫知病人之死生。而聖主明於成敗之事。利則行之。害則舍之。疑則少嘗之。雖舜禹復生。弗能改己。語之至者。臣不敢載之於書。其淺者又不足聽也。意者臣愚而不概於王心邪。亡其言。臣者

賤而不可用乎。自非然者。臣願得少賜游觀之閒。望見顏色。一語無効。請伏斧質。」(第四小段) 於是秦昭王大說。乃謝王稽。使以傳車召范雎。(第五小段)

〔摘釋〕…〔當「稱質」〕…罪人を開切りにする臺に据えらるゝなり。〔要〕…腰と通ず。〔斧鉞〕…斧はをの。鉞は、まさかり。小さきを斧といひ、大なるを鉞といふ。〔嘗試〕…嘗も試みるなり。〔任〕…身元を保證す。王稽を指す。〔反復〕…裏返るなり。〔砥礪〕…結縁。縣蔡…和朴…皆玉の名。〔割策〕…策策を割き取る。暗に穰侯を指す。〔語之至者〕…語の至極立ち入りたること。暗に宣太后穰侯の事を指す。〔概〕…感觸するなり。〔言臣者〕…王稽を指す。〔游觀〕…物見遊山なり。〔傳車〕…宿繼ぎの車。

〔通釋〕…范雎(機)に乗じて秦王に取り入らむと思ひ、書面を差上げて曰く「臣がもと／＼聞き及びたるに、賢明なる人主の政事を行ふには、國家に手柄ある者には褒美を與へざるを得ず。其の身に才能ある者には官職を授けざるを得ず。骨折の大なる者は其食祿も厚く、手柄の多き者は其の爵位も尊く、能く衆人を治むる者は其官職も大也。されば其の身に才能なき者は押切りて官職に當り實務を執らず、其の身に才能ある者も亦隱蔽して引籠る事を得ずと。されば臣が言葉をもつて宜しと思し召されば、之を實地に行ひて、益々其仕方を利用せられむことを願ふなり。若し又臣が言葉を宜しからずと思召されば、久しく臣を引き留め置かれうとも臣は何等の御用にも立つまじ。」(第一小段)

古語に曰く「凡庸なる人主は己れの愛し好める者に褒美を與へ、己の惡み嫌へる者に刑罪を加ふれど、賢明なる人主はさにあらずして、褒美は屹度手柄ある者に加へ、刑罪は屹度罪過ある者に決斷するなり」と。今臣が胸は罪人を胸切にする臺に据ゑらるゝに足らず、臣が腰は罪人を切る斧鉞を待ち受くるに足らぬ數ならぬ身なれども、いかで押し切りて疑はしき事柄をもて、大王を試み其の得失を實驗せむとする者なるべき。賞罰を正しくするは、國家の利益なりと信じたればこそ、かやうに申し上げたるなれ、大王には臣をもて取るに足らぬ下賤なる人物なりと思召されて、輕蔑侮辱したまふとも、獨り臣が身元を保證して、大王に推薦したる者の大王に裏返りして、不臣なることを働くことなきを大切なりと思し召されざらむや。しかのみならず臣がもと／＼聞き及びたるには、周には砥礪といふ玉あり、宋には結縁といふ玉あり、梁即魏には縣蔡といふ玉あり、楚には和朴といふ玉あり。此の四つの寶物は皆、玉細工人の手より成りたる者にして、其上手なる玉細工人も其の結構なることを見損じたる者にして、世にも稀なる天下の名器となりぬとぞ。されば神聖なる大臺の見棄てたまへる者として獨り國家の幸福を厚くするに足らざらむや。失禮ながら御眼鏡違ひ御見落しもあるべし。(第三小段) 臣がもと／＼聞き及びたるに、善く一家を手厚く肥す者は、其の奉公人を一國內より取りて家事の相談相手とするなり。善く一國を手厚く肥す者は其の奉公人を列國の諸侯より取りて國事の相談相手と



するなりと。天下に賢明なる人主ありて、天下の政事を料理する時は、其の恩澤を平均に普及するが故に、其の下に立つ列國の諸侯は、我儘に自分の國ばかりを手厚く肥やすことを得ざるは何故ぞ。これは外の譯にてはなし。賢明なる人主は其の繁榮を割き取りて、之を天下に平分すればなり。(第四小段) 范雎の書面の文言なり。是に於て秦の昭王大いに満足して王稽に善き人物を取り持ちたる謝禮を述べ宿次ぎの車を差し向けて范雎を御殿へ召し寄せたりき。(第五小段)

【批評】…一、撰者曰く、本文の長所は其の明快なる論述にあり。一路平明よく條理を盡せり。一篇の中三つの「臣聞」を用ひて議論のスタートを切れるも面白し。

### ◎亢龍有悔

(大意)…蔡澤應侯に對していふ條なり。應侯若し位を秦に戀ひて功を分ち退くことを求むることを忍ばずば、名は僇辱にありて、身は全かるべからざることを述ぶ。後節「水に鑑みるもの」「亢龍有悔」などの引例巧みにして、君これを熟計せよと結べるところ、史記一流の文法也。

君獨不觀夫博者乎。或欲大投。或欲分功。此皆君之所明知也。今君相秦計

不下席。謀不出廊廟。坐制諸侯。利施三川。以實宜陽。決羊腸之險。塞太行之道。又斬范中行之塗。六國不得合從。棧道千里。通於蜀漢。使天下皆畏秦。秦之欲得矣。君之功極矣。此亦秦之分功之時也。如是而不退。則商君。白公。吳起。大夫種是也。(第一小段) 吾聞之。鑿於水者。見面之容。鑿於人者。知吉與凶。書曰。成功之下。不可久處。四子之禍。君何居焉。君何不以此時歸相印。讓賢者而授之。退而巖居川觀。必有伯夷之廉。長爲應侯。世世稱孤。而有許由。延陵。季子之讓。喬松之壽。孰與以禍終哉。即君何居焉。忍不能自離。疑不能自決。必有四子之禍矣。易曰。亢龍有悔。此言上而不能下。信而不能誦。往而不能自返者也。願君孰計之。(第二小段)

【摘釋】…「博」…雙陸の遊び。「欲大投」…大勝負をして全勝を得むと思ふ。「欲分功」…掛けたる金を少しづつ分け取りせむと思ふ。「廊廟」…廊は堂下の廻廊なり。廟は王宮の前殿なり。二字にて政事堂のこと。「利施三川」以實宜陽…施は展ぶといはむが如し。三川の利益を展開して宜陽の府庫を充實するなり。「決」…切り開くなり。「斬范中行之塗」…斬は絶つ。范氏と中行氏との通路を絶ち切る。三晉の通路を絶ち切ることをいふ。「棧道」…釣り橋。「白公」白起なり。「書」…逸書なり。「巖居川觀」…遁世して人事を顧みず山水を友として其の志を養ふこと。「孤」…王侯の謙稱なり。拙者。

〔喬松〕……王子喬と赤松子と。〔亢龍有悔〕……上り過ぎて下ること能はざる龍は後悔することあるをいふ。

(通釋)……貴君は獨りあの雙陸の遊をする者を見物せられざるか。雙陸の遊をする者は、或は一度に大勝負をして全勝を得むと思ふことあり。或は掛けたる金を少しづつ分け取りせむと思ふことあり。一度に大勝負をして全勝を得むとすれば、よく勝てば大利益なれど、勝たざれば取り返しの付かぬものなり。之に反し掛けたる金を少しづつ分け取りせむとすれば、勝ちても利益少なけれども、負けても跡の失敗なし。此事は皆貴君の明白に承知せらるることならむ。今貴君は秦の宰相として大臣の座席を下らずに計畫し、政事堂を出でずにはこび、座して諸侯を制し、三川の利益を開きて、宜陽の府庫を充し、羊腸の險阻を開き、大行の道路を塞ぎ、又昔は范氏と中行氏との領分なりし、三晉の通路を絶ち切られたれば、韓魏楚趙燕齊の六ヶ國は合従するを得ず、千里の山谷に釣り橋をかけて、蜀と漢とに交通し、天下中の人々をして皆秦の威勢を畏れしめられたれば、秦王の欲望は手に入りて、貴君の手柄は至極せり。これ亦秦にて、彼の雙陸の遊をする者の掛けたる金を、少しづつ分け取るが如く、貴君の手柄を他人にも分けて、利益を共にせらるべき時なり。是の如くにして、猶ほ一人にて利を貪り、權勢の地位を去られずば、商君白君吳起大夫の種と同様の人ならむ。(第一小段)

吾が兼ねく聞き及びたるには、水を鏡とすれば顔の様子を見らるゝと。人を鏡とすれば、吉事と

凶事とを知らるゝなりとなり。又書經に漏れたる逸書にいはく、「成就したる功名の下には久しく處られぬものなり。」と。商君白起吳越大天の種の四子の禍は、貴君は孰れの境遇に居られむか。貴君は何とて此の時を以て宰相の印章を返上し、賢才ある者に役を譲りて其の印を受け、身を退きて人事を顧みず、山水を友として、其の志を養はざる。此のやうにせば、屹度昔の伯夷の如き廉潔なるほまれありて、久しく應侯となりて子々孫々の世に至るまで、王侯の謙稱なる弧と稱して昔の許由の堯の天下を辭し、延陵の季子の吳の國を譲りし盛徳と、王子喬赤松子の長壽とあらむ。之を四子の禍をもて終りに比較せば、孰れか勝れざらん。即ち貴君は孰れの境遇に居られむか、猶此の上にも忍びて自ら權勢を離るゝと能はず、疑ひて自ら去就を擇すると能はずば、屹度四子の禍あらむ。易經に曰く「上り過ぎて下ること能はざる龍は後悔する」と。此れ上りて下ること能はず、伸びて屈すると能はず、往きて自ら返ると能はざる者をいへるなり。願くば貴君のこれを熟計せむことを」と。(第二小段)

〔批評〕……一、撰者曰く、凡そ漢文の妙、その譬喩の巧なるにある多しと雖も、通讀一過顧みることなくんば乃ち止む。本條、冒頭「博者」に起筆し、「鑒於水」や「亢龍」等の譬喩、引用句、適所に出で來りて、文の圓玄、變化を助く。其の他所論の緻密なる亦史記中の名條也。

### 一六 樂毅列傳

#### ◎燕惠王讓樂毅

〔大意〕…本文は燕の惠王、騎劫をして樂毅に代らしめたるために、田單に軍を破られたるをみ、樂毅の趙に下りしことを恨み、これと呼びかへさんとするに對し、樂毅、仲々應ぜずして、應ぜざるの理を手紙にて述ふる條也。

燕惠王後悔使騎劫代樂毅以故破軍亡將失齊又怨樂毅之降趙恐趙用樂毅而乘燕之弊以伐燕燕惠王乃使人讓樂毅且謝之曰先王舉國而委將軍將軍爲燕破齊報先王之讎天下莫不震動寡人豈敢一日而忘將軍之功哉會先王弄羣臣寡人新即位左右誤寡人寡人之使騎劫代將軍爲將軍久暴露於外故召將軍且休計事將軍過聽以與寡人有隙遂損燕歸趙將軍自爲計則可矣而亦何以報先王之所以遇將軍之意乎（第一小段）樂毅報遺燕惠王書曰臣不佞不能奉承王命以順左右之心恐傷先王之

明有害足下之義故遁逃走趙今足下使人數之以罪臣恐侍御者不察先王之所以畜幸臣之理又不白臣之所以事先王之心故敢以書對（第二小段）

〔摘釋〕…〔弄羣臣〕…羣臣を見棄る。死にたることを遺廻しにいふ言葉。〔暴露〕…野陣を張る。〔不佞〕…不才といはむがし。〔王命〕…惠王の召し返す命令。〔書足下之義〕…罪なくして大將を殺すは不義なるなり。〔數〕…責む。〔侍御者〕…御附の女中連なり。惠王を直接指さぬなり。〔畜幸〕…給養寵幸すること。〔白〕…明かにする也。

〔通釋〕…燕の惠王其の後に成りて、騎劫をして樂毅に代らしめたる故をもつて、田單の爲めに軍勢を破られ將校を戦死せしめ、折角取りたる齊の地を失ひたる事を悔ひ、又樂毅の趙に降りし事を怨み、趙の樂毅を用ゐて、燕の疲弊したるに乗じて燕を伐たむ事を恐れたり。燕の惠王是に於て人を樂毅の下に遣して、其の趙に降りし事を責めしめ、且は己の手落をうちわびていはく、「吾が先代の君主燕の一國を擧げて將軍に委任せられたれば、將軍燕の爲に齊を破りて先王の讎を報いたり。天下中の人々其の働きを見聞して震動驚愕せざる者なし。拙者いかでか一日として將軍の手柄を忘るべき。折から丁度先王羣臣を見棄て、棄去せられて、拙者新たに位に即きたれば、左右の近臣益なき事を申し立て、拙者に心得遣ひをせしめたり。さりながら騎劫をして將軍に代らしめたるは、將軍の久しく國外

に野陣を張りて苦勞したるが故に、將軍を召し返して暫時休息せしめ、前途の事を相談せむと思ひたればなり。さるを將軍聽き違へて、拙者と仲悪しきが故に呼び戻されたるならむと思ひて、遂に燕を見て趙へ身を寄せたり。將軍の自己の便利を計るにはそれにて宜しからむ。さりながら何をもて先王の將軍を寵遇せられし厚意に報いむとするかと。(第一小段)

樂毅これに返事をして燕の惠王に手紙を送りていはく、「臣不才にして大王の召し返さるゝ命令を拜承し——左右の近臣の心に順ふ事能はざるは、若し燕の國へ立ち戻らば罪なくして大將を殺されて先王の明鑒を傷ひ足下の高義を害せむ事を恐るなればなり。されば餘儀なく齊の國より遁逃して趙の國へ走れり。然るに今足下には人をして臣が罪を責めしめたまへり。臣は御附の女中達の先王の臣を給養寵幸したまひし譯を察せず。又臣が先王に事へ奉りし心を明らかにせざらむことを恐るゝが故に、あへて手紙をもつて御對へ申すなりと。(第二小段)

【批評】……一、撰者曰く、後節の直指は、樂毅の對書、すなはち「恐侍御知不察先生」の句にあり。中間多くは洵にその意を説けるものとみるを得べし。前節は惠王の「心理描寫」相當によく出来たり。

◎樂毅上書之一節

(大意)……これも、樂毅、燕の惠王に奉るの手紙の一節也。「賢聖の君は功立ちて廢せざるること」乃至、「身を免れ功を立て、以て先王の跡を明らかにすることの臣たるの上計なる」こと等を論じ、己燕を助けし餘澤あることを言へる也。

臣聞賢聖之君。功立而不廢。故著於春秋。蚤知之士。名成而不毀。故稱於後世。若先王之報怨雪恥。夷萬乘之強國。收八百歲之蓄積。及至羣臣之日。餘教未衰。執政任事之臣。修法令。慎庶孽。施及乎萌隸。皆可以教後世。(第一小段) 臣聞之善作者。不必善成。善始者。不必善終。昔伍子胥。說聽於闔閭。而吳王遠迹。至郢。夫差弗是也。賜之鳴夷。而浮之江。吳王不寤。先論之。可以立功。故沈子胥。而不悔。子胥不蚤。見主之不同量。是以至於入江。而不化。夫免身立功。以明先王之迹。臣之上計也。離毀辱之誹謗。墮先王之名。臣之所大恐也。臨不測之罪。以幸爲利。義之所不敢出也。(第二小段) 臣聞古之君子。交絕不出惡聲。忠臣去國。不潔其名。臣雖不佞。數奉教於君子矣。恐侍御者之

親左右之說不察疏遠之行故敢獻書以聞。(第三小段)

〔摘釋〕…〔著於春秋〕…歴史の上に傳はる。〔蚤知之士〕…先見ある士。〔夷〕…平ぐ。〔八百藏〕…齊の太公望より滑王に至るまでの年數。〔慎庶孽〕…早く太子を定めて妾腹の子の内亂を豫防すること。〔萌隸〕…萌は根に同じ。隸は奴隸を尤なりとせざることを。〔騶夷〕…馬の革にて酒樽の様に作りたる囊。不用の時は疊み置く。〔寤〕…悟に同じ。〔先論〕…伍子胥の時に先立ちて論じたる事。〔蚤〕…早く。〔不化〕…目的を變化して他國へ立ち退かぬ。〔離〕…離と通ず。遺ふ。〔墮先王之名〕…先王の人を知りたる名前を落とす。〔臨不測之罪〕…燕を去りて趙へ走りたる測るべからざる重罪に臨む。〔以幸爲利〕…燕の疲弊したるを幸なりとして、趙をして之を伐たしめて己の利益を圖るなり。〔義之所不救出也〕…義として決して心に浮かばぬなり。〔親〕…親愛して信用する。

〔通釋〕…臣がもと／＼聞き及びたるに、「賢聖の君は功業立ちて廢せざるが故に歴史の上に傳はり、先見あるの士は名譽なりて損せざるが故に後の世にまで稱せらるる」となりと。先王の齊に對して怨を報ひ、恥を雪ぎ給ひしが如きは、一萬輛の兵車を持てる強き國を平けて、太公望より滑玉に至る、八百年間に蓄へたる財物を手に入れたまひしことなれば、羣臣を見棄て、薨去し給ひ、…、亂を豫防し、下々の至りて賤しき者にまで其の法令を施し及ぼしたるは、皆後の世に教ふべき事ども

なり。(第一小段)

臣がもと／＼聞き及びたるに、「上手に事を、爲す者なればとて、屹度上手に其の事を成就するとは限らぬなり。上手に事を始むる者なればとて、屹度其の事を終へ果たすとは限らぬなり」と。昔伍子胥は其の説を吳王の闔閭に聽き納入られたれば、吳王の闔閭は遠く進みて楚を破りて郢の都まで至りしが、其の子の夫差は伍子胥の諫を尤なりとせずこれに馬の革にて酒樽のやうに作りたる囊を賜ひ、其の死骸を盛りて江水に投げ込みき。吳王の夫差は、伍子胥の時に先立ちて論じたる手柄を立つべきことを悟らざりしが故に、伍子胥を江水に沈めて後悔せざりき。伍子胥は早く主君の闔閭と夫差との器量を同じくせざるを見抜かざりしを以て、江水に投げ入れらるるまで目的を變化して他國へ立退かざりき。全體身の禍を免れて手柄を立て、先王の事迹を明らかにするは、臣が上等の計策なり。名譽を毀換し恥辱を受くる誹謗に遭ひ先王の人を知り給へる御名前を落さむことは、臣が大いに恐るゝ所なり。燕を去りて趙へ走りたる測るべからざる重罪に臨みながら、燕の疲弊したるを幸なりとして、趙をしてこれを伐たしめて、己の利益を圖らむことは、義として決して臣が心に浮かばざることなり。(第二小段)

臣がもと／＼聞き及びたるに、「昔の徳ある君子は、人と交際を絶ちても其の人の事を惡しく罵る聲

を口より出ださぬなり。忠臣は、其の國を立ち去りても、己の罪なきことを人に語りて其の名を潔白にせぬなり」と。臣は不才なりといへども、これまで度々教訓を徳ある、君子に承りてこれを大事に守りたれば、自己の利益を圖らむとて釋大王の御不爲になるべき事を企てむとは決して存じ寄らぬなり。唯大王の御附の女中達の大王の左右の近臣の説を親愛して信用して、掛け離れて疎遠なる臣が身の行を推察せられざらむことを恐るゝが故に、憚りながら手紙を差し上げて上聞に達するなりと。(第三小段)

【批評】……一、撰者曰く、本條第一小段のセンテンス頗る長きは、文章法上の注意點也。後節、「人臣の道」論の純正なる、神皇正統記を讀むが如し。

### 一七 廉破藺相如列傳

#### ◎相如奉璧入秦

(大意)……相如趙の寶玉を以て秦に入る。蓋し、秦王の望によりその玉と侵略されたる趙の十五都とを交換して歸らんとて也。秦の玉を望みしは固より土地をかへさんとは非ず。兩つながら己のものたらしめんの謀計存す。秦に入るや相如これを廷上に知り、歩も退かず。遂に璧を無條件に奪はるゝの危をのがれ十五都をとりかへせりと。

趙王於是遂遣相如奉璧西入秦秦王坐章臺見相如相如奉璧奏秦王秦王大喜傳以示美人及左右左右皆呼萬歲相如視秦王無意償趙城乃前曰璧有瑕請指示王王授璧相如因持璧卻立倚柱怒髮上衝冠謂秦王曰大王欲得璧使人發書至趙王趙王悉召羣臣議皆曰秦貪負其疆以空言求璧償城恐不可得議不欲予秦璧臣以爲布衣之交尚不相欺況大國乎且以一璧之故逆彊秦之驩不可於是趙王之齋戒五日使臣奉璧拜送書於庭何者嚴大國之威以修敬也今臣至大王見臣列觀禮節甚倨得璧傳之美人以戲弄臣臣觀大王無意償趙王城邑故臣復取璧大王必欲急臣臣頭今與璧俱碎於柱矣相如持其璧睨柱欲以擊柱秦王恐其破璧乃辭謝固請召有司案圖指從此以往十五都予趙相如度秦王特以詐佯爲予趙城實不可得乃謂秦王曰和氏璧天下所共傳寶也趙王恐不敢不獻趙王送璧時齋戒五日今大王亦宜齋戒五日設九賓於廷臣乃敢上璧秦王

度之終不可彊奪遂許齋五日舍相如廣成傳舍

【摘釋】…〔章臺〕…臺の名。咸陽の都に在り。〔布衣〕…布子を著たる者なり。士の仕へずして微賤なる者にいふ。〔驢〕…歡に同じ。歡心。〔齋戒〕…身を清めて物忌みをする。〔庭〕…秦の宮廷。〔殿〕…畏れ憚る。〔列觀〕…大勢の見物人の中なり。〔九賓〕…賓客を接待する九人の役人なり。客を鄭重に扱ふ爲めに設くる者。〔廣成傳舍〕…廣成といふ旅館。

(通釋) …趙王はそこで、遂に藺相如に使者の役目を許可して、璧玉を捧げ持ちて西の方秦の國へ入らしめし所、秦王咸陽の都の章臺に坐して藺相如に面會せり。藺相如璧玉を捧げ持ちて秦王に御望みの品を持參せし由を奏聞せしに、秦王大に喜びて其の璧玉を受け取りて、腰元の美人及左右の近臣に傳へ示したれば、左右の近臣皆「萬歲」と呼びて、秦王の幸福を慶資しぬ。藺相如、秦王の趙に對して璧玉の代りに城を償ふ了簡なきを見留めたれば、秦王の前に進み出で、曰く、「其の璧玉には瑕あれば大王に指示して御知らせ申さむ」と。秦王斯くと聞きて、璧玉を藺相如に授けしに、藺相如、其儘璧玉を手に持ちて退き立ちて、御殿の柱に身を寄せ、怒れる髪の毛の逆立ちて、冠をも突き上げむばかりになりたるまゝ、秦王に物語して曰く、大王には璧玉を手に入れたしと思召されて、人をして手紙を發して、趙王の許へ至らしめられたるにつき、—趙王は羣臣を残らず召して評議せしに、皆曰く「秦は貪慾にして趙の兵力の強さを恃みて、實意なき空言を以て璧玉を望むなり。其の代りとして償はる

べき城は多分手に入らざらむ」と。皆々かやうに評議して、秦に璧玉を與ふことをよろこばざりき。然るに、臣は思ふやう。布子を著たる微賤の者の交際すら、尙ほ互に欺き詐らざるものを、況して秦の如き大國の欺き詐る筈はなし。しかのみならず。唯々一つの璧玉の故をもて、強き秦の歡心に逆らふは宜しからずと。是に於て、趙王臣が意見に従ひて、五日の間身を清めて、物忌みをなし、臣をして、璧玉を捧げ持ちて、出立せしめて、恭しく禮拜を行ひ、手紙を大王の宮廷に送れり。何故、斯く鄭重にせしかとならば、こは秦の大國の威光を畏れ憚りて、敬意を修め整へたるなり。然るに、今臣此處に到着せしに、大王には、臣を大勢の見物人の中にて面會したまひて、禮節甚だ横着なるのみならず。璧玉を手に入れたまへば、これを御つきの美人に傳へ示して、臣を戯れ弄びたまへり。臣は大王の趙王に城邑を償ひたまふ御了簡なきことを拜見したるが故に、かく、重ねて璧玉を受け取れり。大王には、是非とも臣を急速に處分せむと思し召さむには、其御處分を待たずして、臣が頭は、いま此の璧玉と共に、此柱に當りて碎けむ」と。斯く述べ了りて、藺相如其璧玉を手待ちて、柱を睨みて、自分の頭と共に、之れを柱に打ち付けむと思ひたり。實に必死の覺悟なり。秦王此の勢に吞まれて、藺相如の璧玉を打ち破らんことを氣遣ひて、其失禮を詫びたるに、藺相如、是非共城を申受けむことを請ひたれば、秦王餘儀なく、掛りの投人を召して、地圖を調べて指もて示し、此處より先の十

五箇所の都邑を趙に與へむと約束せり。藺相如秦王の殊更に方便をもて、趙に城を與ふる真似をしたるまでにて、其實は、到底城を得られぬことを推察したれば、秦王に物語していはく、「和氏の璧玉は天下中にて、なによりに、貴重なる寶物なりと云ひ傳へ、珍重したるものなれど、大王の御用とあれば、いやでも献上せざるまじと趙王決心せり。もと趙王は此璧玉を見送りし時、五日の間、身を清めて、物忌みをせしことなれば、今、大王にも亦五日の間、御身を清めて、物忌みをしたまひて、賓客を接待する九人の役人を朝廷に設け置かれ、授受の儀式を盛大にしたまふべし。然らば、臣は、あへて、此璧玉を献上せむ」と。秦王思ふ様、この様子にては、強ひて奪ひ難しと。こゝに於て、遂に物忌み五日をしようとのことを許せり。而して相如を廣成の傳舎にしばらく置けり。

【批評】一、撰者曰く「怒髮衝天」や「睨柱」や、相如の勇貌實に勇躍たるものあり。

二、此の時に至りて相如其人にあらざるよりは、この光景をなすこと能はざらん。太史公に非ずんば、此の神色を描寫すること能はざらん。

◎澠池會

〔大意〕この條の場面は秦に對する弱趙の最も苦しき場面なり。然るを勇者藺相如ありて、萬事を秦と對等の動作に出で、毫も趙の體面を傷づけぬといふ劇的シーンなり。相如の動作寔に拍手に

相値する痛快事たり。

秦王使者告趙王欲與王爲好會於西河外澠池趙王畏秦欲毋行廉頗藺相如計曰王不行示趙弱且怯也趙王遂行相如從廉頗送至境與王訣曰王行度道里會遇之禮畢還不過三十日三十日不還則請立太子爲王以絕秦望王許之遂與秦王會澠池（第一小段）秦王飲酒酣曰寡人竊聞趙王好音請奏瑟趙王鼓瑟秦御史前書曰某年月日秦王與趙王會飲令趙王鼓瑟藺相如前曰趙王竊聞秦王善爲秦聲請奉盆缶秦王以相娛樂秦王怒不許於是相如前進缶因跪請秦王秦王不肯擊缶相如曰五步之內相如請得以頸血濺大王矣左右欲刃相如相如張目叱之左右皆靡於是秦王不憚爲一擊缶相如顧召趙御史書曰某年月日秦王爲趙王擊缶秦之群臣曰請以趙十五城爲秦王壽藺相如亦曰請以秦之咸陽爲趙王壽秦王竟酒終不能加勝於趙趙亦盛設兵以待秦秦不敢動（第二小段）



【摘釋】……【訣】……生き別れの暇乞ひをすること。【道里】……道程なり。【奏】……音楽の一たび端を更むるを奏といふ。【瑟】二十五弦の樂器。【御史】……記録役。【秦聲】……秦の聲曲。【盆飢】……盆を伏せたるやうなる瓦器。之れを叩きて歌の調子を取るなり。【娛樂】慰む。【跪】……兩膝を地に付く。【請得】以頸血灑大王矣……己の頸の生血を大王に振り掛けることをするかも知れぬ。刺違へて死なむとの意。【辟】……草木の風に吹かれて垂れ伏すやうに閉口すること。【不憚】……氣分を悪しくすること。【壽】……祝杯を差す。

(通釋)……秦王使者を趙へ出だして、趙王に告げさせ、趙王とよしみを結び、西河の外の澠池に會合せむと思ひしに、趙王秦の威勢を恐れ憚りて、行くことを止めんと思ひたり。然るに、廉頗と藺相如と相談していはく、「大王にして行き給はずば、秦に對して、此方が弱く且つ臆病なることを示して、秦に輕蔑せらるゝならむ」と。趙王之を聞きて、遂に澠池に行きたれば、藺相如はその供をなせり。廉頗これを見送りて、國境まで到りて趙王と生別の暇乞して曰く、「大王には、御無事に行き給へ。」

其道程を推し測るに、會合面談の禮式の濟みて、立ち戻りたまはむまでの日數は、三十日に過ぎざらむ。若し三十日にして立ち戻りたまはずば、大王は、秦の手に生け捕られたるものと看做して、太子を御跡目に立て、國王として、秦の大王を引き留め置きて、趙の地を割き取らむとする欲望を絶ち切らむつもりなり」と。趙王これを許諾しぬ。(第一小段)

趙王廉頗と別れて、藺相如を従へ、遂に秦王と澠池に會合せしに、秦王酒を飲みて、酒の程よく廻

りたる頃、趙王に向ひていはく、「拙者薄々趙王の音楽を好まるゝ由を聞き及びたれば、二十五弦の瑟を一曲奏せられむことを請ふ」と。趙王望みに應じて、瑟を引き鳴らしたるに、秦の記録役前へ進み出で、書き留めていはく、「何年何月何日、秦王、趙王と會合して、酒を飲み、趙王をして、瑟を引かしめたり」と。藺相如前へ進み出で、曰く、「趙王薄々秦王の上手に秦の聲曲をしたまふ由を聞き及びたれば、盆飢の瓦器を秦王に差し上げて、其御手際を拜見して、御互に慰まむことを請ふ」と。秦王これを失敬なりと立腹して、許可せざりけり。是に於て、藺相如前に進み出で、飢を差して、兩膝を地に付け、恭しく秦王に請ひたれど、秦王飽くまで飢を撃つことを承知せざりき。藺相如斯くと見て、秦王を威し付けて曰く、「是非とも御承知なしとならば、僅かに五歩の内に於て、われはわれの首の生血を大王に振り掛くることを得むことを請ふ」と。是れ秦王と刺し違へて死なむとの意なり。秦王の左右の近臣驚きて、藺相如に刃物を加へむとせしに、藺相如目を張り開きて、これを叱り付けたれば、左右近臣、皆草木の風に吹かれて垂れ伏すやうに恐れ入りたり。是に於て、秦王甚だ氣分を悪くして、餘儀なく藺相如のために、一たび飢を撃ちたれば、藺如振り返りて、趙の記録役を召して、書き留めさせていはく、「何年何月何日に秦王趙王のために飢を撃ちたり」と。秦の群臣曰く、「趙王には、趙の十五箇所の城を今日の宴會の引き出ものとして、秦王に祝杯を差されむことを請ふ」と。

藺相如も亦いはく「秦王には、秦の咸陽の都を今日の宴會の引き出物として、趙王に祝杯を差されむことを願ふ」と。藺相如は、このやうに、一々秦を抑へつけたれば秦王酒宴ををふるまで、終に勝を趙に占むること能はず。趙の方にてても、亦盛んに兵を設け備へて、秦の仕向を待ちたれば、秦は押し切りて、動きて事を生ぜざりき。(第二小段)

【批評】一、撰者曰く、相如の秦王に饅をうたしめたること、及び趙の御史をして書かしめたるあたり、少しのひるむところもなく、趙の小國をして、よく秦の大國に對等に出でたる、甚だ勝れたるの勇知にあらずんば能はざるなり。太史公のこの文、異常の緊張味あり。學生の一讀、血湧き肉踊るところたり。

全……「吾未だこれを見ずと雖も、この文勢よく、王摩詰の詩畫と相似たり」とは茅伸の評也。讀者幸に注意あれ。

◎兩虎共鬪其勢不俱生

〔大意〕……この條は、廉破藺相如の我が上位にあるをねたみ、遇はゞ恥しめんと期す。相如つひにこれをさく。後相如の舍人の去らんとするに至りて已の心中を語り「猛虎共に鬪へば……」の譬を以てす。廉破亦これをさして大いに恥ぢ、遂に相如の門に謝し、後水魚の交をなせりと。有名なる美談なり。

既罷歸國。以相如功大拜爲上卿。位在廉頗之右。廉頗曰。我爲趙將。有攻城野戰之大功。而藺相如徒以口舌爲勞。而位居我上。且相如素賤人。吾羞。不忍爲之下。宣言曰。我見相如必辱之。相如聞。不肯與會。相如每朝時常稱病。不欲與廉頗爭列。已而相如出。望見廉頗。相如引車避匿。於是舍人相與諫曰。臣所以去親戚而事君者。徒慕君之高義也。今君與廉頗同列。廉君宣惡言。而君畏匿之。恐懼殊甚。且庸人尚羞之。況於將相乎。臣等不肖。請辭去。(第一小段) 藺相如固止之曰。公之視廉將軍孰與秦王。曰。不若也。相如曰。夫以秦王之威。而相如廷叱之辱其羣臣。相如雖驚。獨畏廉將軍哉。顧吾念之。彊秦之所以不敢加兵於趙者。徒以吾兩人在也。今兩虎共鬪。其勢不俱生。吾所以爲此者。以先國家之急。而後私讎也。廉頗聞之。肉袒負荊。因賓客至藺相如門。謝罪曰。鄙賤之人。不知將軍寬之至此也。卒相與歡。爲刎頸之交。(第二小段)

【摘釋】……右……兩手の右を貴ぶ様に右を位の上とす。【宣言】……言ひ觸す。【驚】……最も下等なる馬なり。役に立たざる者をいふ。【判】……罪人を打つ荆棘の杖なり。【寬】……寬恕す。【驢】……數に同じ。愆意にすること。【刎頸之交】……生死を共にして其の人のためには己の首を刎ね切るとも厭はじといふ程の交際なるをいふ。

(通釋)……既に「澠池の會合」も無事に済みたれば、趙王國に歸りて、藺相如の手柄の大なるものとて、上には卿を拜命せしめて廉頗の上席に据ゑられたるに、廉頗の曰く、「我は敵の城を攻めもし、野陳を張りて戦ひもして大なる手柄あり。然るに藺相如は徒に口先の議論をもて骨折りとして我が上位せり。しかのみならず藺相如は素より下賤の者なれば、われ恥かしくしてこれが下には立ち兼ねるなり」と。それに就きて人々に聞えよがしに、言ひ觸らして曰く、「我れ藺相如に逢はゞ屹度これを罵り辱めむ」と。藺相如之を聞きて、廉頗と一所に會合することを承知せず。出仕する時、常に病氣なりと申し立て、廉頗と位列の高下を争ふことを欲せざりき。既にして藺相如他出して、遂に廉頗の來れるを望み、車を横道に引き入れさせて、廉頗に逢ふことを避け匿れぬ。是に於て、藺相如の舍人、共々に藺相如を諫め勵して曰く、「臣等が親子兄弟までも振棄て、貴君に奉公する譯は、徒に貴君の高尙なる節義を慕ひてなり。然るに今貴君は、廉頗と位列を同じくせられたるによつて、彼の廉君貴君の事を惡しざまに言ひふらせども、貴君は畏れて常に廉君に逢ふことを避けて逃げ離れ恐懼せられること殊に甚し。凡庸の人すら尙之を恥かしく思ふことなるに、況して將軍宰相に於ては尙更のことな

り。臣等は不肖愚昧なれど、君のやうに臆病なる主人に奉公しては、世間に對して面目もなければ、今より御家を辭退せむことを願ふ」と。(第二小段)

藺相如、之を聞きて、舍人の暇を取らむとするを固く止めて曰く、「貴公等の廉將軍の威光と秦王のそれと孰か強しと思へる」と。舍人のいはく、「廉將軍の威光は秦王に及ばざるなり」と。藺相如の曰く、「夫れ秦王の威光にてすら吾は之を澠池の會合の時に、すでに朝廷にて叱りつけて、其の羣臣を辱めたり。己は驚馬の如くにて役に立たざる者なりといへども、獨り廉將軍を畏れ憚るべきや。唯々顧みて吾之を念ふに、強き秦の押し切りて兵を趙に加へざる譯は、徒に廉將軍と吾との兩人の斯くして趙に在るをもつてにあらずや。さるを、今、二足の虎の如き廉將軍と吾との共に鬪争することあらんか。其勢俱に生きずして、一方は手を負ひ、一方は命を落すならむ。されば、こは決して趙の爲めにはならざるべし。吾が廉將軍の鋒先を避けたる譯は、國家の急務を先にして自分一己の讎怨を後にしたるが故なり」と。廉頗はやがて、藺相如の舍人を諭したるこの言葉聞き及びて、われの短慮なることを深く恥ぢ入り、兩肌を脱ぎて、肉體を露はし、罪人を打つ荆棘の杖を背負ひて、藺相如に打たる覺悟をなし、藺相如の賓客に依頼して、其門に至り、われの罪を詫び入りて曰く、「道理の分らぬ鄙賤の者なるを、貴君のこれを寬恕すること、斯くまでに至らんとは思寄らざりき」と。遂に相

互に懇意になり、生死を共にし、其の人の爲には己の首を刎ね切るも厭はじといふ程の交際を結びけり。(第二小段)

【批評】…一、撰者曰く、相如の如きに至りては眞の大丈夫なる哉。本文亦よく節々相如の智勇を表して妙也。

### ◎兵死地也

(大意)…兵は死地なり。易く口上に云爲すべき性質のものならず。ざるを趙括は易々と論ず。

一見長ずるに似たれども實は然らず。かゝるもの實戦に臨まば必ずや敗軍すべきなり。趙奢(父)これを論ずる條也。

趙括自小時學兵法言兵事以天下莫能當嘗與其父奢言兵事奢不能難然不謂善括母問奢其故奢曰兵死地也而括易言之使趙不將括即已若必將之破趙軍者必括也。(第一小段) 及括將行其母上書言於王曰括不可使將王曰何以對曰始事其父時爲將身所奉飲食而進食者以十數所友者以百數大王及宗室所賞賜者盡以予軍吏士大夫受命之日不問家事

今括一旦爲將東向而朝軍吏無敢仰視之者王所賜金帛歸藏於家而日視便利田宅可買者買之王以爲何如其父子異心願王勿遣王曰母置之吾已決矣括母因曰王終遣之即有如不稱妾得無隨坐乎王許諾。(第二小段)

【摘釋】…「妾」…妻の謙稱なり。私といふが如し。「東向而朝」…東へ向ひ、座を占めて、軍吏の面會を受く。昔は、東へ向ふを尊位とせり。「置之」…其の話を見合はせよとの意。「不稱」…役目に叶はぬこと。「隨座」…罪の引き合ひになる。

(通釋)…趙括は、年少き頃より、兵法を學び、兵事を談論して、自から天下中吾に敵するものなしと思ひゐたりき。あるとき、其父の趙奢と兵事を談論せしに、趙奢も、これを難問すること叶はざる程に達辯なりき。されど——趙奢は善しと譽めざりしかば、趙括の母不思議に思ひて、趙奢に其のわけを尋ねしに、趙奢のいはく、「兵事は必死の場合なれば、殊の外大切なり。ざるを括は、容易く談論して願みず。易き様に思へり。趙をして、括を將たらしめば、それまでならん。若し是非ともい譯を將とせば、趙の軍勢を破滅せむ者は屹度括ならむ」と。(第一小段)

趙括の廉頗に代りて、長平へ行かむとするに及びて、其母書面を差し上げて、趙王に申立て、曰く、「括は將たらしむべからず」と。趙王母を召していはく、何を以て將たらしむべからざるか」と。

母對へていはく、「最前、妾は、括の父に侍り事へたり。其時、父は將たりしが、其部下に父の自身に飯米飲み物を捧げて、食事の給仕をする程に尊敬せる者十人もあり、同等の朋友として交はれるもの百人もあり。大王及び御一門の方々より御褒美として下し玉はりたる品々は、残らず軍士大夫に配分せり。出陣の命を受けたる日には、一家の私事を尋ねざりき。然るに、今、括はこれに反して、一旦將となりて、東へむかひて座を占め、軍吏の面會を受けたるに、軍吏括の威光を畏れて、押し切りてこれを仰ぎ視る者なし。大王より下し賜りたる金銀絹帛は、持ち歸りて家内に仕舞ひ置けり。而して毎日、都合よき、田地居宅の買ひ取らるべきものを視て、之れを買ひ取りて、身代を興さんとせり。大王には、其父と如何なる相違ありと思召さる、か。父子の心を異にせること、此の如くなれば、願くは大王の括を戦地へ遣はしたまふことなからむことを」と。趙王のいはく、「其話を見合はせよ。われは、已に趙括を遣すことを決定せり」と。括の母、それに就きていはく、「大王には、終にこれを遣したまはむとならば、若し御役目に叶はずして、失敗することありとも、妾は、其の罪の引き合ひになることなきを得らるべきか」と。趙王これを許諾して、母を咎めぬ事を約束せり。(第二小段)

### 一八 田單列傳

#### ◎田單火牛

(大意)……こは有名なる田單の火牛の計を叙せる段なり。火牛の計は戦路上最も奇勇なるものにして、日本にては木曾義仲の火牛戦あり。亦真似したるものか。この一戦によりて齊は七十餘城をとりかへすを得たる也。

田單乃收城中得千餘牛爲絳繒衣畫以五彩龍文束兵刃於其角而灌脂束葦於尾燒其端鑿城數十穴夜縱牛壯士五千人隨其後牛尾熱怒而奔燕軍燕軍夜大驚牛尾炬火光明炫燿燕軍視之皆龍文所觸盡死傷五千人因銜枚擊之而城中鼓譟從之老弱皆擊銅器爲聲聲動天地燕軍大駭敗走齊人遂夷殺其將騎劫燕軍擾亂奔走齊人追亡逐北所過城邑皆畔燕而歸田單兵日益多乘勝乘勝燕日敗亡卒至河上而齊七十餘城皆復爲齊乃迎襄王於莒入臨菑而聽政襄王封田單號曰安平君。

【摘釋】……〔絳〕……赤地の。〔脂〕……獸類のあぶら。角あるものを脂といひ角なきものを膏といふ。〔炬火〕……葦を束ねて

燒きたる火。「炫燿」…照り渡る。「銜枚」…箸のやうなる者を横に含みて、髮の毛に結び付け、物の言はれぬやうにするなり。猿轡の類。「鼓譟」…攻め鼓を打ち、鬨の聲を揚ぐ。「夷殺」…誅殺す。「北」…奔る。「畔」…離れ叛く。

(通釋)田單敵の油斷を見、城中の牛を取寄せ、千餘頭を手に入れて、赤地の絹の著物を拵へ、五色の龍の模様を書きて、これに著せ、刀劍の類を其角に縛り付けて、獸類のあぶらを塗り付けたる枯れ葦を其尾に縛り付け、葦の先きに火を付くるやうに支度せり。それより、城に數十個所の抜穴を掘り夜に入りて、其の穴より牛を追ひ出し、勇壯なる戰士五千人をその跡に隨はしめぬ。されば牛は其尾の葦に付きたる火の爲めに熱くなりたれば、怒り狂ひて、燕の陣中へ駈け入りぬ。燕の軍勢、夜のこととて、何事ならむと大いに驚きたるに、牛の尾の葦の火の光明、まばゆきばかりに照り渡りたれば、燕の軍勢之を見るに、皆龍の模様ある怪物にして、これに觸れ當りたるものは、残らず死傷せるをみぬ。五千の壯士は、これに付け入りて、口中に猿轡の類を箝め、無言になりて、切り立てたり。而して城中の殘兵も、攻め鼓を打ち、鬨の聲をあげて、其跡に付き従ひ、老弱は、皆銅器を叩き立てたれば、其凄まじき物音は、天地も震ふばかりなりけり。この爲に燕の軍勢、大いに駭きて、敗走せしかば、齊の人遂に其將の騎却を誅殺せり。燕の軍勢、愈々擾亂騒動して、右往左往に奔走せしかば、齊の人其亡げ走る落ち武者を追ひ打ちたり。かくて其通り過ぎたる道筋の城邑は、皆燕に離れ叛きて、

田單に歸服し、兵日にまし多くなりたれば、勝ちに乗じて、益々兵を進めぬ。これに反して、燕の方は、日に増し敗亡せしかば、田單遂に北の國境の河上まで押し詰めぬ。而して齊の七拾餘箇の城は、皆重ねて齊のものとなりぬ。是に於て、田單潛王の子の襄王を莒より迎へて、臨菑の都へ入れ、政事を聽かしたれば、襄王田單の手柄を譽めて、これを封じて、安平君と號せしめぬ。これその初め安平よりおこりに因れり。

【批評】一、撰者曰く、史記百三十卷中、これほどの奇戦あることなし。火牛の戦——眞に奇戦といふべし。太史公の筆また實によくのびたるを見る。尾崎紅葉「鹽原」をうつすに鹽原に遊べりといふ。太史公火牛をうつすに、未だ火牛を見たるにあらず。然も燕軍の火牛に觸れて披靡せる見るが如し。噫彼の筆又古今獨歩の賞ある所以ならずや。

## 一九 魯仲連鄒陽列傳

### ◎明月之珠、夜光之璧

(大意)…先づ人に前以て、うまく取もつてもらひ、話しこんで貰ひ、十分紹介して貰ひてもらふに非ざれば、突として仕へんとしたればとて、それは其の人如何に才能あるも、不可

能なるをいふ。その譬面白し。好試験問題也

臣聞明月之珠。夜光之璧。以闇投人於道路。人無不按劍相眄者。何則無因而至前也。蟠木根柢輪困離詭。而爲萬乘器者。何則以左右先爲之容也。故無因至前。雖隋侯之珠。夜光之璧。猶結怨而不見德。故有人先談則以枯木朽株樹功而不忘。(第一小段)今夫天下布衣窮居之士。身在貧賤。雖包堯舜之術。挾伊管之辯。懷龍逢比干之意。欲盡忠當世之君。而素無柢根之客。雖竭精思。欲開忠信輔人主之治。則人主必有按劍相眄之跡。是使布衣不得爲枯木朽株之資也。(第二小段)

〔摘釋〕……〔明月〕……珠の名。〔眄〕……横目にてらむ。〔蟠木根柢〕……蟠結したる木の根元。〔輪困離詭〕……委曲磨戾の様。〔先爲之容〕先づ其の形容を話しこみておくこと。〔包〕……兼ぬ。

〔通釋〕臣が今までに聞及びたるによれば、明月の珠、夜光の璧の如き結構なる寶も、暗夜に乘じ、人に向ひて道路にて投げつけば、何人も立腹し、佩劍の柄に手を掛けて、横目にてらまへて通らざるはなし。何とならば、これ突然に目の前に至るから也。之に反して、蟠結したる木の根本の輪困離詭し

て、委曲磨戾せるものも、一萬輛の兵車を持てる大國の諸侯の輿車の如く道具の材となれるは何ぞといふならば、其の君公の左右の近臣うまさお取持するが故なり。されば因縁なくして、突然に目の前に至れば、諸侯の玉、夜光の珠の如き結構なる寶と雖も、猶人に怨みを結びて、恩徳ありとせられぬ也。されば又人ありて、先づうまさお取持を得れば、枯れたる木、朽ちたる株にても、手柄を立て、人に忘れぬなりと。今天下の布子を着て、困窮したる家に居るの士は其の身貧賤にあれば、帝堯帝舜の手段を兼ね、伊尹管仲の辨舌を挟み、龍逢比干の意志を懐きて、忠節を當世の間に盡くさんと思ふとも、素より根本の形容を談話して、これをとりもつもの無ければ、精誠の思をいたし、忠信を開陳し、大王の治下を輔佐せんと思ふとも、人主はきつと立腹して、佩劍の柄に手を掛け、横目にてらみ合ふことゝならん。これ貧賤の士をして、枯木、朽株の資質たることだに得ざらしむる譯也。

〔批評〕……一、撰者曰く、本文の價值はその構想にあり。調子の緊張にあり。見よ。本章まづ隋珠、夜璧、古木、朽株をもちて、たとへを設け而して後に事を叙せるを。意志すでに新ならずや。

## 二〇 屈原賈生列傳

◎懷沙之賦

(大意)……本文は屈原の不遇をうたひし賦(韻文)なり。不平、煩悶やる方なくして、凝つて本賦となる。「忠臣は亂君に仕へず。」を自任し、汨羅に投じて死するに至れり。東洋人士の氣節壯とすべきものあり。

屈原作懷沙之賦其辭曰陶陶孟夏兮草木莽莽傷懷永哀兮汨徂南土陶陶兮窈窕孔靜幽墨冤結紆軫兮離愍之長鞠撫情効志兮俛詘以自抑列方以爲圓兮常度未替易初本由兮君子所鄙章畫職墨兮前度未改內直質重兮大人所盛巧匠不劉兮孰察其揆正文幽處兮矇謂之不章離婁微睇兮瞽以爲無明變向而爲黑兮倒上以爲下鳳凰在笈兮雞雉翔舞同糅玉石兮一槩而相量夫黨人之鄙妬兮羌不知吾所臧任重載盛兮陷滯而不濟懷瑾握瑜兮窮不得余所示邑尤群吠兮吠所怪也誹駿疑桀兮固庸態也文質疎內兮不知吾之異采材樸委積兮莫知余之所有重仁襲義兮

重華

謹厚以爲豐重華不可悟兮孰知余之從容古固有不竝兮豈知其故也湯禹久遠兮邈不可慕也懲違改忿兮抑心而自彊離潛而不遷兮願志之有象進路北次兮日昧昧其將暮含憂虞哀兮限之以大故亂曰浩浩沅湘兮分流汨兮脩路幽拂兮道遠忽唵會兮恆悲兮永歎慨兮世既莫吾知兮人心不可謂兮懷情抱質兮獨無匹兮伯樂既歿兮驥將焉程兮人生有命兮各有所錯兮定老廣志余何懼兮曾傷爰哀永歎喟兮世溷不吾知心不可謂兮知死不可讓兮願勿愛兮明以告君子兮吾將以爲類兮

〔摘釋〕……「懷沙之賦」……懷沙は、屈原の砂礫を懷きて沈みたるが故に、其義を取りて名づけたるなり。賦は韻文の意。「陶陶」……陽氣の盛んなる様。「孟夏」……夏の始め。即ち四月。「奔奔」……生ひ茂るさま。「汨」……道を急ぐさま。「南土」……江南の土地。「陶」……眩と通ず。目のくらむさま。「窈窕」……山水の深遠なるさま。「孔靜幽墨」……甚だ閑靜にして、人聲もなき程に物淋しきこと。「冤結紆軫」……冤は鬱なり。紆は屈するなり。軫は痛むなり。辭結して屈し痛むこと。「離愍之長鞠」……愍は、病ましきこと。鞠は、窮まること。病ましき事に遭ふことの長く窮まるなきにいふ。「撫情」……情に循ふ。「効志」……志を盡す。「俛詘」……俯し屈む。「列方以爲圓」……四角なる木を削りて圓くせんと思ふ。「常度未替」……常の法度は、尙未だ廢せざるなり。「易初本由」……由は道なり。最初よりの根本の正しき道を易ふること。「章畫職墨」……章は明らかにする。畫は計畫。職は、志と通ず。念ふ。墨は繩墨。工人の計畫を明らかにして、繩墨の使ひ方を念ふ。「前度」……前人の法度。

屈原賈生列傳



〔内道質重〕…内心正直にして性質重厚なること。〔大人所盛〕…大人君子の盛んに賞美する所。〔巧匠不歸〕…上手なる大工の木を削らざること。〔揆正〕…度り正す。〔玄文幽處〕…玄妙なる文章を持ちながら幽暗の所に居る。〔曠〕…盲者。俗物をいふ。〔離婁〕…昔の目の明らかなる人。〔微睇〕…僅かに視る。深く視ざるなり。〔睡〕…盲者。俗物。〔鳳皇〕…鳳凰。鳳は雄なり、凰は雌。〔筮〕…籠。〔糝〕…雜ふ。〔一粟而相量〕…粟は樹かき。樹かきをもつらにかきならす。〔羌〕…楚人の語辭にして、「あゝ何として」といはむが如し。〔藏〕…善き。〔任重載盛〕…己の才力盛壯にして重任に堪ふるなり。〔陷溺〕…陥没沈滞。〔不濟〕…其志を成し遂げぬこと。〔示〕…語る。〔駭〕…後に同じ。千人に秀でたるを俊といふ。〔桀〕…傑に同じ。萬人に秀でたるを傑といふ。〔庸態〕…凡庸人の常態。〔文質〕…文章の麗麗ならぬこと。〔疎内〕…迂闊にして木納なること。〔異采〕…際立ちたる文采。〔材樸委積〕…材は木材。樸は木地。委積は多くあること。身の才能の餘りあること。〔重〕…果ぬること。〔襲〕…重ねること。〔豐〕…豊富なること。〔重華〕…帝舜の號。〔摺〕…逢ふ。〔從容〕…舉動の落ち付きて道を自得せること。〔古固有不レ竝〕…昔の聖賢は言ふまでもなく、時を同じくして生れざるなり。〔其故〕…世の衰へたるわけ。〔離潛〕…離れ離れたるさま。〔懲〕…懲り。〔俗情に違ひ戻りて放達せられたるにこりたこと。〕〔自強〕…自から勉強して俗情に従はむとすること。〔離潛〕…潛は愆と通ず。病ましき事に遭ふこと。〔不達〕…邪道に陥らぬこと。〔象〕…法則。〔北次〕…北の方は幽暗の地なれば地の方に宿らむとするは、楚の滅亡せんとすることの譬なり。〔昧昧〕…暗きさま。〔虞哀〕…虞は樂む。悲哀を以て樂とする。〔大故〕…死ぬること。〔亂〕…理む。其要旨を總へ括りて、重ねて前文の意を理む。音楽の卒章を亂といふ。〔浩浩〕…水の廣大なるさま。〔汨〕…流るゝさま。〔脩路〕…長き道路。〔幽拂〕…楚語には幽蔽に作れり。幽闇と人ふに同じ。〔遠忽〕…遠く荒るゝこと。〔會〕…乃ち。〔陰〕…吟と同じ。〔謂〕…説くの意。〔匹〕…雙匹なり。仲間。朱意は正の字に作るべしと云ふ。〔伯樂〕…馬の目利きの上手なる人。〔驥〕…一日に千里を行く駿馬。〔程〕…量る。〔命〕…天命。〔錯〕…置く。安んず。〔洞〕…亂るゝ。〔愛〕…命を惜しむ。

〔類〕…忠者の亂君に事へざる類例。

〔通釋〕…茲に屈原は、世を厭ひて、小石をいだし、水に沈まんとして、「砂の賦」といふ韻文を作りぬ。其の詩に曰く、「陶陶として陽氣の盛んなる、四月の頃は、草も木も新芽を出して、莽々として、生ひ茂り、此上もなき好き時候なれど、吾は、おもひを痛ましむることありて、永く哀しみ、泪として道を急ぎ、都に遠き江南の地へと行くなり。さて江南に来て見れば、目もくらむばかりに、山水深遠にして土地閑靜なり。宜なる哉。人聲もなき程に物淋しきや。吾が心は鬱結して、いたみやましきことに遭へること、長く窮まれり。情に循ひ志を盡して過失なしとは云へど、俯し屈みて、自から抑へたり。人は、四角なる木を削りて、圓くせむと思ひても、其常の法度は猶未だ廢せずして故態を失はぬなり。人の無道の世に遭ひて、最初よりの根本の正しき道を改め易ふるは、君子とて徳ある人の鄙み恥づる所なり。細工人は、計畫を明らかにし、繩墨の使ひ方を念ひて、前人の法度を修めて、其仕方を改め易へざれども、曲りたる木は、直くなり悪しき木は好くなるなり。君子の事を處すること、亦此の如くなるべきなり。内心正直にし、性質重厚なるは、大人君子の盛んに賞美する所たり。しかれども、上手なる大工も、木を削らざれば、誰か其の材木の曲直好惡を正すの力あることを察すべき。玄妙なる文章を持ち乍らも、幽暗の處に居れば、盲者の如き俗物は、これを文章なき者なりと

謂ふなり。昔の目の明らかなる離婁は、如何なる物をも見ざることをなけれども、僅かに視て深く視ざれば、盲者の如き俗物は、これを目の甚だ不明なるものなりと思ふなり。されば内心正置にして、性質重厚なるものも、それだけにては、俗物に受けられぬなり。實に現代は白き者を黒しと云ひ、上なる者を反對にも下に置き、鳳凰の如き靈鳥は籠の中に押し込められて、鶏、雉の如き凡鳥は大空に飛び廻れる世の中なり。又今の世は、玉と石とを取り雜へて、樹の中へ入れて、樹かきをも一つらにかきならずが如く、賢愚邪正の辨別なければ、彼の鄙劣にして嫉妬深き一味徒黨の小人共は、あゝ、何として、吾が良きを知ることならんか。我が才力盛壯にして、重任に堪ふれども、此身陷没沈滞して其志をなし遂げず、瑾瑜の美玉の如き有爲の才を持ちながら、困窮して語るべき人を得ざる也。村里の、犬の群り、吠ゆるは其怪しむものに吠ゆといふ。之と同じく、俊傑の名士を誹り疑ふは、言ふまでもなく、凡庸の常態なれば是非もなし。我が文章は艶麗ならずして、迂闊にして木訥なれば、衆人は、われの際立ちたる文采あることを知らず。此身は才餘りありて用ひて盡くることなけれども、余が有る所を知れる者なし。吾は専ら仁を重ね、義を重ね、謹厚にして、身に在る道は、豊富なりと思へども、古の帝舜の如き聖主に逢はれねば、たれか我が舉動の從容として落ち著き居り、道を自得せるを知ることならんか。昔の聖賢は言ふまでもなく、時を同じくして、生れざれば、いかで今

日の世の衰へたるわけを知るべき。殷の湯王、夏の禹王は其の世久しく遠ければ、遂として懸け離れ追ひ慕はれぬなり。俗情に違ひて放逐せられたるにこりて、「残念なり」と念ふいかりを改めて心を抑へ、自から勉強し、俗情に従はむとすれど、病ましきことに遇ひても、正道を枉げて邪道に遷ること能はずして、唯々其の志の法則あらむことを願ひ望んで居るわけなり。楚の形勢は追々に没落すべき道を進みて、暗黒なる北の方に宿りて、滅亡せむとし、日は昧昧として、暗くなりて程なく暮れむとすれば、心の中に憂ひを含み、悲哀をもて娛樂とし、此身の死ぬることを限りとせり。さて、要其旨を總べ括りて、重ねて前文の意を埋めたる亂の辭に曰く、浩浩として廣大なる流水と湘水とは、泪として幾筋となく分かれたり。其澤中の長き道路は幽闇にして、見渡す限り遠く荒れたり。吾此の處に來りてより、乃ち詩を吟じ、又朝夕に泣き悲みて永く歎息慷慨せり。世の中には、最早吾を知るものなければ、人の心に吾思ふことを説かれぬなり。吾忠信の情を懷き、敦篤の質を抱きて、衆人に異なれば、孤獨の身にて、仲間あることなし。馬の目利きの上手なる伯樂、既に死去したれば千里を行く駿馬ありとも、將に何方にか其の力を量らむ。今の世に士を知る者のなきことも、亦此の如きなり。さりながら、人の此世に生るゝや、人の力に及ばざるを天命といふ者あれば、銘々に其天命に安んずることあり。心を定め、志しを廣くせば、われ何事をか畏れ懼れむ。乃ち愁傷し、爰に悲哀して、

永く喟然として歎せり。世の中亂れて、吾を知るものなければ、吾の心は、人に説かれぬなり。吾れは最早死期の迫りて避けられぬ事を知りたれば、この上の願は命を惜みて、不覺を取らぬやうにせむことなり。明白に世の大方の君子に告ぐ。吾れは程なく入水して、忠臣の亂君に事へざる例證とならむとす」と。

【批評】…一、撰者曰く「曾嗟恆悲兮、永歎慨兮」の句に於て、「唯」、「悲」、「歎慨」、の字の疊用など、實に憐愍の狀を寫し得たり、この疊用法特に注意を要す。

一、杜陵の詩に曰く、「萬里悲秋常作客、百年病獨登臺」と。これ併せ味ふべきなり。文は概して雜にして亂れざる屈原獨自の筆法也。

△萬里—遠方 △秋—慘悽 △作客—旅行 △百年—年寄 △獨登臺—無親友

## 二 刺客列傳

### ◎風蕭々兮易水寒

〔大意〕…本篇は有名なる刺客荆軻が、秦に入らんとして同行の客をまてると、太子丹叱したる爲、荆軻袂別の辭を易水のほとりにて歌ひし條也。風蕭々易水寒」と。一同聞きわたるもの感慨無量なりと云ふ。文字以外に溢れたる悲壯なる氣分を味ふべし。

荆軻有所待、欲與俱。其人居遠未來、而爲治行頃之未發。太子遲之、疑其改悔。乃復請曰、日已盡矣。荆卿豈有意哉。丹請得先遣秦舞陽。荆軻怒叱太子曰、何太子之遣。往而不反者、豎子也。且提一匕首、入不測之彊秦。僕所以留者、待吾客與俱。今太子遲之、請辭決矣。遂發。太子及賓客知其事者、皆白衣冠以送之。至易水之上。既祖、取道。高漸離擊筑。荆軻和而歌。爲變徵之聲。士皆垂淚涕泣。又前而歌曰、風蕭蕭兮易水寒。壯士一去兮不復還。復爲羽聲。忼慨士皆瞋目。髮盡上指冠。於是荆軻就車而去。終已不顧。

【摘釋】…〔爲治行〕…旅仕度すること。〔豎子〕…小僧といふ意。秦舞陽を指す。〔辭決〕…決は訣に同じ。生き別れの暇乞ひをすること。〔祖〕…旅立ちの祭。道中の神を祭りて、無事を祝ふ。〔變徵之聲〕…悲しき音なり。〔蕭蕭〕…淋しきさま。〔羽聲〕…怒れる音。〔忼慨〕…志を得ずして憤激すること。

(通釋)……荆軻は、他に侍り人ありて、其人と同行せむと思ひしに、其人遠方に居て、まだ來らざりしを以て荆軻旅の支度をなし乍ら、數日立ちてもまだ出發せざりしかば、太子の丹之を遅しと思ひて、荆軻の或は變心せむことを疑ひ、重ねて荆軻に請ひて曰く、「日限も已に盡きたるに、荆軻卿の出發せられぬは、いかに。見合はせられむとの意ありてか。果して然らば、己先づ秦舞陽を遣はさんとを願ひたきもの也」と。荆軻怒りて、太子の丹を叱りつけて曰く、「如何なれば太子には先づ秦舞陽を遣はされむと思ひたまへるか。秦へ行きて、事を仕損じて燕へ立ち戻らざらむものは、秦舞陽の小僧なり。彼が如きは、役に立つべきものにあらず。しかのみならず、只々一振の短劍を提げて、底意の知れぬ強き秦へ入ることなれば、然るべき相談人も肝要なり。僕が滯留せる譯は吾心に思ふ客人を待ちて同行せむとなり。ざるを、今、太子には、之を遅しと責めらるゝ様なれば、生別の御暇乞をなして、即座に發足せむことを請ふ」と。遂に間もなく出發せり。太子の丹、及び燕の賓客の荆軻の秦へ往く事情を知りたるもの、皆凶禮の時の如く、白き衣冠を著用して、荆軻を見送りて、國界の易水(河)の邊に至り、既に旅立ちの祭りも済まし、道中へ踐み出ださむとするときになり、日頃仲善き高漸離は、筑を撃ち荆軻は、これに調子を合せて歌ひ、變徴の聲、悲しき音を奏したれば、滿座の諸士、皆目より涙を垂れて涕泣せり。それより、荆軻は、又前へ進み出で、歌ひて曰く、「風蕭々として、

淋しく吹き渡りて、易水の流れ寒し。壯士一たび此國を出で去れば、重ねて戻り來らず。」と。かやうに歌ひて、重ねて羽聲―怒れる音を奏し、志を得ずして憤激せるさまを表したれば、滿座の諸士、皆目を張りて、怒れる髪の毛、残らず立ちて、冠を突き上げたり。是に於て、荆軻は車に打ち乗りて、出で去りて、終に後を振り向かざりき。

【批評】……一、撰者曰く流連悲歌して、幾んど別れを惜しむことをなせり。噫、何等の摹寫ぞや。而しては何等の風神ぞや。通話一過―千載の下なほ人をして、悲憤せしめずんば已まざるかな。

二、左の詩併せて鑑賞を要す。「此地別無丹」 壯士髮衝冠 昔時人已没 今日水猶寒」

## 二二 蒙恬列傳

### ◎用道治者不殺無罪

(大意)……蒙毅、死罪の上命を拜す。時に答へし悲痛の言々也。この一篇、通讀して、一度「道を以て治むるものは無罪を殺さず」といひ「臣をして願はくば情實に死を得しめよ」と吐言せしあたりに至れば、忠直の情、無實の罪を明さんとするの情、纏綿として、轉た暗涙を覺えしむる

ものあり。

令蒙毅曰先主欲立太子而卿難之今丞相以卿爲不忠罪及其宗朕不忍乃賜卿死亦甚幸矣卿其圖之毅對曰以臣不能得先主之意則臣少宦順幸沒世可謂知意矣以臣不知太子之能則太子獨從周旋天下去諸公子絕遠臣無所疑矣夫先主之舉也用太子數年之積也臣乃何言之敢諫何慮之敢謀非敢飾辭以避死也爲羞累先主之名願大夫爲慮焉使臣得死情實且夫順成全者道之所貴也刑殺者道之所卒也昔者秦穆公殺三良而得罪百里奚而非其罪也故立號曰繆昭襄王殺武安君白起楚平荆殺伍奢吳荆夫差殺伍子胥此四君者皆爲大失而天下非之以其君爲不明以是藉於諸侯故曰用道治者不殺無罪而罰不加於無辜唯大夫留心

【摘釋】…【先主】…始皇帝を指す。【順幸】…先主の意に順ひ、先主に寵幸せらるること。【沒世】…先主の世を終ふこと。【周旋】…廻る。【數年之積】…數年の間、胸中に積み蓄ふ。【大夫】…曲宮のこと。【順成全】…臣下を無事に首尾よく、勤めます。【道之所卒】…道の盡き果つる所。【繆】…穆に同じ。監の法に、名と實と違ふを繆といふ。【藉於諸侯】

…諸侯の記録に其惡名を載せらるること。

（通釋）…御史の曲宮と云ふ者をして、宿次ぎの傳馬に乗りて代都へ往かせられ、蒙毅に命令せられて曰く、「先主は朕を太子に立てむと思召されしに、卿はこれを非難せり。今丞相は卿をもて、不忠なりとして其罪を論じ、卿が一門家族にまで及ぼせり。されども朕は卿一人の不忠なるが爲に多くの者を罪することを氣の毒に思ひたれば、格別の恩典をもて、卿に自害を申付くるなり。一本來嚴重の沙汰に及ぶべき筈なるを、卿一人に止めたるは、亦甚だ幸なり。卿は、之を有難く心得て、自から、最後の用意をせよ」と。蒙毅對へて曰く、「臣をもて先主の御意を知ること能はずとせば、それは間違ひたることならむ。臣はもと幼少の頃より仕官して、先主の御意に順ひ、先主の寵幸を蒙りて、先主の崩御したまふまで、長く御側に事へしことなれば、先主の御意を實に能く知りたる者なり。臣をもつて、太子の才能を知らずとせば、それも間違ひたることなり。太子は獨り先主の御供をしたまひて、天下中を廻りたまひしことなれば、外々の公子達とは御器量の懸け離れたるを、認めたるにて一度も疑ひたることなし。全體先主の太子を擧げ用ゐたまはむとすることは、數年の間、御胸中に、積ことにして、一朝一夕のことにあらず、臣は何等の言葉ありてか、敢てもつて之を諫め參らすべき。何等の思慮ありてか。敢てもつて、餘事を謀り申すべき。かやうに申上げたればとて、決して虚言を

取り飾りて、死罪を通れ避くにはあらぬなり。全く先主の臣を信用し玉ひし御名譽を累はし汗さむことを面目なく存するが爲めなれば、願はくば、大夫には臣が爲めに此の儀を篤と勘考せられて、臣をして無實の罪に死ぬることなく、相當の情實をもつて死ぬること——即ち死にがひあらしめられんことを得せしめられよ。しかのみならず、元來、臣下を無事に首尾よく勤めさせるは、道の貴び重する所なり。之に反して、臣下を刑罰殺戮するは、道の終り果つる所なり。昔秦の穆公は、卒去したまひし時に、百七十七人の殉死者の中に、奄息、中行、鍼虎といへる三人の良臣を加へて殉死せしめられ、又百里奚を罪せられて、其罪にあらざりしにより諡號を立て、繆といへり。繆とは、名と實と違ひたることなり。秦の昭襄王は、武安君の白起を殺したまひ、楚の平王は、伍奢を殺し、吳王の夫差は、伍子胥を殺せり。此秦の穆公と、昭襄王と、楚の平王と、吳王の夫差との四君は、皆大なる過失なりとして、天下中にて之を非難し、元來に於て、道理に暗き人なりとせり。是をもて、諸侯の記録に其の惡名を書き残しぬ。此譯なれば、古語に曰はずや、「道を用ゐて、天下國家を治むるものは、罪なきものを殺さずして、罪なき者に刑罰を加へず」と。唯々大夫には、此邊にも心を留められよ」と。

◎周書曰必參而伍之

〔大意〕…本條は蒙恬、われは世々忠勤に勵み來りしものを、今俄に禍にあはんとするは、起高の如き邪臣のためなるを上言する條なり。この辯、周の成王に對する周公旦の赤誠のことに例をかり、諄々倦むなし。眞に味ふべきの條也。

昔周成王初立。未離襁褓。周公旦負王以朝。卒定天下。及成王有病甚殆。公旦自揃其爪以沈於河。曰。王未有識。是旦執事有罪殃。且受其不祥。乃書而藏之。記府可謂信矣。及王能治國。有賊臣言。周公旦欲爲亂久矣。王若不備。必有大事。王乃大怒。周公旦走而奔於楚。成王觀於記府。得周公旦沈書。乃流涕曰。孰謂周公旦欲爲亂乎。殺言之者而反周公旦。〔第一小段〕故周書曰。必參而伍之。今恬之宗世無二心。而事卒如此。是必孽臣逆亂。內陵之道也。夫成王失而復振。則卒昌。桀殺關龍逢。紂殺王子比干。而不悔身死。則國亡。臣故曰。過可振而諫可覺也。察於參伍上聖之法也。〔第二小段〕

〔摘釋〕……〔未離三稱〕……襦は、子を負ふ器。竹をもて作るとも、布をもて作るともいふ。褌は、小兒の著物。二字にて、子守りの手を未だ離れぬをいふ。〔擗〕……切る。〔記府〕……記録を入れ置く蔵。〔周書〕……逸書。〔參而伍之〕……參は三卿。伍は五大夫。三卿と相談したる上にて、更に五大夫と相談するなり。〔事卒如比〕……卒は、俄に通ず。俄かにの意。〔驛臣〕……賤しき臣。趙高を指す。

〔通釋〕……昔、周の成王の始めて王位に立ちたまひし時は、まだ幼稚にて、子守の手を離れ給はぬ程なりしかば、周公旦之を背負ひて、朝廷に臨まれて、凡百の政務を聽かれ、遂に天下を有せられぬ。其後、成王病ありて、甚だ危篤なるにおよび、周公旦殊の外心配せられ、自ら手足の爪を切りて之を河水の底に沈め、天地の神に祈られて曰く、「王は幼稚にしてまだ物事を辯へぬなり。吾は、現に政事を執りて、犯せる罪殃あるべければ、吾王に代りて、其不祥なる病を受けたし」と。斯く祈られて、その文言を書き留め、之を記録に入れ置く蔵に收められぬ。眞に忠信なりと云ふべし。然るに、其後成王無事に成長せられ、みづから能く國家を治めらるゝに及びて、野心を狭む殘賊の臣あり。讒して曰く、「周公旦は、内亂を起して、王位を篡はむと思ひたること久しければ、大王にして若し棄て置き、用心したまはずば、屹度由々しき大事あらむ」と。成王大いに怒りたまひて、周公旦を召捕る手配りせられければ、周公旦辯解すべし暇なくして、楚の國へ出奔せられたり。然るに、成王記録を入れ置く蔵の書類を一覽したまひて、周公旦の手足の爪を河水に沈めて、王の病に代はりたしと祈られた

る書面を見たまふに及び、涕を流して仰せられて曰く、「周公旦は内亂を起して、王意を篡はむと思ひつゝありと言ひしは誰なるぞ。實に不埒の者なり」と。遂に其流言を放ちたるものを殺戮して、周公旦を楚より呼び戻されたり。(第一小段)

されば、周書に曰く、何事にてもきつと三卿と相談したる上にて、更に五大夫とも相談して、始めて之を取り定めよ」と。是れ輕卒に人の言葉を信用すべからざるを云へる也。今、我が一門は、代々君に二心なく、忠義を盡しながら、俄かに斯る事柄に立ち至りたるは、是れ必定趙高の如き賤しき臣の逆亂を企て、内部にありて、君を眼下に見下したる仕方ならむ。夫れ成王は、流言に惑ひて、一たび過失をしたまひしかど、重ねて自から其の過失を救ひて周公旦を呼び戻されしかば、遂に周室繁昌せり。之に反して夏の桀王は、忠義なる關龍逢を殺され、殷の紂王は忠義なる王子の比干を殺され、孰れも自から後悔せられざりしかば、身は死に國は亡ぶるに至りぬ。臣それ故に曰く、「我身の過失は、自から救はるゝものにして、諫言を用ふれば、我身の過失を覺悟せらるゝものなり。三卿五大夫の重役の面々の言葉に注意するは、上代の聖人の法則なり」と。(第二小段)

### 二三 張耳陳餘列傳

◎鉅鹿城中食盡兵少

(大意)……この條は鉅鹿の急を報じて張耳がその友陳餘に、救を乞ひし條也。ところが陳餘援兵を發せず。こゝに於て張耳陳餘を責む。陳餘、吾生きながらへて、後に至りて強秦を仇討したき旨なるを述ぶ。一應理ありといふべし。本條よくまとまりたるをよみます。

鉅鹿城中食盡兵、張耳數使人召前陳餘。陳餘自度兵少不敵秦。不敢前數月。張耳大怒。怨陳餘。使張騫陳澤往讓陳餘。曰始吾與公爲刎頸交。今王與耳旦暮且死。而公擁兵數萬不肯相救。安在其相爲死。苟必信。胡不赴秦軍俱死。且有十一二相全。陳餘曰。吾度前終不能救趙。徒盡亡軍。且餘所以不俱死。欲爲趙王張君報秦。今必俱死。如以肉委餓虎。何益。張騫陳澤曰。事已急。要以俱死立信。安知後慮。陳餘曰。吾死。顧以爲無益。必如公言。乃使五千人令張騫陳澤先嘗秦軍。

【餓虎】……讀……實める。刎頸之交……非常に仲のよろしき交。水魚の交【安在相爲死】……どうして、死ねといふほどでは

ないではないか。【且有十一二相全】……さうしたらあれでも萬が一助かるならん。【以肉委餓虎】……非常に危きこと。

(通釋)……今や鉅鹿の城中では、食も兵もなくなつてしまひ、危急刻々に迫れり。張耳乃ち人をして陳餘に援兵を以て前進する様いはせたり。報により陳餘熟々考ふるに、兵少なれば到底強秦に勝つべくもあらず。まづ數ヶ月見合はさんと。張耳は援兵來ざる爲大いに怒りて、陳餘を恨みつゝ張騫陳澤をして更に陳餘の不都合を責めしめき。その言に曰く、「始め、吾御身と刎頸の交をなした程であるに、今王と吾と今日明朝も分らぬ命となれるを知り乍ら、二十萬の兵を一人もよこさぬとは怪しからず。死ねといふのならば或は難役かも知らず、されど今それほどでもなし。援兵をよこすてふ事は、苟も信義があるならするが當然。然かあらば或は吾等も助かるを得んほどに……」と。陳餘その答に曰く、「吾考へてみしによし援軍に赴くとも遂に趙を助けおうせること不可なるらし。されば唯軍を亡すばかりにて骨打損の草れまうけなり。且俱に死せざる所以のものは理由の存すなり。即ち吾生きながらへて王や貴下の爲に秦に向ひて敵討の一戦仕りたい所存なればなり。今もし共に死す覺悟もて赴くは、餓えたる狼に肉を食はす様なるものにして何の益もなきことなり」と。ところが又張騫陳澤のいふ様「さりとて今事甚だ急なるものを。要するにかゝる場合は何角と考ふるよりも俱に死して信義を



立つるに越したることなし」と。これに對する陳餘の答へは「否吾考ふるに如何にしても今死するなどは益なき事なり。しかし強ひていはるゝ様なれば、乃ち五千人ほどを援兵として差出さん」と。そこでまづ張騫陳澤をしてこれをつれさせ秦軍に當らせてみたりき。

### 二四 淮陰侯列傳

#### ◎韓信始爲布衣時

(大意)……淮陰侯韓信の幼時を述ぶ。食に困りしこと。城下に釣し、同じく飢を漂母に救はるゝこと。屠中の少年に衆辱せらるゝこと——股の下をくぐる——等、韓信の後の成功と比較して考ふる時、實に面白き話ばかりなり。

淮陰侯韓信者、淮陰人也。始爲布衣時、貧無行、不得推擇爲吏。又不能治生商賈。常從人寄食。飲人多厭之者。常數從其下鄉南昌亭長寄食。數月亭長妻患之。乃晨炊蓐食。食時信往。不爲具食。信亦知其意。怒竟絕去。信釣於城下。諸母漂有一母見信饑。飯信。竟漂數十日。信喜謂漂母曰。吾必有以重報

母。母怒曰。大丈夫不能自食。吾哀王孫而進食。豈望報乎。淮陰屠中少年有侮信者。曰。若雖長大。好帶刀劍。中情怯耳。衆辱之。曰。信能死。刺我不能死。出我袴下。於是信熟視之。俛出袴下。蒲伏。一市人皆笑信。以爲怯。

〔摘釋〕……〔布衣〕……布子を著たる者。士の仕へずして微賤なる義。〔商賈〕……行くを商といひ、處るを賈といふ。(常)……嘗と通ず。〔蓐食〕……寐牀の中にて飯を食ふ。〔漂〕……古綿を水に浸して、杵の類にて打ち叩きて晒す。〔大丈夫〕……周の世には、八尺を一丈とせり。人の身の長は八尺なるが故に、一人前の男を丈夫といひ、立派なる一人前の男子を大丈夫と云ふ。〔王孫〕……公子といはむが如し。秦の末に、國を失ひたるもの多ければ、王孫又は公子といふは、其人を尊べるなり。〔屠中〕……牛など屠る賤業者。〔中情〕……内心。〔袴〕……胯に同じ。兩股。〔蒲伏〕……匍匐に同じ。腹這ふ。〔俛〕……俯に同じ。伏目にて上を見ぬこと。

(通釋)……淮陰侯の韓信は、楚の國の淮陰縣の人なり。最初布子を著たる微賤の身分なりし時は、貧乏にして、善き行もなかりしかば、郷里の人に薦められ擇ばれて小役人となることも出来ざりき。又其日の生業を治め營みて、行商をも見世商ひをもする能はざりき。常に人に依り飲み食ひすることのみを頼み歩きたれば、人々これを迷惑がりて、韓信を厭ひ嫌ふ者多かりき。其の頃韓信は度々淮陰の屬地の下郷縣なる南昌亭といふ立て場の長に依りて、居候の生活をなしたること、數箇月になりたれば、立て場の長の妻は、其際限なきを心配して、或る日、朝早く起きて、そつと炊きて、夫婦に

て、寐牀の中に飯を食ひ、跡を綺麗に片付けたり。朝飯時になりて、韓信は、いつもの如く往きたるに、其妻韓信の爲に飯の支度をせざりしかば、韓信も亦其の妻の己を厭ひ嫌へる心持を知り、其の仕向方を怒りて、終に主人と絶交して其家を立ち去りぬ。韓信はそれより何の仕事もなければ、淮陰の城下の流れに釣りを垂れ居しに、其川端に數人の老婆ありて、古綿を水に浸して杵の類にて打ちたたきては漂しむたりき。其中の一人、韓信の空腹なる様子を見て、氣の毒に思ひ、持ち合せたる飯を分ち與へたり。かくの如くして其日より、綿打ちの仕事を仕上ぐるまで、數十日の間、其の老婆はきつと己の辨當を韓信に分與せしかば、韓信殊の外喜びて、其綿打ちの老婆に物語りして曰く、「長々御世話になりたるが、われは屹度後日になりて、手厚く御身に此の恩返しをすることあるべし」と。老婆之を聞きて怒りて曰く、「立派なる一人前の男子にてありながら、自から生活することの叶はぬは、淺ましきことなり。われは由ある王孫の斯くまでに、零落せるを氣の毒に思ひて、食物をすゝめたるのみ、いかで後日の恩返しなどを望むべき」と。老婆は、かやうに斷りたるまゝ跡を仕舞ひて立ち去りにけり。淮陰の市中に住める賤業者仲間の少年の中に、韓信を侮るものあり。或る日途中に行き合ひて、韓信に向ひて曰く、「汝は身體長大にして日頃好みて刀劍を帶へりといへども、内心は臆病ならむのみ」と。大勢の中にて、これを辱めてはいはく、「韓信よ。汝は、能く命を棄てゝ死

なるゝならば、腰に帶びたる刀劍にて、我れを刺せ。命を惜みて死ぬる事能はずば、我兩股の下をくゞれ」と、是に於て、韓信篤と少年の様子を打見てゐたりしが、一言の返答をもせず、地上に俯し、其兩股の下を腹這ひ出たれば、市中の人々これを見て、皆韓信のことを笑ひて、見かけによらぬ臆病者なりといへり。

〔批評〕……一、撰者曰く、伸びんと欲するもの先づ屈せよかし。本條の如きは形式よりも内容に教訓存して價値あり。木村重成と茶坊主を偲ぶもこれに及ばず。「就視像出」の形容古來諷刺頗なり。畫けるが如し。

### ◎背水陣

〔大意〕……淮陰侯列傳は列傳中の白眉なり。而し淮陰侯列傳中の最も有名なるは、この「背水の陣」なり。兵法は死物なり。活用は人にあり。而して機にあり。韓信の如きは實に達人といふべし。本章の文章實に活寫して餘すなく、説き得て殘すなし。

廣武君策不用韓信使人閒視知其不用還報則大喜乃敢引兵遂下未至井陘口三十里止舍夜半傳發選輕騎二千人持一赤幟從閒道葺山而

望趙軍。誠曰：趙見我走，必空壁逐我。若疾入趙壁，拔趙幟，立漢赤幟，令其裨將傳飡曰：今日破趙會食。諸將皆莫信，佯應曰：諾。謂軍吏曰：趙已先據便地，爲壁。且彼未見吾大將旗鼓，未肯擊前行。恐吾至阻險而還。信乃使萬人先行，出背水陣。趙軍望見而大笑。(第一小段) 平旦，信建大將之旗鼓，鼓行出井陘口。趙開壁擊之，大戰良久。於是信、張耳、佯、鼓旗走水上軍。水上軍開入之，復疾戰。趙果空壁，爭漢鼓旗，逐韓信、張耳。韓信、張耳已入水上軍，軍皆殊死戰，不可敗。信所出奇兵二千騎，共候趙空壁逐利，則馳入趙壁，皆拔趙旗，立漢赤幟二千。趙軍已不勝，不能得信等，欲還歸壁。壁皆漢赤幟，而大驚，以爲漢皆已得趙王將矣。兵遂亂，遁走。趙將雖斬之，不能禁也。於是漢兵夾擊，大破虜趙軍，斬成安君泚水上，禽趙王歇。(第二小段) 信乃令軍中毋殺廣武君。有能生得者購千金。於是縛廣武君而致戲下者。信乃解其縛，東鄉坐。西鄉對師事之。諸將効首虜，休畢，賀。因問信曰：兵法右倍山陵，前左水澤。今

者將軍令臣等反背水陣，曰破趙會食。臣等不服，然竟以勝。此何術也。信曰：此在兵法，顧諸君不察耳。兵法不曰：陷之死地而後生，置之亡地而後存。且信非得素拊循士大夫也。此所謂驅市人而戰之，其勢非置之死地，使人人自爲戰。今予之生地，皆走，寧尙可得而用之乎。諸將皆服，曰：善。非臣所及也。  
(第三小段)

【釋】…〔間視〕…忍びやかに敵の様子を窺ふ。〔傳發〕…號令を軍中に傳へて出發せしむ。〔輕騎〕…身體に身仕度したる騎兵。〔赤幟〕…赤旗。〔葦山〕…葦は蔽はる也。山陰に隱る也。〔裨將〕…裨は輔く。即副將のこと。〔傳飡〕…小辨當を配る。〔前行〕…先備。〔平旦〕…夜の引き明け。〔鼓行〕…大鼓を打ち鳴らして押し行く。〔殊死〕…必死となる。〔效首虜〕…切り首と生け捕りとを差し出す。〔右倍〕…倍は背く。或は右手に取り、或は後に控ふ。〔前左〕…或は前に控へ、或は左手に取る。〔拊循〕…拊は撫と通ず。手懐く。

〔通釋〕韓信、人を趙の陣屋へ入り込ませ、忍びやかに敵の様子を窺はしむるに、忍びの者(李左車の)計策の陣餘に用ゐられざることを聞き知りて、漢の陣屋へ立ち歸り、報告せしかば、韓信大いに喜び、ドンドンと兵卒を引き連れ、彼の井陘山より押し下りて、また其山の出口なる井陘口に三十里手前の處にて、野陣を張つて、止宿せり。其真夜中より、號令を軍中につたへ出發せしめて、先づ手輕に身

支度したる騎兵二千人を選び抜き、一人毎に一つの赤旗を持たせ、抜け道より山陰に隠れて前進せしめ程好き所に陣取りて、遙かに趙の軍營を望ましめぬ。而して、此二千人に言ひ含めて曰く、「吾れは、今より、一萬人を引き連れて、正面より、趙の軍營へ掛け向ふべし。さて、其上にて、我兵は、わざと敗走すべし。趙、我兵の敗走するを見れば、必ずや城壁を空虚にし、我兵を追ひ掛くるならむ。其の時汝等二千人は、横合の山陰より駈け出で、急速に趙の城壁に入りて趙の旗を抜き去り、漢の赤旗を押し立てよ」と。韓信は、又其副將をして、全軍に小辨當を配らしめて曰く、「今日趙を破りたる後に、一同に寄り合ひて、十分に飲み食ひすべければ、それまでの繋ぎに先づこれを食ふべし」と。諸將は、皆韓信の言葉を信用せず。只々表面でのみウツつきして曰く、「委細承知せり」と。韓信は又軍中の役人に話して曰く、「趙は既に便利の場所を足溜りとして、城壁を構へたり。しかのみならず、彼は、まだ吾が大将の旗、及び大鼓を見ざれば未だ輕卒に吾先備を撃つことを承知せざらむ。さあらば、吾軍勢は、險阻なる敵の城壁近くまで至りて、敵に相手にせられずして、空しく立ち戻らむこと氣遣にたえず」と。斯く物語して、韓信は、一萬人の兵卒をして、先づ行かしめ、水を背にして陣取らせれば、趙の軍勢、其城壁より遙かに之を望みて、大いに之を笑ひたり。其笑ひたるは、兵法に「山を背にし、水を前にして陣す」とあるに、今、韓信は、反對に水を背にしたれば、其兵法を知らざるものと笑ひたるなり。(第一小段)

夜の引き明けに、韓信は、大将の旗、及び大鼓を建て、其大鼓を打ち鳴らし、押行きて、井陘口より出でたるに、趙は、城壁を開きて、之を撃ちて、大に戦ふこと良々久しくなりぬ。是に於て、韓信張耳、詐りて敗軍したる真似をなし、大将の旗、及び大鼓を打ち棄て、水を背にして陣取りたる水上の軍隊の中へ走り込みぬ。されば、水上の軍隊は、陣門を開きて之を迎へ入れ遂に來る敵を引き受け、重ねて大いに戦ひしに、趙は果して、韓信の見込みの通り、城壁を空虚にして、一人も残らず、打ち出で、漢の大將の旗、及び大鼓を奪ひ取らむと争ひ、韓信張耳を遂に掛けしに、韓信張耳は、既に水上の軍中へ走り入りたる後にして、其軍隊は、皆必死になりて戦ひたれば、たやすくは敗られざりき。折から、兼ねて韓信の出し置きたる奇兵二千騎は、共々に趙の城壁を空虚にし、或は大將の旗大鼓を目掛け、或は韓信張耳を目掛けて、我れ勝ちに第一の功名をせむとて、利益を逐へるを伺ひて、山影より乗り出で、逸散に趙の城壁へ馳せ入りて、皆趙の旗を抜き去り、漢の赤旗二千本を押し立てぬ。趙の軍勢は、己に勝利なく、又韓信等を手に入る、こと能はざりしかば、餘儀なく、己の城壁に歸らむと思ひ、其方角へ引き返して何心なく城壁を望めば、城壁の上に立ちたるは、皆漢の赤旗なりければ、大いに驚きて、漢は皆己に趙王の將を生け捕りたりと思ひたり。其兵卒は、遂に亂れ

立ちて、右往左往に通け走りたれば、趙の將は、其の逃ぐるものを片端より切り棄てたれど、之を止むること能はざりにき。是に於て漢の兵は前後より狭み撃ちとなし、大いに破りて、趙の軍勢を生捕り、成安君の陳餘を泚水の川端に切り棄て、趙王の歌を生け捕りぬ。(第二小段)

是に於て韓信軍中に號令して曰く、「廣武君の李左車を殺すことなかれ。能く之を生ながら手に入れたるものあらば千金に買ひ取らむ」と。この一言に、廣武君を縛りて、韓信の旗下に差し出したるものありければ、韓信は約束通り、金を渡して、廣武君を引き取り、其の繩目を解きて、東へ向ひて、師匠の位に坐せしめ、己は、西へ向ひて、弟子の位に就き、相對して之に師として事へたりき。諸將は銘々に、切り首並びに生捕を大將の旗下に差し出して、一先ず休息したる後、一同に勝ち軍の悦びを述べ、さて、韓信に尋ねて曰く、「兵法に、山陵を或は右手に取り、或は後へに控へ、水澤を或は前に控へ或は左手にとりあり。然るに此の度將軍は、臣等をして此原則と反對に、水を後に控へて陣取らしめられて、曰く、「趙を破りたる後一堂に會して十分に飲食せむ」と。臣等は將軍の命令なれば、背く譯には行かぬども、心の中に服せざりき。さりながら、終に其命令の儘にして勝てり。之は如何なる計なるぞ」と。韓信の曰く、「此仕方亦兵法の中にあり。念ふに、諸君は氣を付て見ざるのみ。兵法に云はずや。士卒を死地に陥し入れたる上にて生かし、士卒を亡地に置きたる上にて存すと。戰

争と云ふ者は、死地亡地の必死の場所に戰士を引き入れ却つて之を活かすことあり。しかのみならず、吾は、俄かに取り立てられて、大將となりたることなれば、兼ねてより吾が手懐けたる士太夫を率ゐたるにはあらざる也。此れ世間にて取り沙汰せる言葉、「平生軍の心得なき市中の人を驅り立て、これを戦はしむ」といつたやうなものなれば、其勢之を死地に置きて、人々をして、自から必死に戦はしむることをせずして、今これに生地を與へて、自由自在に活きらるゝやうにせば、皆思ひ々に、遁げ走らむ。さらば、何とて、尙之を用ゐることを得べき。決して役に立たざるなり。此譯なれば、諸君を生地に置かずして、死地に置き、遂に勝利を得たるなり」と。諸將之を聞きて、皆感服して曰く、「至極尤もなり。將軍の妙案は、臣等の企て及ぶ所にあらざるなり」と。(第三小段)

【批評】……唐順之の評に曰く、信の井陘に戰ふ情狀を模寫せること、殆んど盡せりと。

### ◎ 猛虎猶豫

〔大意〕……蒯通極力韓信にすゝむるに漢を討つべきを以てす。機の逸すべからざるを以てす。而るを韓信猶豫して漢を討たず。却つて自らを滅すの破目に陥れり。しかしそは後のことにして、この蒯通の言まことに名文なり。玩味すべし。

後數日、蒯通復説曰、夫聽者事之候也。計者事之機也。聽過計失、而能久安者鮮矣。聽不失一二者、不可亂以言。計不失本末者、不可紛以辭。夫隨厮養之役者、失萬乘之權。守儋石之祿者、闕卿相之位。故知者決之斷也。疑者事之害也。審毫釐之小計、遺天下之大數。智誠知之、決弗敢行者、百事之禍也。故曰、猛虎之猶豫、不若蜂蠆之致螫。騏驥之踟躕、不如駑馬之安步。孟賁之狐疑、不如庸夫之必至也。雖有舜禹之智、吟而不言、不如瘖聾之指麾也。此言貴能行之。夫功者難成、而易敗。時者難得、而易失也。時乎時、不再來。願足下詳察之。韓信猶豫、不忍倍漢。又自以爲功多、漢終不奪我齊。遂謝蒯通、蒯通説不聽。已佯狂爲巫。

〔摘釋〕…〔候〕…何ふ。〔紛〕…紛亂す。〔隨厮養之役〕…新割り飯焚きなどの雜役に從事すること。〔守儋石之祿〕…儋は擔に同じ。一人にて負擔せらるゝ一石ばかりの微祿を大切に守るなり。〔毫釐〕…十絲を毫とし、十毫を釐とし、十釐を分とし、十分を寸とす。毫釐は、極めて少なきことなり。〔蜂蠆之致螫〕…蠆は尾の長き蜂。蠆は毒を行ふ。蜂又は蠆の毒ある劍にて人を刺す。〔騏驥〕…騏は、毛色の青黒き駿馬。騏は一日に千里を行く駿馬。〔踟躕〕…前足にて一つ所を踏みて先へ出でぬさま。〔駑馬〕…最も下等なる馬。〔吟〕…嘖と通ず。口をつぐむ。〔指麾〕…指揮する。〔巫〕…祈禱者。女を巫と

いひ、男を祝といふ。此の處にては、男子に通じて言ふ。

〔通釋〕…韓信蒯通の厚意を謝して曰く、「先生暫らく休息せられよ。吾が此の後の進退今より篤と勘考せむ」と。〔前節抄〕…其後數日立ち、蒯通重ねて韓信に説いて曰く、「一體人の言葉を聽き取るは、物事の可否を伺はむがためなり。己の心に考へ計るは、物事の機會をば定めんが爲めなり。故に、人の言葉を聽き取るに聽き損じあり。己の心に考ふるに計り損じありて、能く長久にして安全なるものは、昔より其例乏し。之に反して、人の言葉を聽き取るに、十中一二をだも聽き損ぜざるものは、言葉をもて之を感亂せられぬなり。己の心に考へ計るに、其本と末とを計り損ぜざるものは、言葉をもちて之を紛亂せられぬなり。又一體新割り飯焚きなどの雜役に從事するものは、一萬輛の兵車を持つる大國の君主の威勢を失ひて一生人に使役せらるゝなり。一人にて負擔せらるゝ一石ばかりの少祿を大切に守るものは、卿相の爵位を缺きて、一生人の下風に立つなり。されば、智慧とは決斷すべきことを能く決斷することなり。疑惑は物事の障害なり。一毫一釐の極めて少なき勘定を綿密にして、天下の利害に關係する大勘定を忘るか。さなくば、智慧は誠に其大小の差別を知りながら、決斷して之を押し切りて行はざるは、百事に就きての禍なり。されば、古人の言葉に曰く、「猛烈なる虎は、恐るべきものなれども、其の遲疑して、人に飛び掛らざるは、蜂又は蠆の如き小蟲の毒ある劍にて、入を

刺すにも及ばざるなり。稀代の駿馬も踟躕として、前足にて一つ所を踏みて、さきへ出でざるは、最も下等なる駑馬の安靜に歩行するにも及ばざるなり。麒麟の狐の如く疑ひ深く、右を顧み左を顧みて、即座に勇を振はざるは、凡庸なる匹夫の「ナニツ」と意氣込みて事をなすものには及ばざるなり。昔の聖人の帝舜、さては夏の禹王の如き、智慧ありと云ふとも、口をつぐみて發音せずば、物の言はれぬ啞者、耳の聞えぬ聾者の人を指揮するにも及ばざらむ」と。此數事は、皆能く之を決斷實行することを貴ぶことを言へるなり。抑々、人の手柄は、成就し難くして、失敗し易く、時機は、手に入り難くして、取り失ひ易し。時なるかな、一たび時を失へば、再び廻り來らざるなり。願はくば足下の詳細に之を考察せられむことを」と。劄通は此の如く、言葉盡して韓信に自立の計を勧めたれど、韓信は猶豫遲疑して、流石に漢に背き兼ねたるが上に、又自から漢に對する手柄多ければ漢漢は遂に我が齊を奪ひ取ることなからむと思ひたれば、遂に劄通に以後は助言をせぬやうにと斷りたり。劄通は、吾が説の聽き入れられざるをもて、後難の來らむことを氣遣ひて、其後發狂人の真似をして、祈禱者となりて世を忍びたり。

【批評】……一、撰者曰く、只々決斷の貴ぶべきをのべたるなれ共、讐を取りて反覆し、人情の言ひ難き所を極めたる、英文達文といふべし。

◎上與信言諸將能不

信常稱病不朝。從知漢王畏惡其能。信由此日怨望。居常鞅鞅羞與絳灌等列。信常過樊將軍噲噲跪拜送迎。言稱臣曰。大王乃肯臨臣。信出門笑曰。生乃與噲等爲伍。上常從容與信言。諸將能不各有差。上問曰。如我能將幾何。信曰。陛下不過能將十萬。上曰。於君何如。曰。臣多多而益善耳。上笑曰。多多益善。何爲爲我禽。信曰。陛下不能將兵而善將將。此乃信之所以爲陛下禽也。且陛下所謂天授非人力也。

(通釋)……韓信は、漢王が己の才能を畏れて、惡み憚り玉へることを知りたれば、其後は、常に病氣なりと申立て、參朝をせず、隨行をもせざりけり。又韓信は、漢王の今度の御處置に由り、毎日怨みて不足に思ひ、いつも鞅々として、不平なる様子に朝夕を送り、降侯の周勃及び灌嬰等と一座に列なることを面目なく思ひぬたり。韓信嘗て將軍の樊會の許に立ち寄りしに、樊會は兩膝を地につけて、拜禮して送り迎へぬ。かくて自から言ひて臣と稱して曰く、大王には、臣が家に光臨したまふ

ことを御承知ありて、有り難く存ずるなり」と。韓信樊會の門より出で、打ち笑ひて曰く、「われは此世に生き長らへて、樊會などの仲間になりぬ。さても心外なることよ」と。主上或る時、從容として落ち付きたまひて、韓信と共に、諸將の働きあること、なきことを話し合ひたまひて、それらに其階級の差ありけるが、さて、主上には、韓信に尋ねたまひて曰く、「我れの如きものは、能く幾人程の兵に將たるべき器量あるか」と。韓信の曰はく、「陛下には、能く十萬人に將たるに過ぎたまはざる也」と。主上の曰く、「汝に於ては何程なるか」と。韓信の曰く、「臣は兵の多ければ多き程、益々上手に使ふ事能ふのみ」と。主上笑ひたまひて曰く、「兵數の多ければ多き程、益々上手に使はるゝ者が、何とて僅かに十萬人に將たるに過ぎざるわれに生け捕れたるか」と。韓信の曰く、「陛下には兵に將たること能はざれども、能く將軍共の上に立ちて、總大將となりたまへる御器量あり。是れ吾が陛下に生け捕られたるわけなり。しかのみならず、陛下には、世間にて取り沙汰せる天より徳を授けられたるお方にて人の力の及ぶところにはあらざる也」と。

◎ 跖之狗吠堯

〔大意〕…韓信の死する際の言葉「蒯通の計を用ひざりしを恨む」より、蒯通引出さる。且に煮

られんとす。蒯通曰く「われ當時知れるものとは韓信のみにて、陛下など存せざりしなり。跖の犬知らざれば堯に吠えつくに同じ、故に陛下を討つの工夫を教へしまでなり」と。この申開よかりし爲、蒯通煮られざりきといふ。

高祖已從豨軍來。至見信死。且喜且憐之。問信死亦何言。呂后曰。信言恨不用蒯通計。高祖曰。是齊辯士也。乃詔齊捕蒯通。蒯通至上曰。若教淮陰侯反乎。對曰。然。臣固教之。豎子不用臣之策。故令自夷於此。如彼豎子用臣之計。陛下安得而夷之乎。上怒曰。烹之。通曰。嗟乎。冤哉。烹也。上曰。若教韓信反。何冤。對曰。秦之綱絕。而維弛。山東大擾。異姓竝起。英俊烏集。秦失其鹿。天下共逐之。於是高材疾足者先得焉。跖之狗吠堯。堯非不仁。狗固吠非其主。當是時。臣唯獨知韓信。非知陛下也。且天下銳精持鋒。欲爲陛下所爲者甚衆。顧力不能耳。又可盡烹之邪。高帝曰。置之。乃釋通之罪。

鹿謂天下也

〔摘釋〕…〔豎子〕…小僧の意。〔綱絶而維弛〕…法令の行はれぬやうになること。〔失其鹿〕…獵にて鹿を取り逃がしたること。帝位を失ひたるに譬ふ。〔高材疾足〕…身の長の高くて、足の早きなり。拔群の人物に譬ふ。〔鋭精〕…精緻を鋭利



にする。兵刃を鍛錬するなり。

(通釋)……高祖には、已に陳豨の征伐をしまひて、長安の都へ還幸したまひ、韓信の死亡せしを見たまひて、且は其危険を除きたるを喜びたまひ、且は其功勞の大にして、殺されたるを憐みたまひて「韓信の死なむとするときには、亦何事をか言ひたりや」と、呂后に尋ねたまひしに、呂后の曰く「韓信は、蒯通が『天下を三つ分けにせよ』と言ひたる計策を用ゐざりし事を残念に思ふ。」と言ひたりと。高祖の曰く、「其蒯通と云ふものは、齊の國の辯士なり」と。是に於て、齊の國に詔を下したまひて、蒯通を召し捕らせられき。蒯通召し捕られて到着せしに、主上には之を召し出したまひて、仰せられて曰く、「汝は淮陰侯に謀反せることを教へたるか」と。蒯通對へて曰く、「さなり。臣は申すまでもなく之を教へたり。さるを、彼の小僧は、臣が計策を用ゐざりしが故に、自ら我が三族を自滅せしめたり。若し彼の小僧にして、臣が計策を用ゐば、陛下はいかで、其三族を誅滅したまふことを得べき」と。主上には怒りたまひて、左右の人に仰せられて曰く、「それなる蒯通を烹殺すべし」と。蒯通之を聞きて曰く、「あゝ無實の罪なるよ。烹殺さるゝとは」と。主上の曰く、「汝は韓信に謀反せむことを教へたり。何ぞ無實の罪なるべき」と。蒯通對へて曰く、「秦の法令行はれぬやうになりて、華山より東の方の郡縣、大いに擾亂し、秦の天子と姓の異なる人々並び起り、英雄俊傑、鳥の如くに集ま

りしに、秦は、遂に其の手に在りたる鹿を取り逃がし、帝位を失ひたれば、天下中の人々共々に之を逐ひ掛けたり。是に於て、其人々の中にて、身の長高く、足早くして拔群の働きあるもの、其鹿を手に入れ、帝位を得て、秦に代りて天子となりぬ。是即ち陛下なり。全體、人の主君に忠なるは、狗の主人に忠なるが如し。大悪人の盜跖に飼はれたる狗の大聖人の帝堯を吠ゆるは、帝堯の不仁なるが爲めに吠ゆるにはあらず。狗は固より其主人にあらざるものを吠ゆるなり。此華山より東の郡縣の大いに擾亂せるときに當りて、臣は、唯々獨り韓信あることを知れるのみ。陛下を知れるにはあらざるなり。されば臣が韓信に忠にして、陛下に不忠なりしは、盜跖の犬の帝堯を吠ゆるに異ならず。しかのみならず、天下中に精鐵を銳利にし、手に鋒を持ちて、戦争をして、陛下の天下を取りたまへるが如き仕事をしたしと思ひたるもの、甚だ多かりしかど、其の目的を達せざりしは、念ふに其の力量の之を能くするに足らざるに由るのみ。若し同等の力量あらば、決して陛下に譲らざらむ。然るを陛下は此人々をも不埒ものなりとして、又残らず之を烹殺したまふべきか。若し此人々を残らず烹殺されじとならば、臣が無實の罪なることは明白ならむ」と。高祖此答に感服し玉ひて曰く、「蒯通の罪を捨て置けよ」と。斯く仰せありて蒯通の罪を赦免せられたり。

【批評】……一、撰者曰く秦の鹿蹄の狗の喻へ、照應頗る巧みにして史記文章中の、この方面に於ける代表的佳章なりといひつ

べし。且つ最後の結尾生色ある點みのがすべからず。

### 二五 酈生、陸賈列傳

#### ◎沛公麾下騎士

〔大意〕…酈生沛公に見ゆ。沛公偃牀以て兩女をして足を洗はしめつゝ見んとす。酈生「足下の上秦を助けんとするか、秦を滅さんとするか」の苦言に例をかり、大いに長者に禮を以て對せざるべからざるを論ずる條なり。沛公爲に動く。酈生亦偉なるかな。

沛公麾下騎士、適酈生里中子也。沛公時々問邑中賢士豪俊、騎士歸酈生見謂之曰、吾聞沛公慢而易人、多大畧。此眞吾所願從游、莫爲我先。若見沛公謂曰、臣里中有酈生、年六十餘、長八尺、人皆謂之狂生。生自謂我非狂生。  
〔第一小段〕騎士曰、沛公不好儒、諸客冠儒冠來者、沛公輒解其冠溲溺其中。與人言常大罵、未可以儒生說也。酈生曰、第言之、騎士從容言如酈生所誠

者。〔第二小段〕沛公至高陽傳舍、使人召酈生。酈生至、入謁沛公、方偃牀、使兩女子洗足、而見酈生。〔第三小段〕酈生入、則長揖不拜曰、足下欲助秦攻諸侯乎。且欲率諸侯破秦也。沛公罵曰、堅儒夫、天下同苦秦久矣。故諸侯相率而攻秦、何謂助秦攻諸侯乎。酈生曰、必聚徒合義兵、誅無道秦、不宜偃見長者。於是沛公輒洗起、攝衣延酈生上坐、謝之。〔第四小段〕

〔通釋〕…〔溲溺〕…小便をす。〔第〕…但々なり。〔偃容〕…落ち付きたるさま。〔偃牀〕…寢臺に腰を掛けて、兩足を投げ出す。〔長揖〕…兩手を組み、胸先きに當て、頭を下げて會釋せるのみにて、いつまでも其手をくづさぬなり。〔整儒〕…小僧。〔蔽〕…止む。〔攝衣〕…著物の端を揃い、揃いまで威儀を整ふ。

〔通釋〕…〔始め酈生は、沛公の兵に將として、陳留の郊外の土地を略取したまふ由を聞き込みしが〕丁度沛公の旗下の騎士は、酈生の村里の中の子等にして、酈生の爲めには都合よかりき。折から沛公には、然るべき人物を手に入れたしと思し召されて、時々騎士に「汝が村里の中には賢士豪俊の者ありや」と尋ねたまひき。騎士、或る日、暇を賜りて歸宅せしかば、酈生之に面會して、物語りして曰く、「われは、兼ねく汝の君なる沛公は、傲慢にして、人を輕蔑せらるれども、遠大なる謀略多しと聞き及べり。此の様なる人は、眞に吾が隨身して遊び事へむことを願ふ所なり。されど今まで我が爲に

口入をするものなければ、汝、沛公に逢ひたらば、「臣が村里の中に酈生といふものあり。年は六拾餘歳にして、身の丈は八尺もある程の大男なり。村里の人は、皆これを氣違者と噂すれど、酈生は、自から氣違者にあらずと謂へり」と物語りせよ」と。(第一小段)

騎士の曰く、「そは無益なり。沛公は道德仁義を説く儒者を好みたまはず、常に大いに其人を罵り辱めたまへり。されば、まだ御身の如き儒生の議論にては、沛公を説きふせられぬなり」と。酈生の曰く「兎にも角にも、但々我が爲めに沛公に物語りせよ」と。騎士依頼を引き受けて、立ち戻りて、或る日、從容として落ち付きて、酈生より言ひ含められたる通に沛公に物語せり。(第二小段)

沛公騎士の話の聞きたまひて、高陽卿の旅館へ到着したまひ、人をして酈生を召さしめられぬ。酈生參上して、進み入りて謁見せしに、沛公には、寢臺に腰を掛けたまひて、兩足を投げ出したるまゝ、二人の女子をして足を洗はせながら、酈生に面會したまへり。(第三小段)

酈生進み入りて、此の體を見、兩手を組みて胸先に當て、頭を下げて會釋せるのみにて、いつまでも其手をくづさずして曰く、「足下は秦の加勢をして、諸侯を攻めむと思し召さるゝか。又は諸侯を引き連れて秦を破らむと思し召さるゝか」と。沛公之を聞きたまひ、酈生を罵りたまひて曰く、「時勢を知らぬ小僧儒者よ。夫れ天下の人々は、たれかれの差別なく、同じく秦の虐政に苦しみゐること年

久し。されば、諸侯は連れ合ひて秦を攻むるなり。何とて秦に加勢して諸侯を攻むと言ふことあるべき」と。酈生の曰く、「是非共仲間を聚め、義兵を合せて、暴虐無道の秦を誅滅せられむとならば、兩足を投げ出しながら、寛大の長者に逢ひたまふべからず」と。是に於て沛公足を洗ふことを止め、座を起ちたまひて、著物の端を搔い摘まみ、威儀を整へたまひ、やがて酈生を上座へ案内して、其失禮を詫びたまへり。(第四小段)

◎陸生時々前說稱詩書

《大意》……これも名篇也。陸生高帝に對し「馬上に天下をとるも、馬上に天下を治むるは難きこと」とをいふ。引例巧也。第二小段はそれを嘉納しかけたる高帝、陸生に命じて「新語」一篇を著作せしむてふ條也。

陸生時々前說稱詩書高帝罵之曰「泗公居馬上而得之安事詩書」陸生曰「居馬上得之寧可以馬上治之乎且湯武逆取而以順守之文武並用長久之術也昔者吳王夫差智伯極武而亡秦任刑法不變卒滅趙氏」郷使秦已

併天下行仁義法先聖陛下安得而有之。高帝不憚而有慙色。」(第一小段)  
 酒謂陸生曰。試爲我著秦所以失天下。吾所以得之者。何及古成敗之國。陸生迺述存亡之徵。凡著十二篇。每奏一篇。高帝未嘗不稱善。左右呼萬歲。號其書曰「新語」。(第二小段)

【摘釋】…(趙公)…乃公に同じ。おれ。(趙氏)…秦の先祖の造父、趙城に封ぜられたれば、其後、趙を姓とす。【不】…氣分を悪しくする。(塵)…あらまし也。

(通釋)…陸生は高帝の御側にあつて、時々その御前へ進み出で、詩經書經の意味を説きて、其事柄の結構なることを譽め立てたるに、或る日高帝これを罵りたまひて曰く、「われ 武を以て、天下を得たり。何として詩經、書經などの研究を仕事として文弱に流るべき」と。陸生の曰く、「陛下には、馬上に天下を得たまひたればとて、何とて馬上に武を以て、天下を治めたまふことを得べき。文道ならねば、天下は治められぬなり。しかのみならず、昔の殷の湯王は、夏の桀王を放ちたまひ、周の武王は、殷の紂王を弑したまひて、武の逆道をもて天下を取りたまひ、文の順道をもて天下を守り保ちたまひき。されば、文道と武道とを並び用ゐるは、天下國家を長久にする手段なり。昔吳王の夫差および晋の家老の智伯は、武の一方のみを極めて盡して滅亡しき。又は秦嚴酷なる刑罰法律に一任し

て天下を奪ひ取りて、其武斷なる仕方を變更せざりしが故に、遂に天下の人心を失ひて、祖先以來の趙氏の家名を滅亡しき。嚮に秦をして、已に天下を併合して、仁義の道を行ひて、古先聖王の仕方を手本として、詩、書、禮、樂、を事とせしめば、葛氏は皆の秦の政事に歸す筈なれば、陛下は、いかで其天下を御身のものとしたまふ事を得んや。秦の天下を陛下の爲めに取られたるは、全く文を重んぜざりし結果なり」と。高帝之を聞きたまひて甚だ氣分を悪くしたまひて、其失言を慙ち入りたまふ御様子なりき。

さて、高帝には、陸生に物語したまひて曰く、「汝試みに吾が爲めに秦が天下を失ひし譯と、吾が其天下を得たる譯とは、何故なるかのわけ、及び其の成功せし國と失敗せし國との細かき比較を著はして見よ。吾は参考にせん。」と。陸生委細承知して御前を退き、やがて著述に取りかゝりて、昔より國家の興敗存亡せし證據のあらまし述べ、總體にて凡そ十二篇を著はしぬ。其一篇を奏進する毎に高帝これを聞こし召されて、一度も「至極尤もなり」と仰せられざりしことなく、常に常に「至極尤もなり」と仰せられたれば、左右近臣高帝の御心の文事に傾きたまへるを有り難く思ひて、皆「萬歲」と呼び上げて、前途を祝し奉りぬ。さて、高帝には、今まで斯かる明論を聞きたることなしと感じたまひて、其書物に「新語」といへる題號を下されたりき。